

大阪市平野区

瓜破遺跡発掘調査報告

Ⅲ

大和川改修事業に伴う発掘調査報告書

2003.3

財団法人 大阪市文化財協会

大阪市平野区

瓜破遺跡発掘調査報告

Ⅲ

大和川改修事業に伴う発掘調査報告書

2003.3

財団法人 大阪市文化財協会

『瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲ 正誤表

頁	行・位置	誤	正
本文9	表1 遺構の項	[←乾根、落込み…NR01・02…]の位置	第5層の欄まで下げる
本文10	3行目	第1ii層の基底面において、	第1ii層の基底面および第5層上面において、
本文16	1行目	中期後葉の北白川上層Ⅱ～Ⅲ式	後期中葉の北白川上層式2～3期
本文18	中ほど見出し	2) SD03(SD04)・SK01出土遺物(図14～20…)	2) SD03(SD04)・SK01出土遺物(図14～21…)
本文26	17行目	第Ⅱ様式の <u>新段階</u>	第Ⅱ様式
本文42	17行目	第Ⅱ様式の <u>新段階</u>	第Ⅱ様式
本文43	見出し	5) 弥生時代中期…(図6・39…)	5) 弥生時代中期…(図6・23・39…)
	6行目	幅は約1.8mで、	幅は約0.5mで、
索引	お	近江型…25, 36	近江型…25, 37
	き	北白川上層Ⅱ式 北白川上層Ⅲ式	北白川上層式2期 北白川上層式3期
図版21	脚注	土師器：SD05(329・330)… 瓦器：SD06(332)	土師器：SD05上位(329・330)… 瓦器：SD06上位(332)
図版22	脚注	埴：SK02(322)	平鍛未製品あるいは埴：SK02(322)



UR00-11次調査地〔Ⅰ区〕と大和川（東から）

大阪市平野区

瓜破遺跡発掘調査報告

Ⅲ

大和川改修事業に伴う発掘調査報告書

2003.3

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

瓜破遺跡は、近畿地方を代表する弥生時代の遺跡として広く知られてきた。近年、周辺地域の開発が進み、それとともに瓜破遺跡内でも発掘調査が数多く実施されるようになった。その結果、弥生時代だけでなく、長期にわたって営まれた遺跡として認識されるにいたった。これまでにさまざまな発見があったが、特に、東南地区で見つかった飛鳥時代の掘立柱建物群は、律令国家成り立ちにおける地域支配の一端を示す貴重な考古資料である。最近では、東北地区の埋没谷から、きわめて保存状態がよい古墳時代の鉄鎌や刀子が出土したことが記憶に新しい。

今回、約50年の歳月を経て、瓜破遺跡が世に知られるきっかけとなった大和川の河川敷で再び調査を行った。弥生時代の集落に係わる新たな資料が加わるとともに、これまでの研究成果を原点に立ち戻って省みる機会を得たことは、瓜破遺跡の全体像を再現する上で重要な意味をもつと思われる。

末筆ながら、発掘調査および本書の作製にご協力をいただいた国土交通省近畿地方整備局、ならびに関係各位に心より御礼を申し上げます。

2003年3月

財団法人 大阪市文化財協会
理事長 脇田 修

例 言

- 一、本書は財団法人大阪市文化財協会が国土交通省近畿地方整備局の委託を受け、2000年10月～01年2月と2001年10月～02年3月の2回にわたって平野区瓜破南1丁目で実施した発掘調査(UR00-11次・UR01-17次、URは瓜破遺跡を示す)の報告書である。
- 一、発掘調査と報告書作成の費用は、国土交通省近畿地方整備局の負担による。
- 一、発掘調査は、財団法人大阪市文化財協会調査課長京嶋覚の指揮のもと、UR00-11次調査は同課小倉徹也と辻美紀が、UR01-17次調査は同課大庭重信が担当した。なお、調査の面積・期間については第Ⅱ章に記す。
- 一、本書の作成は2002年4月1日～03年3月10日に、長原事務所長高橋工の指揮のもと、辻が小倉・大庭との協議のうえ行った。花粉分析と種実・樹種・昆虫の同定についてはバリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。その同定・分析結果は第Ⅳ章第1節に収録した。
- 一、第Ⅲ章で記載した石器の岩種同定は川端清司(大阪市立自然史博物館)の協力のもと小倉が行い、第Ⅲ章第2節2)の縄文土器の理解については報告書作成室長松尾信裕の助けを得た。また、第Ⅲ章第3節の弥生時代の遺構・遺物については喜谷美宜(大阪国際女子大学)・佐々木憲一(明治大学)・西村公助(八尾市教育委員会)・濱田延光(寝屋川市教育委員会)・濱野俊一(茨木市教育委員会)・森岡秀人(芦屋市教育委員会)・三好孝一(大阪府文化財センター)・若林邦彦(同)諸氏の教示を得た。謹んで御礼を申し上げる。
- 一、基準点測量および写真測量はUR00-11次調査についてはアジア航測株式会社に、UR01-17次調査については株式会社かんこうに委託した。
- 一、遺構写真は担当調査員が撮影した。遺物写真の撮影は杉本和樹氏に委託した。
- 一、発掘調査で得られた出土遺物、図面・写真などの資料は当協会が保管している。
- 一、発掘調査から本書の作成に係わる作業には補助員諸氏の援助を得た。深く感謝の意を表したい。

凡 例

1. 本書ではUR00-11次調査の調査区をⅠ区、UR01-17次調査の調査区をⅡ区と呼称する。なお、Ⅰ区で検出した遺構については、図版の脚注において調査区名を冠することを割愛した。
2. 本書で用いた層位学・堆積学に係わる用語は[趙哲済1995]に準じる。また、本書で示した長原遺跡標準層序との対比は[趙哲済2001]に拠った。長原遺跡標準層序の表記は、本文中では長原○層、図表等ではNG○層とした。瓜破標準層序との対比は[趙哲済1983]に拠り、UR○層と表記した。
3. 遺構名の表記は、溝・流路(SD)、土坑(SK)、自然流路(NR)の分類記号の後に通し番号を付している。
4. 遺物には本書での通し番号を順に付した。石器遺物の用語は[大阪市文化財協会2000]に従った。
5. 水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP±○mと記した。また、挿図中の方位は座標北を示し、座標値の記載のあるものは従来の日本測地系に基づく国土平面直角座標(第Ⅵ系)の値である。
6. 本書で用いた地層の土色および土器の色調は[小山正忠・竹原秀雄1967]に従った。
7. 本書で頻繁に用いた土器編年や器種分類は次の文献に拠っている。本文中では煩雑さを避けるため、これら引用・参考文献をその都度提示することは割愛した。弥生土器：[寺沢薫・森井貞雄1989]、飛鳥・奈良時代の土器：[奈良国立文化財研究所1976]・[古代の土器研究会1992]、鎌倉・室町時代の土器：[鈴木秀典1982]

本文目次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章 遺跡の立地環境と既往の調査	1
第1節 遺跡の立地と歴史的景観	1
第2節 瓜破遺跡西地区の既往調査	3
第Ⅱ章 調査にいたる経緯と経過	5
第Ⅲ章 調査の結果	7
第1節 調査地の層序	7
第2節 後期旧石器時代から縄文時代の遺構と遺物	10
1) 縄文時代の遺構	10
2) 後期旧石器時代から縄文時代の遺物	10
第3節 弥生時代の遺構と遺物	18
1) I区東部検出遺構	18
2) SD03(SD04)・SK01出土遺物	18
i) SD03(SD04)の遺物	
ii) SK01の遺物	
3) I区西部・川岸調査区検出遺構	27
4) SD05・SD06・SD08・SK02出土遺物	29
i) SD05の遺物	
ii) SD06の遺物	
iii) SD08・SK02の遺物	
5) 弥生時代中期以降の遺構と遺物	43
6) 小結	45
第Ⅳ章 遺構と遺物の検討	47
第1節 瓜破遺跡(UR00-11・01-17次調査)の自然科学分析	47
1) 調査目的	47
2) 試料	47

3) 分析方法	50
i) 花粉分析	
ii) 種実同定	
iii) 樹種同定	
iv) 昆虫同定	
4) 分析結果	50
i) 花粉分析	
ii) 種実同定	
iii) 樹種同定	
iv) 昆虫同定	
5) 考察	56
i) 古植生推定	
ii) 有用植物	
iii) 昆虫化石	
iv) 樹種構成と用材	
第2節 調査成果のまとめ	66
引用・参考文献	68
あとがき・索引	
英文目次・要旨	

原色図版目次

出土遺物

上：弥生土器-「瓜破式」

下：弥生時代の石器

図版目次

- 1 UR01-17次調査(Ⅱ区) NR01ならびに遺物出土状況
 - 上：調査区全景(南西から)
 - 中：NR01断面(北壁西部、南西から)
 - 下：NR01縄文土器出土状況(中央部、西から)
- 2 UR01-17次調査(Ⅱ区) 石器遺物ならびに足跡化石検出状況
 - 上：NR01西側付近第3層内石器出土状況(中央部、西から)
 - 中：第7層内搔器5出土状況(西部、南から)
 - 下：第10層内ソウ足跡化石検出状況(東部、南から)
- 3 UR00-11次調査(Ⅰ区) 南壁断面
 - 上：南壁東部(北西から)
 - 中：南壁中央部(北から)
 - 下：南壁中央部深掘りトレンチ内(北から)
- 4 UR00-11次調査(Ⅰ区) 第5層上面
 - 上：NR04(東部、北西から)
 - 中：NR05(中央部東、北西から)
 - 下：第5層上面検出状況(西部、西から)
- 5 UR00-11次調査(Ⅰ区) 第1ii層基底面
 - 上：調査区全景(手前SD02、東から)
 - 中：SD01(中央部、北東から)
 - 下：SD01東側流木出土状況(中央部、西から)
- 6 UR00-11次調査(Ⅰ区) 弥生時代の遺構
 - 上：SD03(東部、南西から)
 - 中：SD03断面(東部、西から)
 - 下：SK01(東部、北から)
- 7 UR00-11次調査(Ⅰ区) 弥生時代の溝ならびに土器出土状況
 - 上：SD05(西部、北から)
 - 中：SD06(手前)とSD05(西部、西から)
 - 下：SD06弥生土器壺288出土状況(拡張区4W、東から)
- 8 UR00-11次調査(Ⅰ区) 弥生時代の遺構ならびに遺物出土状況
 - 上：SD07(西部、西から)
 - 中：SD08・SK02(手前はSD05、川岸調査区、西から)
 - 下：SD08・05合流地点弥生土器出土状況(川岸調査区、北から)
- 9 後期旧石器・縄文時代の遺物
- 10 縄文時代の石器遺物
- 11 弥生時代の石器遺物(一)
- 12 弥生時代の石器遺物(二)
- 13 弥生時代の石器遺物(三)
- 14 弥生時代の石器遺物(四)
- 15 弥生時代の土器(一)
- 16 弥生時代の土器(二)
- 17 弥生時代の土器(三)
- 18 弥生時代の土器(四)
- 19 弥生時代の土器(五)
- 20 弥生時代の土器(六)
- 21 弥生時代の土製品・弥生時代中期以降の土器
- 22 弥生時代の木製品

挿 図 目 次

図1	瓜破遺跡の位置	1	図22	弥生時代の遺構(Ⅰ区西部・川岸調査区)	27
図2	瓜破遺跡と周辺の環境	2	図23	Ⅰ区西部・川岸調査区検出遺構断面	28
図3	瓜破遺跡の各地区と近隣の遺跡	3	図24	SD05出土石器(1)	30
図4	UR00-11・01-17次調査地と周辺の既往調査	4	図25	SD05出土石器(2)	31
図5	Ⅰ区南壁・Ⅱ区北壁断面	8	図26	SD05出土弥生土器(1)	32
図6	Ⅰ・Ⅱ区検出遺構位置図	11	図27	SD05出土弥生土器(2)	33
図7	NR01(Ⅱ区)断面	12	図28	SD05出土弥生土器(3)	34
図8	NR02・NR03(Ⅱ区)断面	13	図29	SD05出土弥生土器(4)	35
図9	NR05・SD01(Ⅰ区)断面	14	図30	SD05出土弥生土器・土製品	36
図10	SD02(Ⅰ区)断面	15	図31	SD05出土木製品	37
図11	後期旧石器と縄文時代の石器	16	図32	SD06出土弥生土器(1)	38
図12	縄文土器	17	図33	SD06出土弥生土器(2)	39
図13	弥生時代の遺構(Ⅰ区東部)	19	図34	SD06出土遺物	40
図14	SD03出土石器(1)	20	図35	SD06出土木製品	41
図15	SD03出土石器(2)	21	図36	SD08・SK02出土石器	42
図16	SD03出土弥生土器(1)	22	図37	SD08・SK02出土弥生土器・土製円板	43
図17	SD03出土弥生土器(2)	23	図38	SD08・SK02出土木製品	44
図18	SD03出土弥生土器(3)	24	図39	弥生時代中期以降の遺物	45
図19	SD03出土弥生土器・土製円板	25	図40	分析試料採取位置図	48
図20	SD03・SD04出土弥生土器	26	図41	調査地点の層序および試料採取位置	49
図21	SK01出土弥生土器	26	図42	各地点の花粉化石群集の層位分布	52

表 目 次

表1	UR00-11・01-17次調査層序表	9	表4	種実同定結果一覧	54
表2	花粉分析試料一覧	48	表5	樹種同定結果一覧	55
表3	花粉分析結果一覧	51	表6	昆虫同定結果一覧	57

写 真 目 次

写真1	調査区の設定(Ⅰ区)	5	写真7	石器調査(Ⅱ区)	6
写真2	重機掘削のようす(Ⅰ区)	5	写真8	第5層上面で検出した乾痕(Ⅰ区)	7
写真3	掘削土の搬出(Ⅰ区)	5	写真9	A・D地点花粉化石の保存状態	62
写真4	体験発掘①(Ⅰ区)	5	写真10	花粉化石と昆虫化石	63
写真5	体験発掘②(Ⅰ区)	6	写真11	大型植物遺体	64
写真6	拡張区4E(Ⅰ区)	6	写真12	木材の細部	65

第Ⅰ章 遺跡の立地環境と既往の調査

第1節 遺跡の立地と歴史的景観

瓜破遺跡は、大阪市の南東部に位置する瓜破地域(平野区瓜破・瓜破東・瓜破西・瓜破南)一帯に広がる後期旧石器時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。その範囲は東西1.7km、南北1.6kmに及ぶ。この辺りは旧大和川流域に展開する河内平野遺跡群の南西端に当り、瓜破遺跡の北西には瓜破北遺跡、北東には喜連東遺跡、東には長原遺跡が隣接する(図1・3)。

瓜破遺跡を地形でみると、南北に延びる河内台地のうち現大和川以北に当る瓜破台地と、その前面に広がる河内平野にまたがっている(図2)。河内・瓜破台地は、最終氷期に「古天野川」によって形成された扇状地がそれ自身の侵食で段丘化して成立したと考えられており、おもに中段段丘面で構成される[足利健亮1985]。中段段丘面は南から北に向って緩やかに低くなり、瓜破遺跡の北端付近で沖積平野の地下に埋没する。台地上には凹凸があり、複数の開析谷(馬池谷・東谷・西谷ほか)が刻み込まれている。また、台地の東西には東除川と西除川が流れる。ちなみに、これらの川の源流が台地の南に位置する現在の天野川である。台地東側の東除川流域は、中段段丘面を削りながら形成された低位段丘構成層が発達しており、台地の東縁と沖積平野部の間には顕著な傾斜変換点がなく、緩やかな地形が広がる。一方、西側の西除川流域は低位段丘構成層が未発達で、台地の西縁は5m前後の比高がある急斜面になっている[趙哲済ほか1992]。台地東西の地形的な差異や台地上の凹凸は、瓜破遺跡内の遺構形成に影響を及ぼしたと認識されており、瓜破遺跡は現在、これら地形の特徴と遺構の分布を考慮して西・東北・東南の3地区に区分されている[大阪市文化財協会2000a]。

考古学史的には、瓜破遺跡は弥生時代の集落跡として戦前から知られていた。1939年、市営瓜破霊園の建設に伴って出土した弥生土器が新聞で取上げられた[東住吉区役所1961、関西大学考古学等資料室1985]のを契機に、翌年には大和川河床で採集された弥生土器が学会で紹介された[山本博1940・1941a・b]。その後、戦前・戦後にわたって、今里幾次や日本考古学協会による発掘調査が大和川河川敷で行われた[今里幾次1942、杉原杜介・神沢勇一1961]。その間、特に弥生時代前期の土器研究が進められ、弥生時代前期後半の土器様式を瓜破遺跡の名を冠して「瓜破式」と呼称することもあった。また、1949年

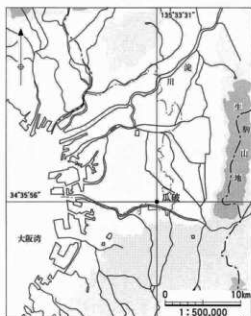


図1 瓜破遺跡の位置

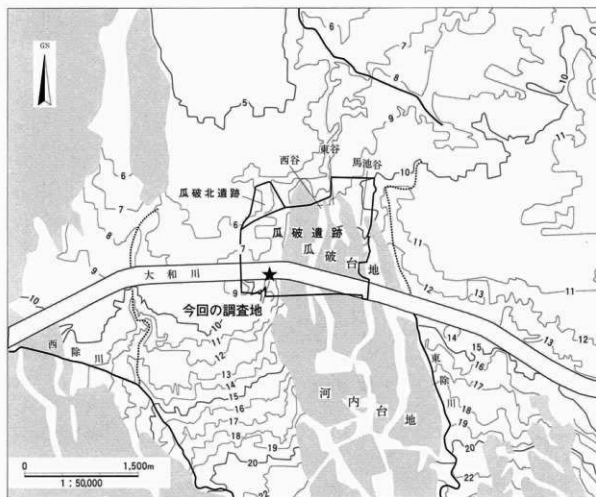


図2 瓜破遺跡と周辺の環境（足利健亮1985に一部加筆）

には、大和川河川敷で採集された中国新代の貨幣「貨泉」が誌上で紹介された[日本考古学会1949]。

周辺地域の開発に伴い、瓜破遺跡で発掘調査が本格化したのは1976年以降である。まず、瓜破遺跡西地区で大阪文化財センターが実施した阪神高速道路松原線建設に伴う試掘調査を嚆矢として、その後5年間に高速道路・共同溝・下水・ガス工事などに伴う10件の調査(UR1～10次)が集中的に行われた[大阪市文化財協会1980・1981・2000a]。特に、阪神高速道路沿いでの調査が飛躍的に増加し、瓜破遺跡の北西側が新たに瓜破北遺跡として命名されるにいった。瓜破北遺跡では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての堅穴住居や掘立柱建物・方形周溝墓が見つかったほか、中国新代の方格規矩鏡や後漢代の内行花文鏡片が出土するなどの成果を挙げた[大阪市文化財協会1983]。また、1986年に東南地区で行われたUR86-11次調査では、7世紀中頃に主体がある溝や柵で囲まれた掘立柱建物群を検出し、瓜破台地東縁部の水田開発・経営に直接関わった集団の住居や管理施設に当たると考えられている[南秀雄1987・大阪市文化財協会2000aほか]。近年、瓜破遺跡内に所在する花塚山古墳の北側、「馬池谷」の南西斜面で行われたUR00-8次調査では、刀子や鏃といった金属製品のほか、土器・木製品・動物遺体など古墳時代中期後半から後期にかけての遺物がまとまって出土し[大阪市文化財協会2002a]、谷内での生産活動を示唆する資料として捉えられている。このように、広範囲にわたって調査が進むに従い、現在にいたるまでの遺構の展開が瓜破遺跡全体で解明されつつある。

第2節 瓜破遺跡西地区の既往調査

瓜破遺跡西地区は地形的には瓜破台地の西側斜面と、さらに西側に広がる平野部に位置し、台地上に当る東北・東南地区とは異なる土地利用方法が採られてきた。ここでは、西地区の調査成果を集約することで、より小地域での土地利用の移り変わりを時代ごとに概観する。

【旧石器時代】西地区における人間の活動痕跡は後期旧石器時代までさかのぼる。大和川にかかる高野大橋の北詰から北へ約400m、瓜破小学校で行われたUR92-28次調査[大阪市文化財協会2000a]では、埋没谷内に堆積する下部沖積層を調査した。その際、約6,300年前に降下したとされる横大路火山灰層の下で、石器製作址に伴うと考えられるサヌカイトのチップが数点見つかった。そのほか、瓜破小学校から西へ約200mの阪神高速道路松原線沿いで行われたUR80-4次調査では、遊離資料であるナイフ形石器が出土した[大阪市文化財協会2000a]。

【縄文時代】前記のUR92-28次調査地では、縄文時代中期から晩期にかけての土器や石器が自然流路からまよって出土し、周辺に当該時代の集落が存在する可能性が指摘されている[大阪市文化財協会2000a]。また、平野部では晩期に堆積作用が活発化することが知られており、同時期の水成層からは突帯文土器の破片がしばしば出土する。

【弥生時代】弥生時代には、西地区南半と瓜破北道路に集落のまとまりがあることが知られる。前者の集落域は現大和川の位置に中心があり、弥生時代前期から後期まで継続すると考えられている。

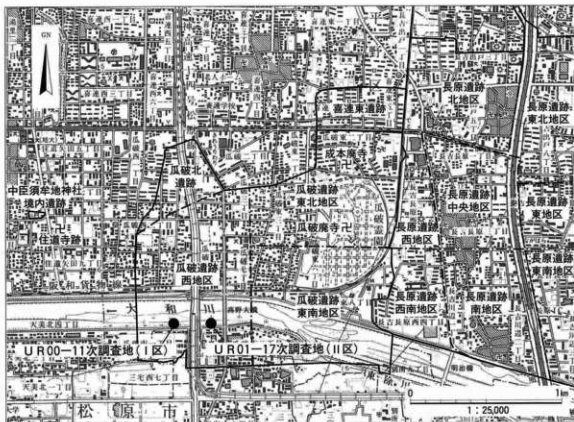


図3 瓜破遺跡の各地区と近隣の道路

阪神高速道路橋脚下で行われたUR6次調査では、弥生時代前期の土墳墓や中期の方形周溝墓を検出し、集落の北側に墓域が広がることを確認した[大阪市文化財協会1983]。また、1996年には大和川以南にも調査の手が及び、UR96-12次調査では弥生時代中期前葉の居住域が[久保和士・宮本康治1997、大阪市文化財協会1999a]、翌年にはその西隣(Ur97-19次調査)で同時期の方形周溝墓や土墳墓が確認され、中期前葉単純期の居住域と墓域が把握された[宮本康治1998、大阪市文化財協会1999b]。

【古墳時代】 西地区ではこれまでのところ、古墳時代の遺構や遺物はほとんど見つかっていない。瓜破北遺跡に弥生時代後期に出現した集落も、中期には途絶える。古墳時代中・後期の遺構や遺物が集中する瓜破台地東縁部[鎌田博子1987、大阪市文化財協会2002aほか]とは対照的である。

【飛鳥・奈良時代以降】 阪神高速道路沿いで行われたUR80-1次調査では、飛鳥時代から奈良時代にかけての須恵器や和同開珎が出土した。そこから西へ300mの地点で実施されたUR90-12次調査でも、土壌内から飛鳥時代の完形の須恵器が検出されている。このように、古代の遺物は西地区で点々と見つかり、集落が存在した可能性が考えられている。また、UR81-1次調査では平安時代の飛雲文軒瓦が出土した[大阪市文化財協会2000a]。

中近世については、西地区全体で作土が確認されており、鳥畠や耕作溝が検出されることが多い。

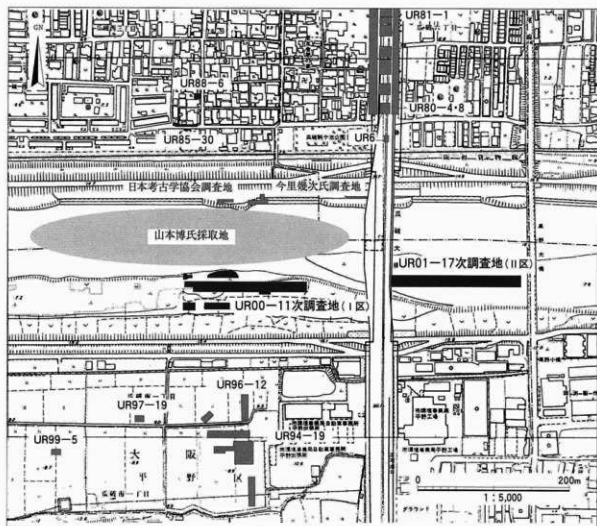


図4 UR00-11・01-17次調査地と周辺の既往調査 (『大阪市地形図』1984年度修正版をもとに作成)

第Ⅱ章 調査にいたる経緯と経過

UR00-11・01-17次調査地は平野区瓜破南1丁目に所在する。調査地は大和川の南側河川敷に位置し、瓜破遺跡西地区の範囲に該当する。調査地を含む河川敷一帯は、瓜破遺跡が弥生時代の集落として知られるきっかけとなった資料採集場所であり、最初に発掘調査が手掛けられた地点でもある。

近年、大和川では、国土交通省(元建設省)近畿地方整備局により、堤防の高規格化や河川改修工事等の一連の災害対策事業が計画的に進められている。今回調査地において、河川敷公園化に関わる改修工事が予定され、それに伴い発掘調査を行うことになった。

UR00-11次調査 工事に先立ち、1999年10月29日と11月2日に試掘調査を実施した。調査範囲は瓜破大橋から西へ約600mの間で、川岸にほど近いところで50mおきにトレンチを13箇所設定した。試掘調査では、現大和川の堆積土直下で弥生時代の遺構や遺物が見つかった。その結果を受けて事業者と大阪市文化財保護課の間で協議がなされ、特に弥生時代の遺物が多く出土した東側に調査区(I区)を設定して本調査を行うことになった。途中、I区の北側で弥生時代の遺物包含層が露出する川岸部分と、I区で検出した遺構の拡がりや新旧関係を調査区外で確認の必要があるところについては、事業者側の了解を得たのち、あらたに調査区(拡張区2~4、図6・写真6)を設定した。調査面積は拡張区を合わせると1,032㎡となった。

本調査は、2000年10月18日から準備工に着手し、河川敷に繁茂する木や草の伐採等を行った。その後、調査区の設定を行い(写真1)、11月8日から重機による掘削を開始した(写真2)。重機掘削は現大和川の河川堆積層(第1層)までにとどめ、掘削が終了した部分から人力による検出面の清掃、ならびに遺構の検出に



写真1 調査区の設定(I区)



写真2 重機掘削のようす(I区)



写真3 掘削土の搬出(I区)



写真4 体験発掘①(I区)

着手した。

調査では、検出した遺構を写真・図面で適宜記録し、出土遺物については平面的な位置・出土地層などを明記した上で取上げながら作業を進めた。12月4日の時点で、調査区の広い範囲にわたって弥生時代の溝が残存することがわかり、同11日から順次掘削を進めた。溝は現大和川の水位より下まで及んでおり、ポンプで水を汲み上げながらの作業となったが、多数の遺物と動植物遺体を検出することができた。弥生時代の遺構については2001年1月11日に写真測量を行った。

その後、拡張区を設け弥生時代の遺構の新旧関係を検討をしつつ、下位の第5層上面でも遺構の検出を行い、縄文時代の流路の存在を確認した。それより下位の地層については、調査区の西部で深掘りを行い、地層の観察をするともにサンプルを採取した。2月23日に一連の調査を終了し、2月28日には埋戻し・整地作業を含むすべての現場作業を完了した。

なお、12月15日には、大阪府立大手前高校の生徒7名が校外学習の一環で発掘作業を体験した(写真4・5)。

UR01—17次調査 UR00—11次調査が進行するなか、2001年2月2日と同5日に試掘調査を実施した。調査範囲は瓜破大橋から東へ約350mの間で、16個所のトレンチを設定した。その結果、縄文時代晩期にさかのぼるとされる古土壌が西部に残存することがわかり、瓜破大橋から高野大橋の間に東西170m、面積850㎡の調査区(Ⅱ区)を設けて本調査を行うことになった。

2001年10月29日に河川敷の草木の伐採を開始し、11月8日より本格的な調査に着手した。まず、現地地表下約2mまで及ぶ現大和川の河川堆積層(第1層)を重機で除去した後、それ以下の地層を人力で掘下げ、遺構・遺物の検出に努めた。その結果、第1層の下には弥生時代の遺構や遺物包含層は現存せず、縄文時代の自然流路が調査区の半分以上を占めていることがわかった。そのため、この流路の精査と中位段丘層上部から沖積層にいたるまでの地層の確認が本調査の主眼となった。下位層へ掘削を進める途中、第7層では1m間隔でグリッドを設定して石器調査を行い(写真7)、サヌカイトの搔器と剥片を検出した。また、第10層の層中ではナウマン象の足跡化石を検出した。その後、現地地表下5.4mまでの地層を部分的な深掘りによって確認し、2002年3月8日にすべての作業を終了した。



写真5 体験発掘②(Ⅰ区)



写真6 拡張区4E(Ⅰ区)



写真7 石器調査(Ⅱ区)

第Ⅲ章 調査の結果

第1節 調査地の層序

現地地表約5.4mまでの地層を観察した(図5、表1、図版1・3)。各層の岩相や長原遺跡標準層序との対応関係を表1に示し、以下に堆積状況などの概略を記述する。

第1層：現大和川の河川堆積層である。なお、周辺の調査で確認されている弥生時代から古墳時代にかけての遺物包含層(UR6Z層)は、調査区全体に広がる地層として本調査区では残存しない。

第2層：やや土壌化した河成層で、Ⅰ区の北西部にのみ分布する。当層から第8層までの層準は基本的に河成層と暗色帯の互層で構成されている。

第3層：第4層を母材とした古土壌で暗色化する。

第4層：河成層である。4i～4iv層に細分できる。第2～4層は長原9B層に相当する。

第5層：暗色帯で、第6層の上部を母材とした古土壌を形成している。長原9C層に当る。

第6層：岩相から6i～6iiiの3層に細分できる河成層で、長原10・11層に当ると判断した。

第7層：主として河成層で、暗色帯を2層挟在する。北側に層厚を増し、南側で収斂して層厚を減ずる。長原12(A・B)層と判断した。

第8層：8i・8ii層に細分される河成層である。Ⅰ区では上面で落込みを検出した。

第9層：暗色帯で2層(9i・9ii層)に区分される。上位の9i層に鬼界アカホヤ火山灰起源の火山ガラスが含まれ、本層準が洪積層と沖積層との境界付近と考えられる。長原12C～13B層に対応する。

第10層：第10・11層は砂泥の互層からなる。低位段丘構成層に当る河成層で、上方に向うにつれ細粒化する。層中で、顕著な干割れの痕やゾウの足跡化石(図版2)を確認した。長原15層に相当する。

第11層：中位段丘構成層に当る河成層で、岩相から11i～11iv層に細分できる。長原16A層に相当すると思われる。

第12層：Ⅱ区で確認された連続堆積する粘土層である。上位の12i層上面ではゾウの足跡化石と思われる凹みを検出した。下位の12ii層は植物遺体を含む泥炭質の粘土層で、東から西へ低くなるとともに層厚を増す。長原16Bi層に対応すると考えられる。

第13層：上方へ細粒化する粘土層で、細分が可能である。長原16Bii層に当ると思われる。

第14層：河成～沼沢地性の地層で2層(14i・14ii)に細分された。14ii層はⅡ区の東部で層厚0.4mまで確認した。長原17層以下に対応する。



写真8 第5層上面で検出した乾痕(Ⅰ区)

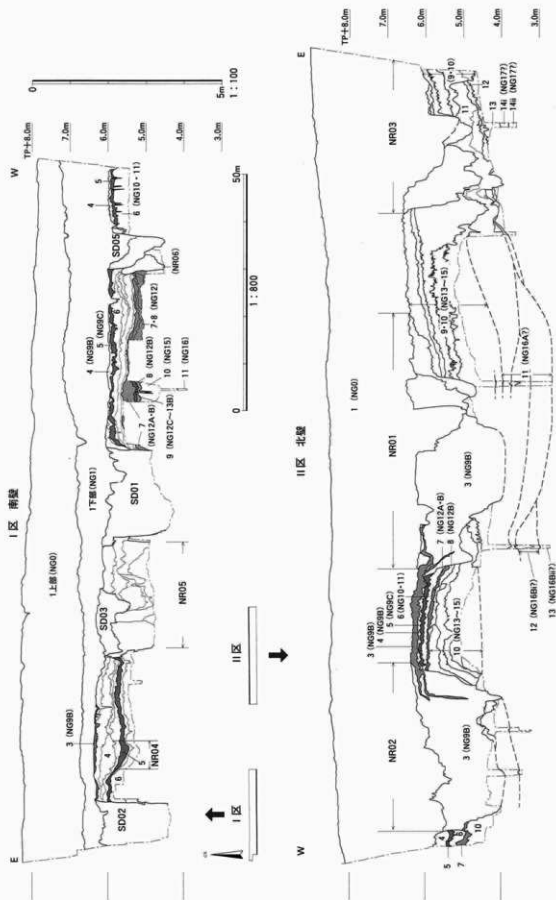


图 5. I 区南壁・II 区北壁断面

表1 UR00-11・01-17次調査層序表

UR00-11・01-17層序	岩相	層厚 (cm)	特徴	遺構	遺物	時代	NG層序との対比
第1層 i	シルト混り粗～中粒砂 (=1層上部)	60～170	最上位には98年の洪水による堆積物がのる	▽SD01-09、SK01-02	コービー缶 (98年) ビニール	現代	現大和川河川敷堆積物 (NG0-1)
ii	砂礫層 (中礫～粗粒砂) (=1層下部)	35～200	礫は重門礫		ビニール、タイヤ		
第2層	黄灰褐色・灰色 粗粒砂混りシルト	≦15			縄文土器 (Ⅱ区) サヌカイト石器		
第3層	暗褐色～黒灰色 細粒砂～粘土質シルト (暗色帯)	≦25	古土壌	↑乾底、落込み、 側溝根 ↑干割れ			
第4層 i	緑灰～黄褐色 シルト～細粒砂混りシルト	≦80	河成層		貝、昆虫	縄文晩期	NG9B
ii	灰色 粗粒砂～中礫 (砂礫) (植物遺体含む)	70～110	流路内堆積物 (NR01・02・NR06)、上方細粒化	↑自然流路 (NR06)	流木・堅果類種子		
iii	灰色 細粒砂～中粒砂	100	植物遺体層を挟む、下位層とは新移的、上方細粒化、流路内堆積物 (NR05)				
iv	灰色 粗粒砂～中礫 (砂礫)	80≦	上方細粒化、流路内堆積物 (NR05)	←乾底、落込み、 側溝目の足跡、	流木		
第5層	黒～暗灰色 シルト質細粒砂～粘土 (暗色帯)	10～30	古土壌、下位層とは新移的	NR01・02・04・05	縄文土器 サヌカイト石器		NG9C
第6層 i (上部)	緑灰色 細粒砂質シルト～細粒砂	10～30	河成層、下位層とは新移的			縄文晩期	
ii (下部)	灰色 シルト～細礫	5～20	河成層				NG10-11
iii (最下部)	黒～緑灰色 シルト～粘土	5～10	やや暗色化、植物遺体ラミナ				
第7層 i	暗灰色 細粒砂質シルト～シルト質細粒砂 (暗色帯)	5～10	下位層とは新移的		サヌカイト石器		NG12A
ii	細粒砂質シルト～シルト～粘土	5～10					
iii	細粒砂質シルト～シルト～粘土 (暗色帯)	5					
iv	粗粒砂～細礫混り中～粗粒砂質シルト～シルト～粘土	20～25				縄文中期	NG12B
v	シルト混り細粒砂～シルト～粘土	10～15	やや暗色化				
vi	シルト質細粒砂	10		←落込み			
第8層 i	シルト混り粗～中粒砂～シルト質細粒砂	≦10					
ii	シルト混り細粒砂	5～10					
第9層 i	暗灰色 シルト混り細粒砂 (暗色帯)	5～10					NG12C～13B
ii	暗灰色 シルト混り細粒砂 (暗色帯)	≦10				後期旧石器	NG13C?
第10層 i	緑灰～暗オリーブ灰色 細粒砂質シルト	280	河成層、上方細粒化				
ii	灰色 細礫～シルト (下部)		河成層				
(Ⅱ区)							
i	暗緑灰色 砂礫混り粘土	30	硬くしめる	↑顕著な干割れ			
ii	緑灰～オリーブ灰色 粘土～シルト質粘土	≦80	最上部に粗粒砂	←ゾウ足跡			
iii	暗緑灰色 砂礫混り粘土質シルト	20	やや暗色化				
第11層 i	緑灰色 シルト～礫の互層	≦80	水成				NG16A?
ii	暗青灰色 シルト～礫混り粘土質シルト	10	やや暗色、上方細粒化	←干割れ			
iii	暗青灰色 礫混り粘土	20	硬くしめる				
iv	緑灰色 中粒砂～粗粒砂	≦40	水成、6区深掘りのシルト～礫互層 (≧70) に対応?				
第12層 i	緑灰色 粘土	25		↑ゾウ足跡・側溝			NG16B?
ii	灰～暗灰黄色 砂混り粘土 (植物遺体含む)	20～40	泥炭質、下面凹凸しい				
第13層	暗緑灰～オリーブ灰色 粘土～細粒砂	30	上方細粒化、10区深掘りで細分できる				NG16B?
第14層 i	緑灰色 細粒混り細粒砂質シルト	15					NG17?
ii	緑灰色 粘土～砂混りシルト質粘土	≦40	上方細粒化				

凡例 ↑上面検出遺構 ↓下面検出遺構 ←地層内検出遺構 ▽基底面検出遺構

第2節 後期旧石器時代から縄文時代の遺構と遺物

1) 縄文時代の遺構 (図6～10、図版1・2・4・5)

第1ii層の基底面において、Ⅱ区ではNR01～03を、Ⅰ区ではSD01・02を検出した。

NR01はⅡ区中央で南肩を検出した自然流路で、調査区内で大きく蛇行する。深さは検出面から1.8mに達する。シルト～礫からなる地層(図7、1・2・4～7層)で埋まった後、東側肩部にできた凹みにはシルトを主体とした地層(3層)が堆積していた。3層からは縄文土器8・9がまとまって出土した。1層からは混入品であるがナイフ形石器1が出土し、植物遺体を多く含む地層には堅果類の種子が大量に含まれていた。NR01西肩付近に当る第7層からは、サヌカイト剥片を中心とした石器遺物が集中して出土した。石鐮の未製品が含まれることから、小規模な石器製作址の可能性が考えられる。

NR02はⅡ区西部で南肩を検出した。深さは検出面から1.8mで、NR01と同様のシルト～礫で埋没する。NR01・02は蛇行して流れる一本の流路であった可能性が高い。

NR03はⅡ区東部で検出した。検出面での幅は約20.0m、深さは1.8mである。遺物は出土しなかった。また、第1層基底面で検出したため、NR01・02との前後関係は不明である。しかし、埋土の様相はいずれも類似することから、NR01・02と同時期、あるいはやや後出するものと考えられる。

SD01はⅠ区中央で検出した南北方向の溝で、幅が約24.5m、深さが1.2m以上に達する。肩の形状をみると、下位は侵食を受け外側へ少し傾いているのに対し、上位は直線的に立上っている。この直線的な立上がりは人工的な掘削によると判断され、自然流路を加工し、溝として利用した可能性が考えられた。遺物は砂礫層から土器片が数点出土した。土器の大半は縄文時代晩期に位置づけられるが、1点のみ胎土から弥生土器と思われるものが含まれる。以上から、最終的に埋まったのは弥生時代に入ってからと考えられる。

SD02も南北に向きを取る。調査区より東側に延びているため全体の規模は確認できなかったが、幅が9.0m以上、深さが1.7m以上である。上部埋土の砂礫層から縄文土器の底部19が見つかった。縄文時代晩期から弥生時代前期の早い段階で埋没したと考えられる。

また、Ⅰ区では第5層の上面でNR04と第4層の構成堆積物を運搬した河道と思われるNR05のほか、落込み、偶蹄目の足跡等を確認した。第4層の層中でもNR06を断面で確認した。

2) 後期旧石器時代から縄文時代の遺物 (図11・12、図版9・10)

石器遺物 1～7はいずれもサヌカイト製である。3がⅠ区の弥生時代の遺構SD05から出土した以外、Ⅱ区から出土した。1は国府型ナイフ形石器である。整形剥離は表面右側縁に基部側から先端へ向って施す。基部は加工せず、自然面を残す。NR01から出土したが、全体に磨滅して丸味を帯びており、原位置からかなり動いていると考えられる。2は第3層内で見つかった石鐮の未製品である。基部が平基式または幅広の凹基式で、平面形が正三角形に近い石鐮を目指していたと思われる。両側縁には表裏から細かい剥離を施すが、先端は厚みがあり丸味を帯びたままである。3は表面の一部に

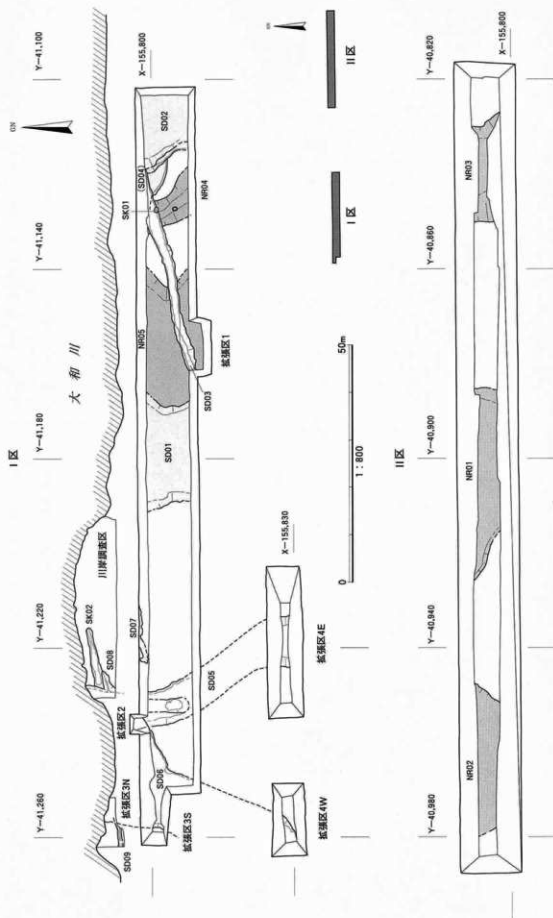


图6 I - II 区出土遗物位置图

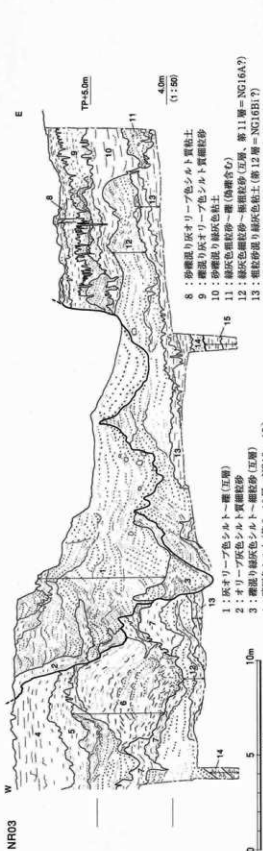
- | 岩相の組合せ模様 (例) | 岩相の基本模様 |
|--------------|---------|
| | |
| | |
| | |
| | |
| | |
| | |
| | |
| | |

断面図で用いる岩相の凡例

- [illegible]

图7 NR01(Ⅱ区)断面

NR03



- 8 : 砂礫混り灰オリーブ色シルト質粘土
- 9 : 礫混り灰オリーブ色シルト質細粒砂
- 10 : 砂礫混り緑灰色粘土
- 11 : 緑灰色細粒砂-礫 (礫を含む)
- 12 : 緑灰色細粒砂-礫 (第11層=NG16A?)
- 13 : 礫混り緑灰色粘土 (第12層=NG16B1?)
- 14 : 礫混り緑灰色粘土 (第13層=NG16B1?)
- 15 : 砂礫混り緑灰色シルト-粘土 (第14層=NG17?)

- 1 : 灰オリーブ色シルト-礫 (互層)
- 2 : オリーブ灰色シルト質細粒砂
- 3 : 礫混り緑灰色シルト-細粒砂 (互層)
- 4 : 暗灰色シルト (第9・10層=NG13~15)
- 5 : 緑灰色細粒砂質シルト (第9・10層=NG13~15)
- 6 : 緑灰色粘土-礫 (第9・10層=NG13~15)
- 7 : 礫混り緑灰色粘土質シルト (第9・10層=NG13~15)

NR02



- 1 : オリーブ灰色シルト-礫細粒砂 (互層)
- 2 : シルト混り灰色礫-細粒砂
- 3 : シルト混り灰色礫-粗粒砂
- 4 : オリーブ灰色細粒砂-シルト
- 5 : オリーブ灰色シルト-礫 (互層)

- 10 : 灰オリーブ色シルト質粘土 (第6層=NG10・11)
- 11 : オリーブ灰色粘土質シルト (第7層=NG12)
- 12 : 礫混り緑灰色粘土 (第9・10層=NG13~15)
- 13 : 含砂礫混り暗灰色粘土-礫 (上方に隣って礫化, 第9・10層=NG13~15)
- 14 : 礫混りオリーブ灰色シルト-細粒砂
- 15 : 含礫灰色細粒砂-中粒砂 (第9・10層=NG13~15)
- 16 : 緑灰色粘土 (第13層=NG16B1?)
- 17 : オリーブ灰色細粒砂 (第13層=NG16B1?)

図8 NR02・NR03(II区)断面

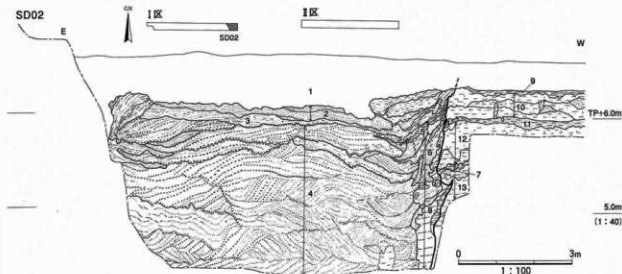
NR05



SD01



図9 NR05・SD01(I区)断面



- | | |
|------------------------|--------------------------------|
| 1: オリーブ黄色砂礫(第1層=NG0・1) | 8: 含礫暗緑灰色粘土質シルト～中粒砂(互層) |
| 2: 褐灰色砂質シルト～粗粒砂(互層) | 9: 細粒砂混り暗褐色粘土質シルト(第3層=NG9B) |
| 3: オリーブ黒色砂質シルト～細粒砂 | 10: 礫混り灰オリーブ色シルト～中粒砂(第4層=NG9B) |
| 4: 暗灰色砂礫(ラミナ状にシルト入る) | 11: 含砂オリーブ黒色粘土質シルト(第5層=NG9C) |
| 5: 黄灰色砂質シルト～細粒砂(互層) | 12: 細粒砂混り灰色シルト(第6層=NG10・11) |
| 6: 灰色中粒砂～砂質シルト | 13: 含砂礫灰～黒色シルト～粘土(第6層=NG10・11) |
| 7: 含砂礫黒色シルト質粘土 | |

図10 SD02(I区)断面

自然面が残る石匙である。下部は上部の倍ほどの厚みがある。刃部とつまみには表裏両方から細かい剥離を施すが、左右の側縁は表面のみ調整する。4～6は掻器で、4・5は第7層、6は第3層から出土した。4は頂部と両側縁が自然面の横長剥片を素材とする。刃部は表裏から調整を加え作り出されているが、表面側は縁に沿ってわずかな剥離が見られるだけである。5は全体に風化が進んでいる。表面はすべての辺に細かい剥離を施すが、表面は右側縁のみ整形剥離が行われている。6は刃部にあたる下辺のみ、表裏両面から調整を施す。7は石核である。まず、図下側から比較的大きな剥片を取った後、上側から小さい剥片を数枚取り、上辺中央で大きな剥離を行ってから廃棄されている。

縄文土器 8～27は縄文土器で、その多くはI区の弥生時代の溝から見つかった。8・9はII区NR01から出土した深鉢の破片である。胎土は両者とも生駒西麓産といわれる角閃石を多く含むもので、同一個体の可能性が高いが厚みは異なる。8は口縁部で、外面にはユビオサエの痕があり、端部は横方向のナデで丸くおさめる。9はa～eの接点をもたない体部および底部の破片からなり、内外面とも煤が付着する。外面を貝殻条痕で調整し、また尖底であることから、年代は縄文時代前期と考えられる。10はI区第5層から出土した平底の鉢で、胎土にはシャモットと思われる白い粒子を多く含む。内面にはナデ、外面には縄文を施しており、両面とも煤が付着する。外面口縁直下に沈線が巡り、沈線の上には長辺が約2cmの瘤状の突起物がつく。突起物には線状のキザミメが数本入っている。全体の形状や胎土から、年代は縄文時代中期と考えられる。11は波状口縁になる深鉢の口縁部で、端部にキザミメを施す。波頂部には内外両側から刺突が行われるが、貫通はしていない。外面には凹線による模様があり、内面にもキザミメの下に幅約0.5cmの凹線が1条巡る。胎土はチャートや長石を多く

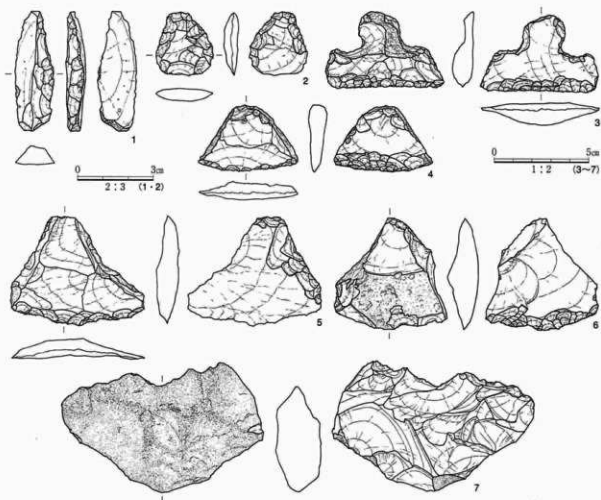


図11 後期旧石器と縄文時代の石器
Ⅱ区NR01(1)、Ⅱ区第3層(2・6・7)、SD05(3)、Ⅱ区第7層(4・5)

含む。縄文時代中期後葉の北白川上層Ⅱ～Ⅲ式[泉拓良・家根祥多1985]に位置づけられる。12・13は口縁部で、いずれも表面が風化しており調整は不明である。胎土には長石やチャートが目立つ。14・15は直立する体部上半に、やや内湾しながら外側へ広がる口縁がつく深鉢である。14は外面全体に貝殻条痕がつき、15は煤が付着する。これらは縄文時代晩期の滋賀里Ⅲ式[加藤修・丹羽佑一ほか1973]に比定できる。16は内側に短く屈曲する口縁をもつ。17は口縁に爪状のキザミメがつく小型の深鉢である。両者とも内外面が煤けており、胎土には石英や長石の角礫を含む。胎土から縄文土器の可能性を考えたが、弥生時代まで下る可能性がある。18は長原式[家根祥多1981]と考えられる小型の鉢である。突帯の上にはキザミメが施されている。19は平底の底部である。外面は二枚貝を使って調整しており、内面には炭化物が付着する。調整技法や底部径が10.6cmと大きいことから、縄文時代後期にさかのぼる可能性がある。20～27は突帯文土器といわれる縄文時代晩期の土器群で、いずれもケズリ調整を行い、胎土は生駒西麓産である。このうち、20と21は口縁部に施される突帯が上端から少し下がった位置にあることや、キザミメが大きいことから、船橋式[家根1981]の可能性も考えられる。22～25・27は長原式の深鉢であるが、突帯やキザミメの形はそれぞれ異なる。26は長原式の小型鉢である。外面調整は深鉢と同じくケズリである。

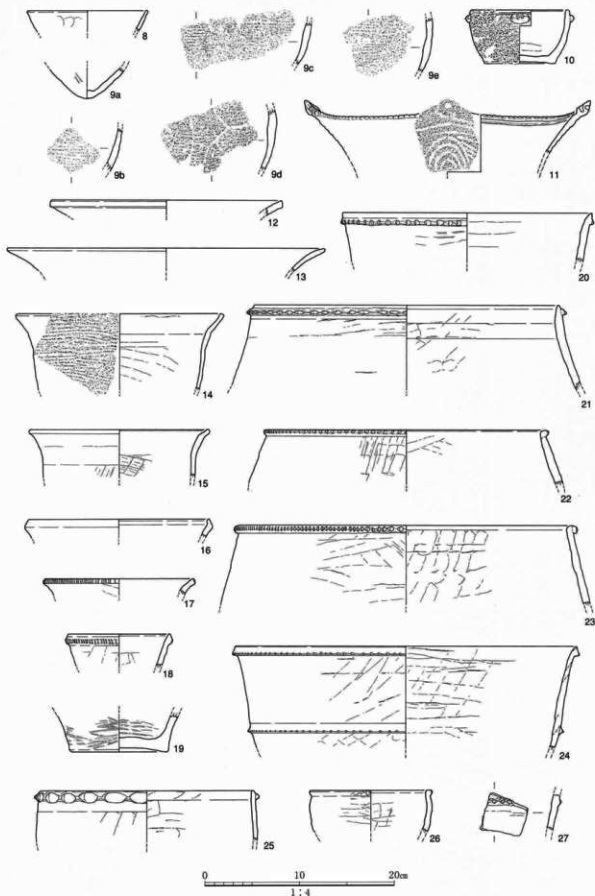


图12 绳文土器

Ⅱ区NR01(8·9)、Ⅰ区第5層(10)、SD05(11·16·20·23~26)、SD03(12·21)、SD06(13·15·17·18·22)、SD01(14)、SD02(19)、SK02(27)

第3節 弥生時代の遺構と遺物

1) I区東部検出遺構 (図6・13、図版6)

I区東部では、当該期の遺構としてSD03とSK01を第1ii層基底面で検出した。

SD03は西南西から東北東に向う溝で、幅が約2.8m、残存する深さが約0.5mである。加工時の断面形は台形を逆にしたような形状である。埋土の下部は水成の砂あるいは砂質粘土(図13、C断面の7～9層・D断面の5層)で、上部は炭化物を多く含む粘土質シルトで構成される。埋土からは畿内第I様式新段階～第II様式の弥生土器のほか、石斧・石鏃などの石器・種子・昆虫化石が多数出土した。ただし、溝の東部では最上位に粗粒砂～礫からなる埋土があり、畿内第IV様式に位置づけられる高杯や鉢が含まれていた。本来の遺構掘削面が残存しないため確認はできなかったが、SD03とは別の新しい時期の溝(SD04)が東部では重複していた可能性が高い。また、拡張区1付近ではSD03の深さが0.8mでI区内より深く、骨片や貝殻のほか、人頭大の石が数個集中して見つかった。

SK01はSD03の南肩を切る直径が約1.0mの土壇である。残存する深さは0.7mで、図13(B断面)の6層に当る水成の粗粒砂～砂礫を掘込み形で、上位に細粒砂～シルトが堆積している。遺物は弥生土器の破片が少量出土した。しかし、埋土の岩相および堆積状態を見るかぎり、弥生時代以降の井戸である可能性も考えられる。

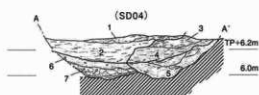
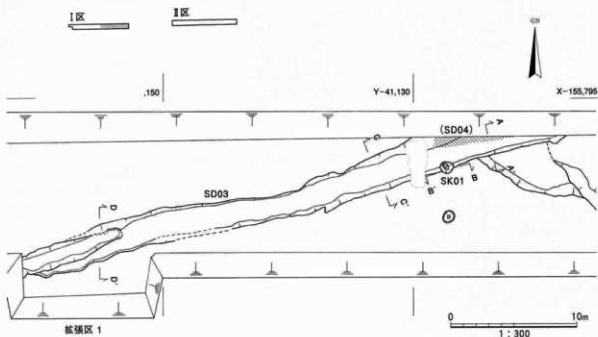
なお、出土遺物に鑑みて、SD03・SK01は本来、瓜破遺跡の基本的な層準のUR6Z層下部の遺構であったと考えられる。

2) SD03(SD04)・SK01出土遺物 (図14～20、図版9・11～14・17・18・20・21)

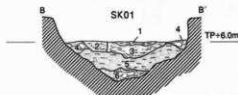
i) SD03(SD04)の遺物

SD03からは石器28～49・弥生土器50～133・土製円板134～138が出土した。

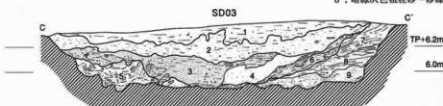
石器 28～41はサヌカイト製の打製石器である。28は小型の凸基式石鏃である。長さが2.7cm、重量が2.2gで、最大幅が基部近くにある。表面側は真ん中が厚く山型を呈するのに対し、裏面は平坦で、その基部は大きなポジティブ面1枚からなる。管分類のG類[菅栄太郎1995]に含まれると思われる、UR96～12次調査でも頻例が出土している[大阪市文化財協会1999a]。29は凹基無茎式石鏃で、長さが約2.6cm、重量が2.1gである。側縁は外湾し、基部の挟りは浅いが、逆刺は比較的鋭利である。C-2類に大別される。30は一般に石小刀といわれる両面加工の削器で、外側に外湾する刃部、内側に直線的な刃部をもつ。長さは4.7cmであるが、表面左端にあるポジティブ面はやや新しく見えることから、本来の基端は失われている可能性がある。31は平面形が長三角形の尖頭器で、長さが8.6cm、重量が34.8gである。表裏とも中央のやや高い部分に擦痕がつく。32・33は両面に加工が施された石器である。32は石小刀、あるいは石鏃の未製品と考えられる。側縁を細部調整する途中、表面左上端にある大きなポジティブ面を形成した剥離が原因で廃棄されたようである。33は縁辺に細部調整を施し、平面形が扇形になるように成形されている。ただし、表面左がほかの部分より厚く、エッジも作



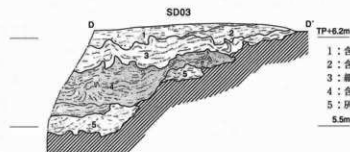
- 1: 黒色シルト質粗粒砂 (含砂礫ブロック) 5: シルト混り灰オリブ色粗粒砂
 2: オリブ黒色シルト質粗粒砂～砂礫 6: 灰色粗粒砂～砂礫
 3: 灰黄色砂質シルト～細粒砂 7: 黒色粗粒砂質シルト (含粘土質シルトブロック)
 4: 含砂礫黒色弱粘土質シルト



- 1: 含砂礫灰色弱粘土質～砂質シルト
 2: 含砂礫オリブ黒色粘土質シルト
 3: オリブ黒色細粒砂～粘土質シルト
 4: 含砂礫暗灰色粘土質シルト
 5: 含砂礫オリブ黒色粘土質シルト
 6: 暗緑灰色粗粒砂～砂礫 (含シルトブロック)



- 1: 黒褐色極細粒砂～シルト 6: 暗オリブ灰色シルト質細粒砂
 2: 含砂礫オリブ黒色極細粒砂質シルト～シルト質細粒砂 7: 暗緑灰色シルト質細粒砂
 3: 含砂礫黒色シルト～極細粒砂 8: 含砂礫オリブ灰色極細～細粒砂
 4: 含粗粒砂暗緑灰色細～極細粒砂 9: 含砂礫灰色中～粗粒砂
 5: 含砂礫暗オリブ灰色シルト質細～中粒砂



- 1: 含砂礫オリブ黒色シルト質粘土～粘土質シルト
 2: 含細粒砂オリブ黒色粘土質シルト
 3: 細粒砂混りオリブ黒色粘土
 4: 含細粒砂オリブ黒色シルト質粘土
 5: 灰色砂質粘土

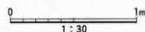


図13 弥生時代の遺構 (I区東部)

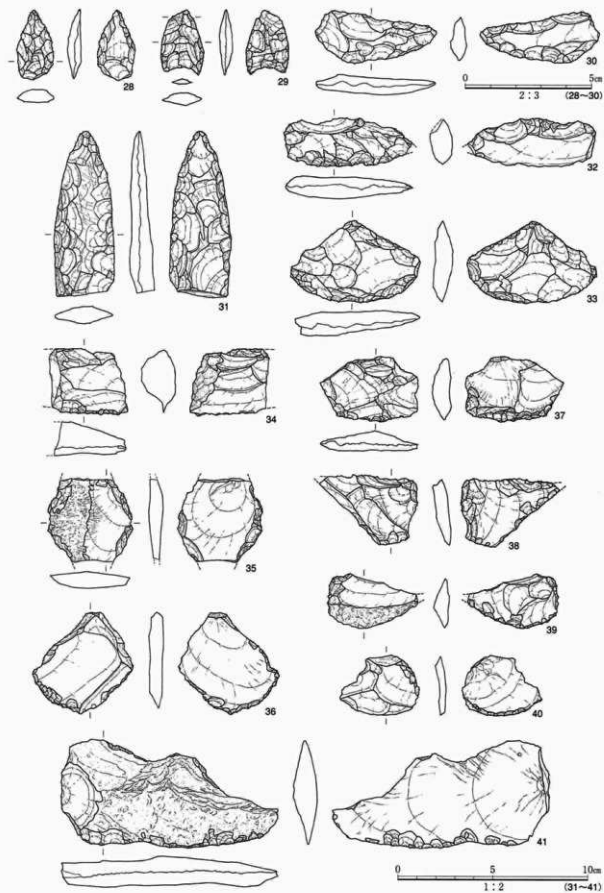


图14 SD03出土石器(1)

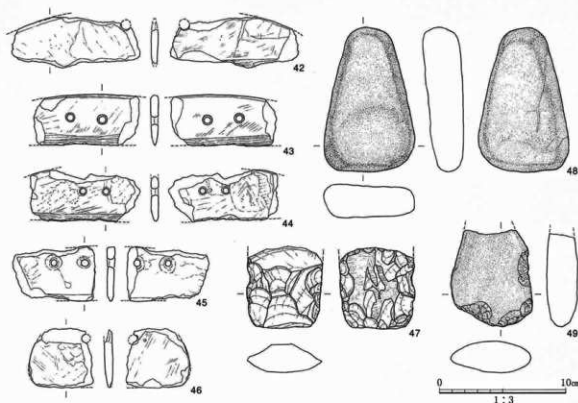


図15 SD03出土石器(2)

り出されていないため未製品と判断した。UR96-12次調査でも一回り大きい類似品が出土しており、刃器あるいは尖頭器の未製品の可能性が指摘されている[大阪市文化財協会1999a]。34~41は細部調整が施された剥片である。36・39~41は搔器として刃部を作り出すために、それ以外は成形を目的として細部調整を行ったと考えられる。34の下辺は両面から調整が施されている。表面右側には自然面を残し、左側を折損する。35は上下を折損するが、表裏とも側辺に小さな剥離痕がある。36・37は表裏面とも下辺に細部調整を施す。調整の順序としては、36の場合、まず裏面の下辺を左端から真ん中まで調整し、向きを変え表面の下辺全体を右側から順に調整を行った後、再度裏面に戻り右端から真ん中に向けて調整を施している。一方37は、表面を右側から順に調整してから、裏面を左側から調整する。38・39は裏面の下辺を細部調整する。基本的に前者は右端から、後者は左端から順に剥離作業を進めている。40は表面の右側辺と、裏面の下辺に小さい剥離面が並ぶ。41は長さが11.2cmの比較的大きな縦形剥片で、直線的な側辺には両面から細部調整が施される。

42~46は磨製石庖丁である。石材はいずれも緑色片岩である。42は側辺の一部と片側の紐孔しか残らないが、残存長が約10.0cmに及ぶことから、もとは大型の石庖丁であった可能性が高い。刃部は欠け、研ぎ出した部分は失われている。しかし、割れ面を再利用したのか、刃こぼれを起こしたような痕が先端に見られる。43・44は直線刃半月形に分類される。刃部は前者が両刃、後者が片刃で、両者とも刃こぼれの痕がある。45の刃部は外湾する可能性があるが、大半が失われており詳細は不明である。46は直線刃半月形あるいは楕円形と考えられ、刃部は両刃である。紐孔のわきには穿孔途中でやめた痕がある。47は磨製石剣の一部と思われるが、大半が欠損しており、片面の一部にのみ研磨の痕がみられる。48・49は砂岩製の石器である。48の平面形は基端の丸い長台形で、断面は扁平な楕

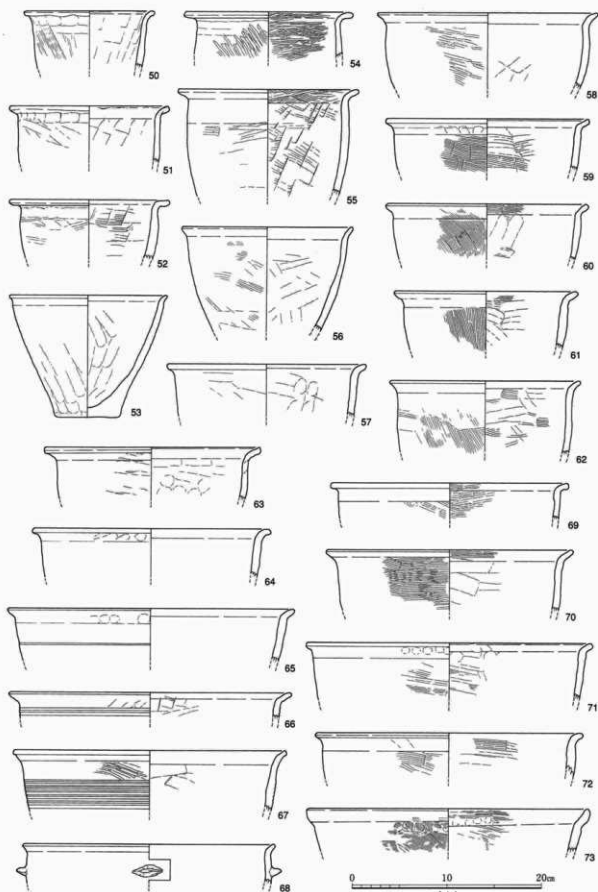


图16 SD03出土弥生土器(1)

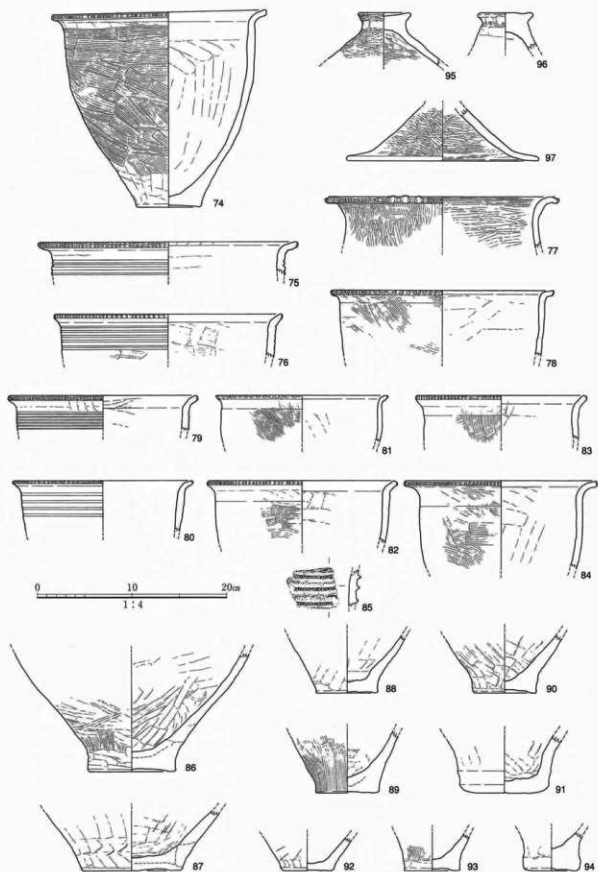


图17 SD03出土弥生土器(2)

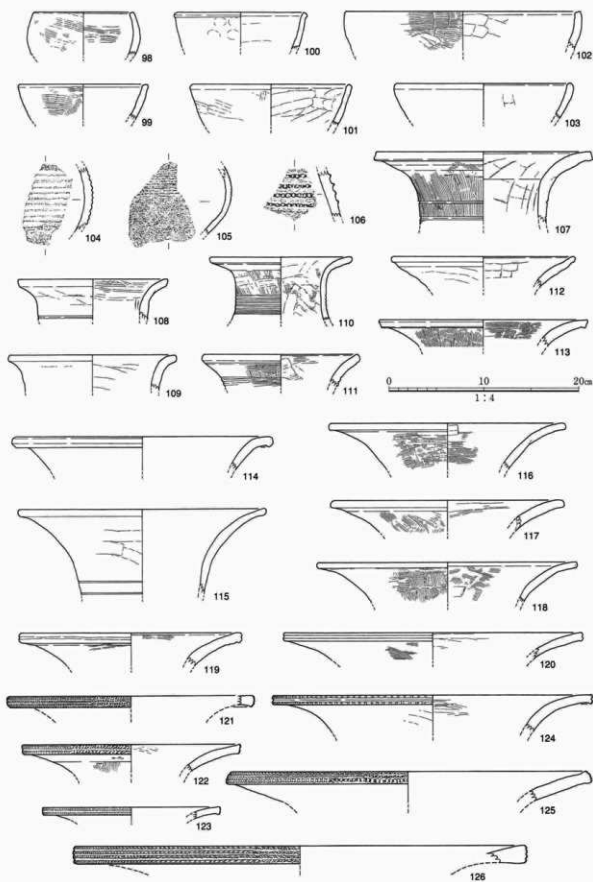


图18 SD03出土弥生土器(3)

円形を呈する。平井勝がⅡA類とした太型蛤刃石斧[平井勝1991]に相当すると思われるが、刃部が丸く、実際に斧として機能したかどうかは検討を要する。49は上部を折損する。下辺に打ち欠き、両側面に剥離痕があることから、敲石あるいは石錘と考えられる。

弥生土器 50～84は甕(58・65・73は鉢の可能性有)で、外面に煤が付着するものが多い。口縁部は短く外反して端部がやや肥厚するものと、如意状に屈曲し端部が丸く収まるものに分かれる。胎土はチャートや長石を多く含む在地産が多く、ほかに生駒西麓産と判断されるもの54・58・62・69がある。中には68のように体部上位に扁平な把手をもつものも含まれる。74～84の口縁端部にはキザミメがみられる。その大半は0.4cmほどの縦長のキザミメを0.2～0.3cmの間隔をあけて配置するが、77・78・81のように幅広のキザミメを密に施すものもある。77は一般に近江型といわれ、小さいキザミメの間に、一回り大きいキザミメを数個ずつところどころに配する。調整は口縁部にはハケ、体部にはハケとミガキを用いる。85は甕の体部で突帯がつく。突帯の上にはキザミメがみられる。106や180など壺に施されたキザミメと比べて細かいのが特徴である。86～94は甕あるいは壺の底部である。大半の外底面は平坦か、あるいは中央がやや上げ底気味である。91は外底面が丸底気味で不安定である。92・93は内側に炭化物が付着し、94は二次的な熱で赤化し、器面が非常に荒れている。

95～97は甕の蓋である。つまみの頂部をみると、95は中央がやや凹むのに対し、96は平坦である。調整はミガキとナデを多用し、つまみ外面には指圧痕が顕著に残る。98～103は鉢あるいは高杯の口縁部である。いずれも内湾して立上がるが、その度合いはものにより緩急がある。調整はヨコハケとナデを基本とする。104～126は壺で、このうち104～106は体部、107～126は口縁部から頸部である。104・105は1帯10本の沈線を1単位とした文様帯をもつが、施文原体の幅は異なる。106の貼付突帯の上には丸い小さなキザミメがつく。口縁部は端部が丸く収まるものと、外側にわずかに面を成すものが大半を占める。そのうち、119・120は端面に沈線を、121～126は沈線とキザミメを施す。後者の場合、1条の沈線の下上にそれぞれキザミメを付けるものが多いが、121や126のように端面が幅広のものは沈線が複数条である。キザミメは普通、沈線を巡らした後に施されるが、125のみキザミメが先行する。甕と同様、これらの壺もほとんどが在地のもので、生駒西麓の胎土は数点みられる程度である。

127は甕の底部と考えられ、外底面から側面に抜ける孔を二つ対向する位置に穿つ。128は甕といわれるもので、内外両側から穿った孔が底部中央の一つある。129は断面が円形の上向きに延びる把手をもつ体部である。類似する把手は、東大阪市鬼塚遺跡や神戸市大開遺跡

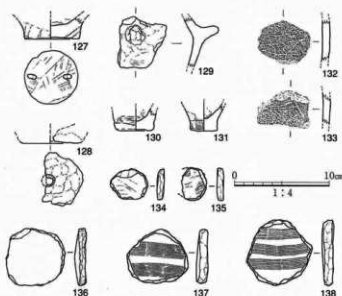


図19 SD03出土弥生土器・土製円板

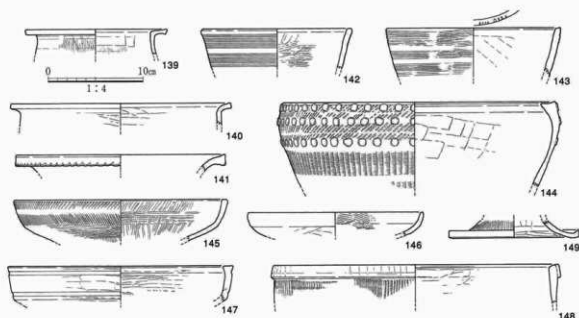


図20 SD03・SD04出土弥生土器

で出土した小型の鉢に見られる[大阪府立花園高校地歴部1970、神戸市教育委員会ほか1993]。130・131はミニチュア土器の底部である。外面には工具の痕がつく。132・133は壺あるいは甕の体部で、腕による線刻がある。ただし一部であるため、全容は不明である。134～138は壺や甕の破片を丸く打ち欠いて作った土製円板である。直径が4.0cm程度のもと、直径が6.0cmを超えるものがある。137・138は櫛描直線文が表面に残ることから、壺の体部を再利用したことがわかる。これらの土器はいずれも、畿内第Ⅰ様式のおわりから第Ⅱ様式に位置づけられる。

139～148は畿内第Ⅱ様式新相以降の弥生土器である。139・140は甕である。器壁が薄く、「く」の字状に屈曲した口縁の端部は外側に面を成す。141は広口壺の口縁部で、垂下した端部の下端には三角形のキザミがある。142・143は細頸(直口)壺である。前者の頸部がやや外傾するのに対し、143は内湾する。いずれも外面には、櫛描直線文が間隔をあけながら複数条施される。144は大型細頸壺である。口縁上端には広い平坦面を形成している。簾状文と列点文を施した後、その上に円形浮文を貼付ける。145～147は高杯である。いずれも斜め上方に広がる杯底部に、まっすぐ立上がる口縁部がつくタイプである。147は杯底部と口縁部の境・口縁端部に凹線を巡らし、145は口縁部外面に櫛描列点文を施す。また、146の内面には煤が付着する。148は台付鉢の口縁部と考えられる。口縁端部外側に幅広の粘土帯を貼付けた後、その上から外面全体に簾状文を施す。149は高杯あるいは台付鉢の脚部である。裾部の端が上方に跳ね上がり、外面を縦方向のミガキで調整する。これらの弥生土器のうち、139～143は畿内第Ⅱ様式の新段階～第Ⅲ様式のはじめに、残りは第Ⅳ様式に位置づけられる。これらの多くがSD03の東部からまとまって出土しており、後出する溝SD04に伴う可能性が高い。

ii) SK01の遺物 (図21)

150は弥生土器の甕である。調整は内外面ともナデで、口縁部は短く外反し端部を丸く収める。時期は畿内第Ⅱ様式と考えられる。



図21 SK01出土弥生土器

3) I区西部・川岸調査区検出遺構 (図22・23、図版7・8)

I区西部では、第1ii層の基底面でSD05～07を検出した。

SD05は南北方向の溝で、幅が約8.0m、深さが約1.7mである。埋土は下部がシルトと砂礫の互層、上部が中～粗粒砂からなる。遺物はおもに埋土下部から出土し、弥生土器のほか、石庖丁や石鏃などの石器・土製紡錘車・縄文土器を含む。拡張区4EではSD05が南側でやや東寄りに向きをかえて延びることが判明した。また、日本考古学協会によって大和川の対岸で行われた調査で検出された第2号堅穴〔杉原・神沢1961〕や、UR94-19・96-12次調査のSD801〔大阪市文化財協会1999a〕とSD05とは規模や埋土の岩相が類似しており、第2号堅穴とSD801をつなぐ弧線上にもSD05がのびてくることがわかった。なお、第2号堅穴とSD801は一連の溝で、集落の周囲を取り巻く環壕の可能性があるとこの教示を受けた(註1)。

SD06は現大和川の南岸でSD05に合流する溝である。拡張区2で両者の切合いの状況を観察したが、明確な新旧関係は確認できず、最終的にSD06から供給された畿内第Ⅲ様式の弥生土器を含む地層で

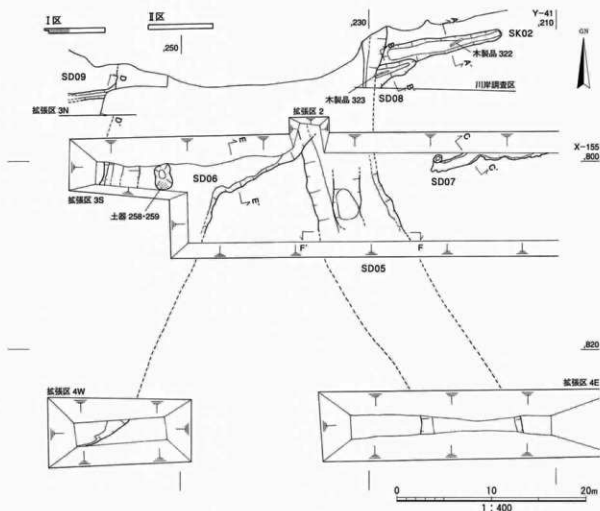


図22 弥生時代の遺構(I区西部・川岸調査区)

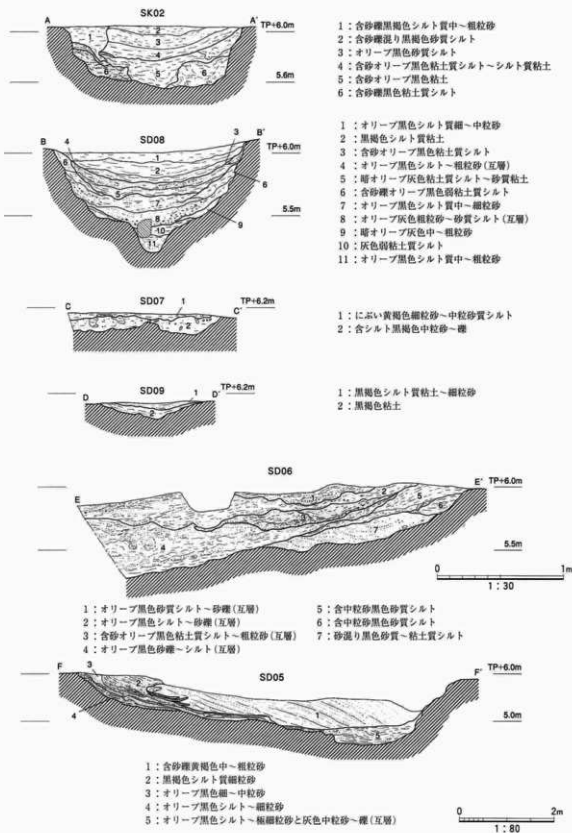


図23 I区西部・川岸調査区検出遺構断面

埋没していることがわかった。遺物の新旧関係でいえば、SD06の場合、SD05の下部埋土には含まれない畿内第Ⅲ様式など新しい様相の土器が底付近からも出土しており、遺物量全体でみても占める割合が大きいことから、SD05より後出する可能性が考えられる。また、拡張区3N・3Sで西側肩部を、拡張区4Wで東側肩部を確認したことにより、規模は幅が約12.0m、深さが約1.1mであることが判明した。

SD07はSD05の東で検出した幅約1.4mの東西方向の溝である。埋土は加工時に堆積したと考えられる黒褐色中粒砂～礫と、その上に堆積するにぶい黄褐色のシルト～中粒砂からなる。埋土の中から弥生土器が数点出土した。

川岸調査区では、本調査を開始した時点で弥生時代の遺構SK02・SD08が地表に露呈していた。

SK02は幅が約1.8mで、長さが約13.0mの細長い土溝である。断面形態や埋土の状況がSD03と類似するため、本来は溝であったものの上部が削平され、深い部分だけが残ったとも考えられる。しかし、突起をもつ大型の木材322が埋土から出土しており、奈良県唐古・鍵遺跡でみられるような溝の脇に付随する木器を溜めておくための土溝であった可能性も高い。ちなみに、後述するSD08の底近くからも、樹皮がつく建築部材323が出土している。

SD08は川岸調査区で検出した東西方向の溝である。SD05とつながっており、埋土も共通することから一連のものとして捉えられる。しかし、検出当初は近接するSK02と同一の遺構と判断し掘削したため、遺物の一部を区別せずに取上げるようになった。よって、SK02とSD08の出土遺物の記載はまとめて行うことにする。

4) SD05・SD06・SD08・SK02出土遺物 (図24～38、図版11～22)

i) SD05の遺物

SD05から出土した遺物としては、石器151～167・弥生土器168～238・242～252・紡錘車239～241・土製品253・土製円板254・木製品255～257がある。

石器 151～160はサヌカイト製の打製石器である。151・152は石鏃である。151は凹基無茎式で、重量は2.9gである。平面形態は二等辺三角形に近いが、側縁はややS字を描く。基部の挟りは浅めで、逆刺も鈍いことからD-2類に分類できる。152は凸基無茎式である。側縁が緩やかに外湾し、柳葉形を呈することからG-2類に当る。28・29・151といったほかの石鏃が比較的大きな剥離で成形されているのに対し、調整の細かさが際立つ。重量は1.6gである。153・154は両面加工石器である。153は表面右側を折損する。形状から石鏃の未製品と考えられるが、上部が下部よりかなり薄くなっており、石鏃を加工するのは困難と判断され廃棄されたと思われる。154も石鏃の未製品と考えられる。表面左側を折損するが、それ以外の辺は両面に細部調整がみられる。155～157は石核あるいは石核石器である。155の裏面は左右から大小複数の剥片が取られ、表面も右側から数回剥離作業が行われている。156は表面の一部に自然面を残すが、裏面を中心に細かい剥離による成形がみられる。158・159は下辺に細部調整を施し刃部を形成していることから、搔器と判断される。158は上辺が自然面である。Ⅱ区遺物包含層から出土した縄文時代の搔器5・6と形状が類似しており、年代は縄

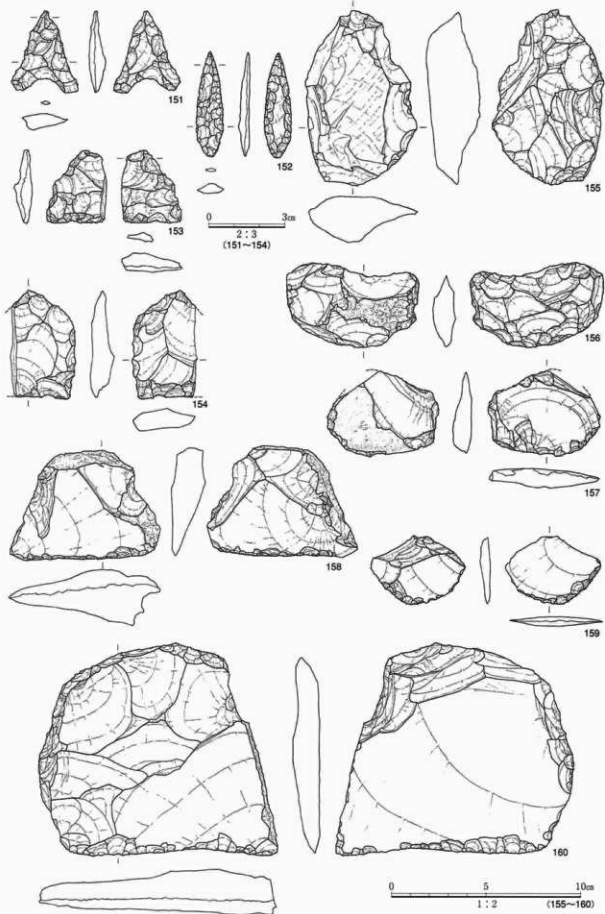


图24 SD05出土石器(1)

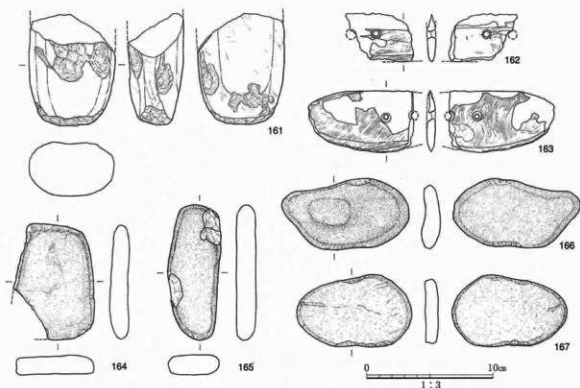


図25 SD05出土石器(2)

文時代にさかのぼる可能性がある。159は厚みが0.5cmで薄く、表面右側→裏面→表面左側の順で下辺を調整する。160は表面右側辺に自然面を残す以外、すべての辺に細かい剥離調整が行われる。岡山県百間川今谷・兼基遺跡から出土した大型石庖丁[平井1991]に類似するが、左右の挟りは本例の場合顕著ではない。また、使用痕跡は見当たらない。

161～167は磨製石器である。161は上半分を折損する変ハンレイ岩製の太型給刃石斧である。刃部は使用時に加えられた打撃により磨滅している。162・163は黒色片岩製の磨製石庖丁である。162は左右両端を欠損する。刃部は片刃の直線刃で、紐通し孔の間隔は1.8cmである。163は平面形が楕円形を呈し、刃部は両刃である。紐通し孔の間隔は約2cmである。体部には研磨した痕が顕著に残る。164～167は砂岩製である。164は平面形が長い台形状で、断面は扁平な楕円形を呈する。刃部にも研磨したような痕が見られるため、平井勝がⅡA類と分類した太型給刃石斧に当ると思われる[平井1991]。ただし、左側辺に打撃による凹凸が見られ、別の用途で使われた可能性も捨てきれない。165は断面が扁平な楕円形で、やや下に向かって細くなる。縁辺は研ぎ出したように、エッジが生じている。下端が磨滅していることから、土掘りなどの目的で使われた可能性が考えられる。なお、左右の割れは新しく、後世のものである。166・167は石錘と考えられる。平面形が楕円の扁平な石を素材とし、長辺の中ほどを打ち欠き、凹みを形成している。

弥生土器 168～205は弥生土器の壺である。168・169・171・172は口径が20cm以下で、比較的小型である。168は口縁部と頸部の間に突帯を1条巡らす。突帯の断面形は「コ」の字状で、上からキザミメを施した180より幅が狭いのが特徴である。169は端部が上下に肥厚し、広い端面をもつタイプである。同様のタイプの中には、170のように端面に宛描文様があるものもみられる。172の口縁部

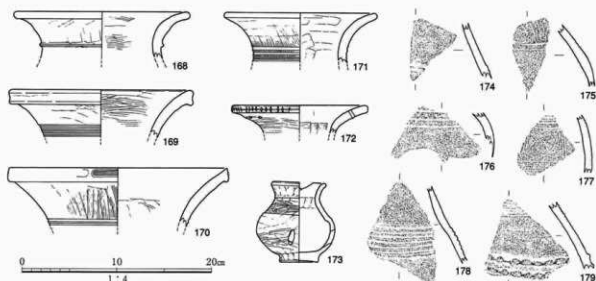


図26 SD05出土弥生土器(1)

中ほどには、並列する2つの紐孔がある。孔は外から内へ穿つ。また、口縁端部には沈線を1条巡らし、縦方向に線状の刻みを施す。173はミニチュア土器である。体部下半には外側から穿たれた孔が一つあり、口縁の一部にも打ち欠きがみられる。頸部は口縁部・体部と段をもって区別されており、やや古い様相を呈する。174～179は壺の体部および頸部である。174・175・177の体部上半や頸部には、寛で描かれた弧文や木の葉文がみられる。176は2条の匏描沈線の間を列点文で埋める。刺突に使った工具は、直径が0.2cm強の中実の棒である。178は7条の沈線を1単位とした文様帯をもつ。文様帯の部分は薄い粘土帯が貼付けられている。179は匏描直線文と貼付突帯文を併用する。突帯の上には、布巻棒圧痕と呼称される布を巻いた棒によるキザミメがある。180～183は今回出土した弥生土器の壺の中では残りがよく、ほぼ全体の形状がわかるものである。いずれも算盤形の体部に直立気味の頸部がつき、口縁は大きく外反する。頸部には突帯、あるいは匏描沈線による装飾がある。沈線は181・183のように1条ずつの間隔があくものと、182のように近接するものがある。また、182の場合、沈線の間に弧線を入れることで、一部を流水文として表現している。184・185も算盤形の体部を有し、外面の調整にはミガキを多用する。文様は複数条の匏描直線文を1単位とし、体部上半や頸部に施す。同様の文様は195にもみられる。186～191・193・194は広口壺の頸部と口縁部である。頸部の文様は匏描のほか、191のように櫛描のものも含まれる。また、189の口縁端部内面には列点文が施され、193は直線文のほか、波状文や扇形文を併用する。192は細頸壺の口縁部で、1原体が11本からなる櫛を用いて、直線文を間隔をあげながら複数条施す。196～205は底部である。外底面は平らで、調整にハケとミガキを併用するものが多い。201は内底面中央がナデ調整により突起状に飛び出す。205は外底面までミガキを施す。これらの壺は畿内第Ⅰ～Ⅱ様式新相に属すると考えられる。このうち、174・175・177など匏描弧文や木の葉文をもつものは、第Ⅰ様式でも古い段階に位置づけられる。また、底径が体部の大きさに比べ小さい203などは第Ⅲ様式まで時期が下る可能性がある。

206～226は甕(206・207・210・211は鉢の可能性有)の口縁部で、いずれも外面に煤が付着する。

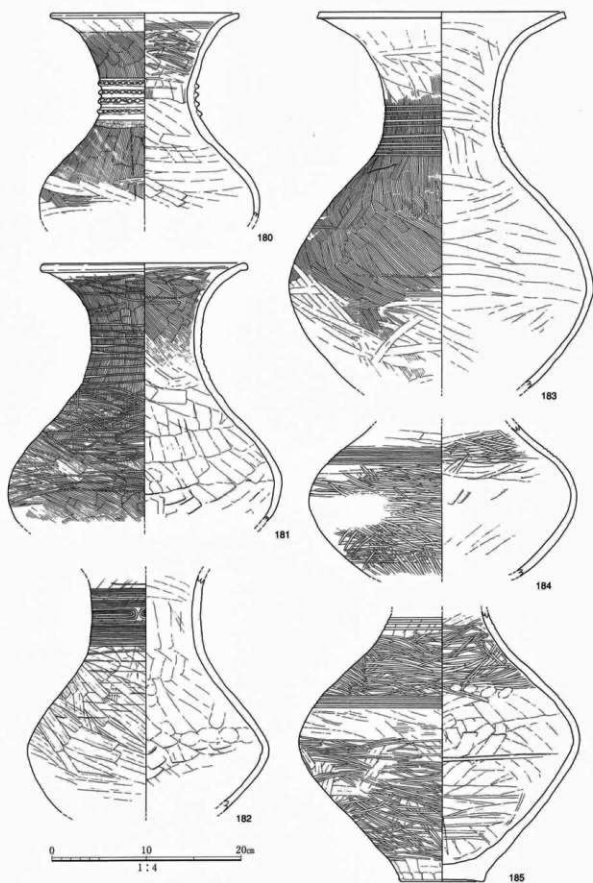


图27 SD05出土弥生土器(2)

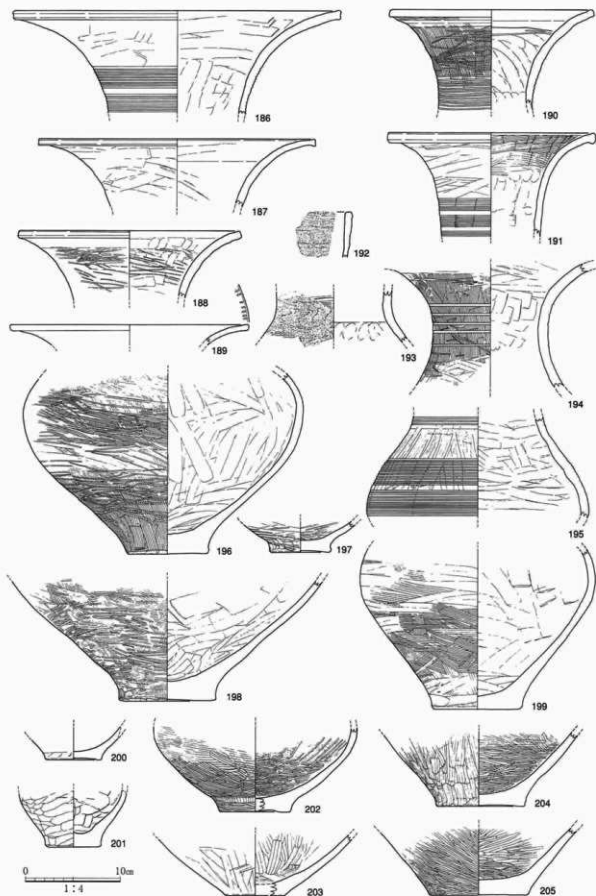


图28 SD05出土弥生土器(3)

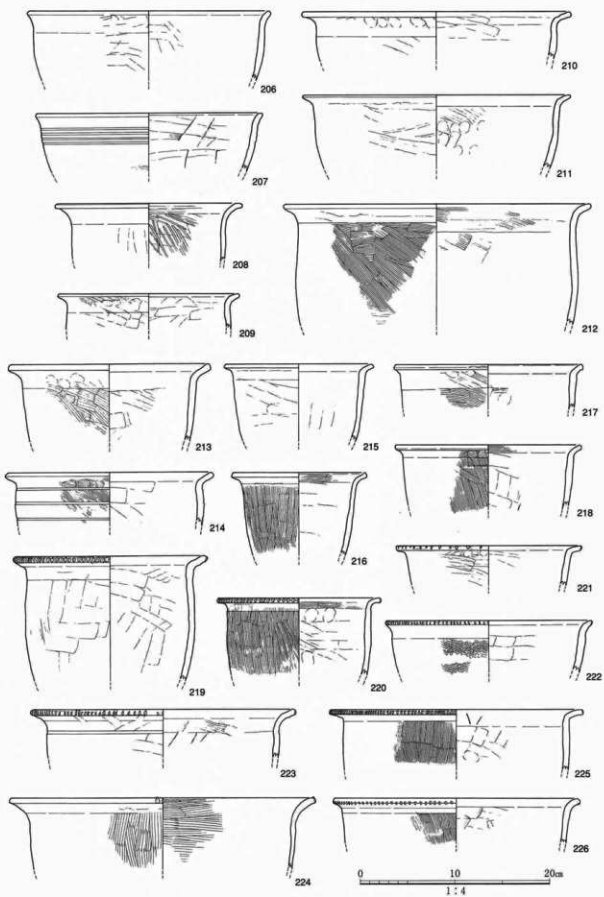


图29 SD05出土弥生土器(4)

口縁部の先端はわずかに外反するもの206・207・222と、如意状に屈曲するもの208～221・223～226がある。219～226の端部にはキザミメがみられ、その密度には疎密がある。このうち221は、キザミメの間隔が約1.2cmで広く、個々の大きさにも差があることから、形骸化したものと捉えられる。また、226のキザミメは端部下端から口縁部に向う位置にあり、堯を伏せた状態で刻みを入れたと考え

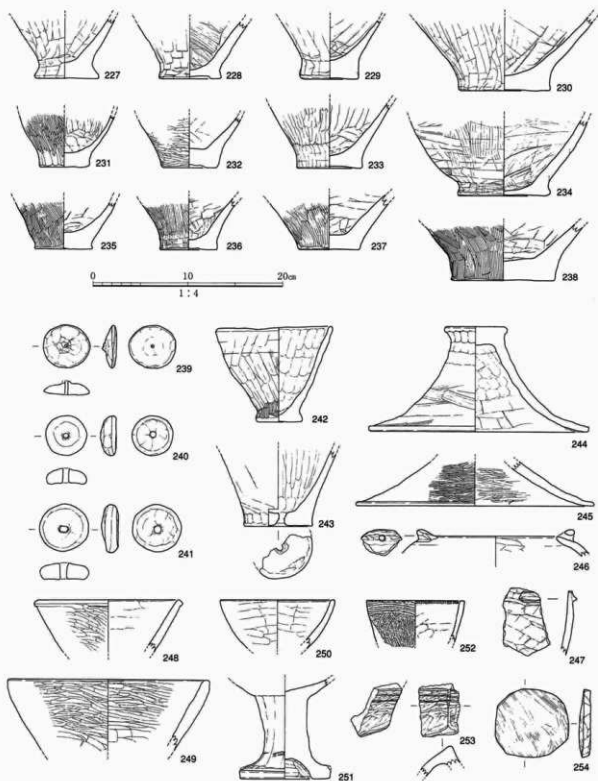


図30 SD05出土弥生土器・土製品

られる。224は77と同様、局所的に大きめのキザミメを数個ずつ配置する近江型である。しかし、77とは異なり、口縁端部の大部分は無文で、調整技法も内外面ともハケに限られる。207・214・223の体部上位には幅0.2cmほどの篋描沈線が巡るが、その間隔には差がある。222には7条を1単位とした波状文が2段施される。227～238は甕の底部である。底径が10.7cmで最も大きい238は貯蔵具の可能性があるが、それ以外は外面に煤か、あるいは内面に炭化物が付着することから煮沸用と判断される。外面の調整は板ナデ(227～230)、ミガキ(231～233)、ハケ(235～238)に大別され、複数の技法を併用するもの234もある。外底面は平らで、体部が60°程度の角度で直線的に、あるいはやや内湾して立上がるものが多い。一方、227・228のように端部が外に張り出すものもある。231の内面には赤色顔料が付着する。これらの甕のうち、209・211・215は生駒西麓産の胎土で、残りは在地産である。

土器・土製品 239～241は紡錘車である。形態は、片側の軸孔の辺りが突出したもの239、厚みが一樣な円板状のもの241、両者の中間的なもの240に分かれる。軸孔の大きさは、240・241は直径0.6～0.7cm、239は直径0.3cmで一回り小さい。242は鉢である。調整はナデおよび板ナデを基調とする。外面には煤がつき、内面下部は器表の荒れが目立つ。243は底部中央に孔を一つ穿つ、いわゆる甗である。孔は内外両側から工具を差込んで開けられている。生駒西麓産で胎土に角閃石を多く含む。244・245は甕の蓋である。前者はハケ、後者はミガキで調整する。内面には裾端からやや内側に、約1cmの幅で帯状に煤が多くつく部分がある。246は無頸壺の口縁と考えられ、上端に把手をもつ。把手は半円形の扁平なもので、紐穴がある。同様の把手で紐穴が二つあるものが東大阪市山賀遺跡から出土している[大阪文化財センター1991]。247は表面全体が煤けており、甕の体部と考えられる。体部につけられた把手は薄くて小さく、手で掴むことさえ困難である。248～250は高杯の杯部と考えられる。口縁は外側へ直線的に延びる248・249と、やや内湾気味に立上がる250があり、口径も12cmから20cmを超えるものまでさまざまである。251は高杯の脚部である。脚柱部は柱状で、その下部を半球状に削り込むことで裾部を形成する。そのため、裾部は短く厚い。253は土製品の一部と考えられる。船形の軸先のような形で、上部には横方向の沈線が3条引かれている。252は小型の鉢である。外面には篋描による文様を施し、端部内面には列点を巡らす。胎土は密で、チャートや長石をわずかに含む。254は表面に煤が付着しており、甕の体部が



図31 SD05出土木製品

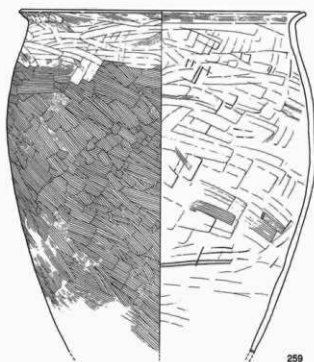
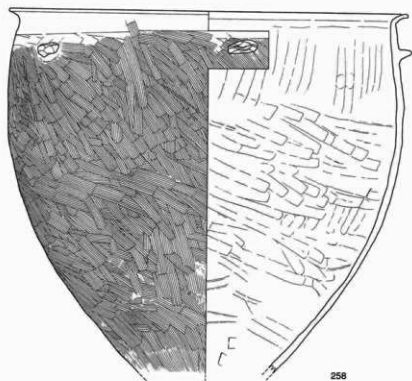


图32 SD06出土弥生土器(1)

円板に転用されたと判断できる。

木製品 255～257は木製品で、部材の一部と考えられる。255は長辺の一端を斜めに削り落としており、下部と片面を欠損しており、全容は不明である。樹種はクスギ節である。256はクスギ節の板材で、両端に出柄を削り出す。257は片面の中央に工具による削り込みがみられ、もう一方の面は平坦に仕上げられている。樹種はヤマグワである。

ii) SD06の遺物

SD06からは弥生土器258～296・土製円板297・石器298・299・木製品300が出土した。

弥生土器 258～272は甕である。胎土は264・266など数点が生駒西麓産で、それ以外は遺跡周辺の在地産でチャートや長石、酸化鉄粒を多く含むものである。258・259は大型で、前者は口径が52.4cm、残存高が48.0cm、後者は口径が37.6cm、残存高が45.3cmである。SD06の一番深い部分で重なった状態で見つかったため、出土当初は合わせ口の土器棺の可能性を考えた。しかし、両者とも口縁を下にしており、据え付けた痕跡もみられなかったため、その可能性は低いと思われる。いずれも底部を欠き、外面には煤が付着する。また、258の体部上位には把手が付く。残存するのは3個であるが、本来は4個あるいは5個あったと推測される。260は小型の甕で、体部上位には沈線が13条以上巡る。沈線は回転台を利用せずに竈で1条ずつ描かれており、上下に蛇行する。外面全体に煤が付着する。261～269は口縁部で、体部からわずかに外反するもの、横へ長く延びるもの、直角に近い角度で屈曲するものに分かれる。264は逆L字形といわれるもので、疑似口縁を作り出した後、さらに粘土を貼付けて成形されている。関西大学が所蔵する馬野繁蔵資料の中にも類似品がある[関西大学考古学研

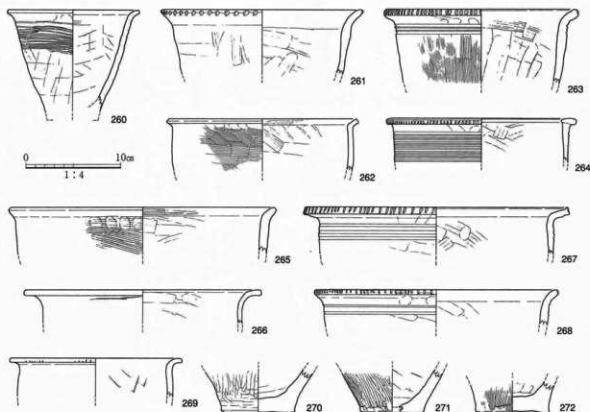


図33 SD06出土弥生土器(2)

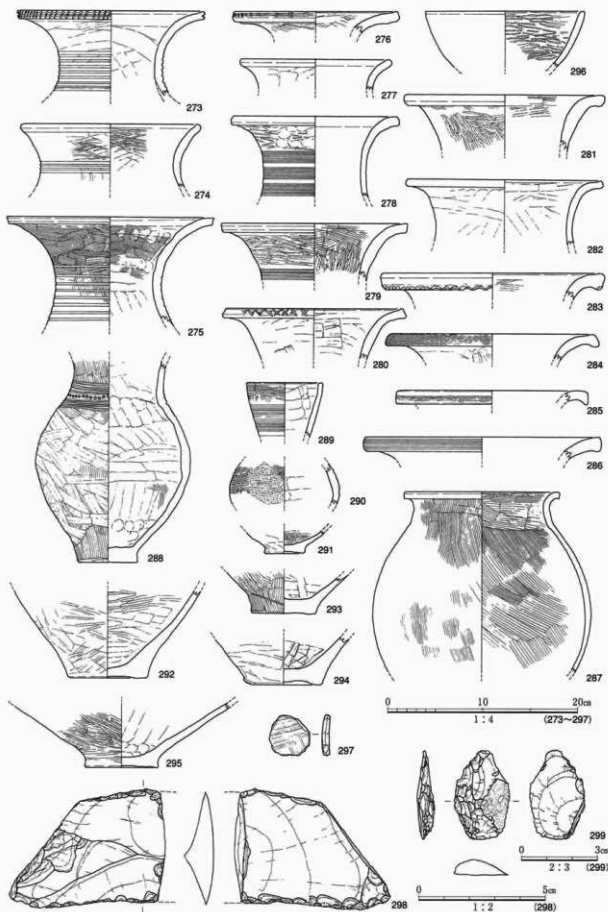


图34 SD06出土遗物

究室1987]。261・263・264・267～269は端部にキザミメがある。キザミメは、タテが0.7cm程度で大振りのも261・263・267と、一回り小さい0.5cm程度のも264・268、端部下端にわずかな刻みを入れるもの269など多様である。体部上位に匏描沈線を巡らすものも数点含まれる。270～272は底部で、いずれも外面に煤が付着する。270の内面には炭化物がこびりつき、断面も中ほどまで黒色化しており、かなりの熱を受けたことがわかる。外底面には初めは圧痕がつく。

273～290は壺で、289が細頸壺である以外はすべて広口壺に分類される。頸部の文様は直線文が主体で、匏描のものとは構描のものがある。口縁部は、厚みが頸部と変わらず端部が丸くおわる、あるいは端部外側に面をもつ273～277・282と、端部が上下に肥厚し加飾が目立つ278～281・283～286に分かれる。後者には、端部下端に矢羽根状のキザミメを入れた283や、構描波状文・直線文を施した284～286が含まれる。287には短い頸部が認められることから、器形上は壺として分類した。しかし、外面全体に煤が厚く付着し、煮炊きに使用したことは明らかなので、本来は甕として扱うべきかもしれない。調整は内外面ともハケを多用し、口縁の下端は少し垂下する。長石・酸化鉄粒などを胎土に含むが、ほかのものに比べ混り方が少ない。288は壺の体部で外面2個所に黒斑がつく。体部と頸部との境に直線文と列点文を巡らす。直線文は構描で深く刻まれており、列点文は直径が2.5mm程度の中実の棒を原体とする。290は小型の壺で、体部中位に構描による波状文と直線文がみられる。これらの文様は回転台を利用せずに施文されているため、回転台を使ったものに比べ振幅が大きい。291～295は底部から体部に向かって大きく広がり、外面に煤の付着もみられないことから壺の底部と判断した。平坦な外底面から滑らかに体部へとつながるものが大半を占めるが、294のように外周に粘土紐をつけ、中央が上げ底状になっているものもある。296は高杯の杯部で、口縁はやや内湾しながら立上がる。

これらの土器は畿内第Ⅰ様式新段階から第Ⅲ様式にまで及ぶ。

石器 298・299はいずれもサヌカイト製の打製石器である。298は裏面から見て右側が自然面で、左側を折損した大型の細部調整剥片である。表裏面とも上・下辺に細かい剥離面が並ぶ。299は形状から石鏃の未製品と考えられる。裏面は主剥離面1枚からなり、表面には部分的に自然面が残る。

木製品 300は木製品の柄と考えられる。残存長は48.5cmで、断面形は長径が約2.7cm、短径が約2.1cmの楕円である。柄頭は中位の幅がやや広く、上端と下端が細くなるように削り出している。樹種はアカガシ亜属である。

iii) SD08・SK02の遺物

SD08およびSK02から出土した遺物には弥生土器306～319・土製円板320・石器301～305・木製品321～323がある。

石器 301～303はサヌカイト製の打製石器である。301は上部を折損する尖頭器あるいは石鏃の未製品と考えられる。側面だけでなく基部にも表裏両面から細部調整が加えられており、鋭利なつくり

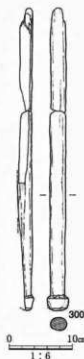


図35 SD06出土
木製品

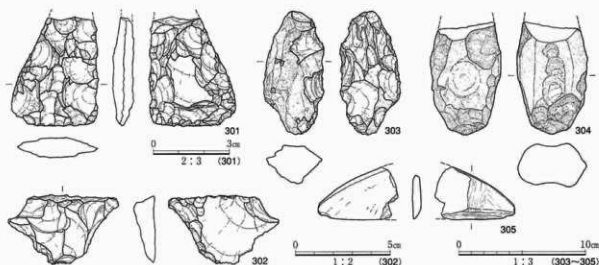


図36 SD08・SK02出土石器

である。302は裏面の側面に細部調整がみられる剥片である。上端には自然面を残す。303は石核石器の未製品である。裏面左下にある大きなポジティブ面を形成した剥離に失敗したため、廃棄されたと考えられる。304は燧石と思われる。表裏とも中央に凹みがあり、下辺は打撃痕が顕著に残る。石材は砂岩である。305は緑色片岩製の磨製石庖丁である。片刃で、直線刃半月形に分類される。

弥生土器 306はつまみ上げたような扁平な把手がつく甕の蓋である。5箇所に孔があるが、うち一つは完全には貫通せず、わきに打ち直している。穿孔に使った道具は差込み、引き抜きとも内側から行われている。307～310は甕である。307は小型で体部下半に最大径がある。内面には炭化物、外面には煤が器面全体に付着する。308は底部を欠くが、ほぼ全体の形状がわかる。体部の最大径は器高の中ほどにあり、口縁部は如意状に長く外反する。309は焼成が堅緻で橙褐色を呈する。甕の大半が焼け、器壁の荒れが目立つのとは対照的である。歪みがあることも考慮すると、焼成途中で割れた不良品の一部とも考えられる。310は最大径が体部中ほどにある大型の甕である。外面にはハケ、内面にはナデを上下数段階に分けて密に施す。311～317は壺である。そのうち、311・312・317は生駒西麓産で、残りは在地産である。311は口縁部の端がわずかに垂下し、端面の下半に幅0.8cmほどの矢羽根状のキザミメを連続して施す。314は太頸の広口壺であるが、外面には煤が付着する。315～317は外面に直線文の装飾がある口縁部と体部である。315・317は櫛描で、316は篋描で施文する。318は鉢である。外面の上半と口縁端面に櫛描による文様がある。319は壺の底部と思われる。丸底気味で不安定である。これら土器は、畿内第Ⅰ様式の新段階から第Ⅱ様式新段階に位置づけられる。

木製品 321は厚みが約1.0cmの板材で、図の左から右へ向って孔が一つ穿たれている。樹種はヒノキである。322は残存長が156.9cm、厚みがもっとも厚いところで約8.8cmである。片面には上端が平らな突起があり、もう一方の面は曲面を描く。幅約5.5cmの工具痕が顕著に残り、特に突起のある面の工具痕は長軸に平行なものが多く、樹種はアカガシ亜属である。神奈川県池子遺跡群から類似品が出土しており、4連の直柄平櫛の未製品として報告されている[かながわ考古財団1999]。形状からは櫛の可能性も考えられるが、これまでの出土例は大型品でも長さが100cm前後[奈良国立文化財研究所1993]であり、突起部分に連結するために使う横棧を渡すための柄孔や溝もみられないことから考

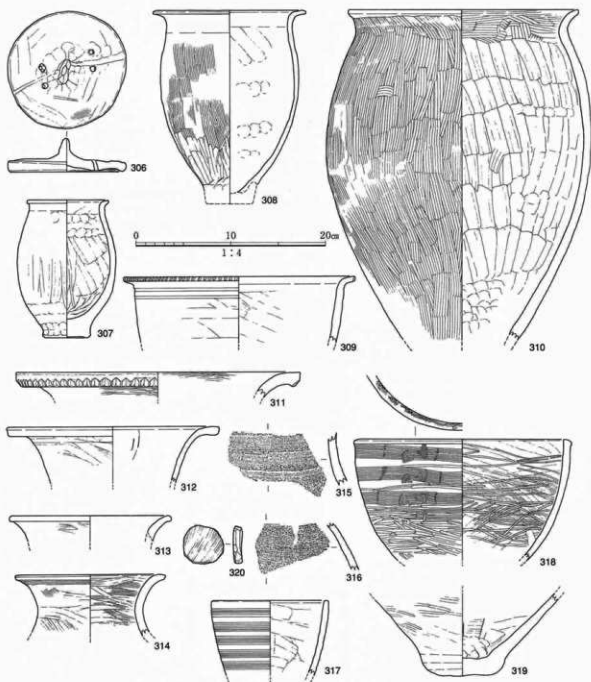


図37 SD08・SK02出土弥生土器・土製円板

慮を要する。323は残存長が185.8cm、幅が約13cmの柱状の木材で、建築部材と考えられる。断面形は四角形の部分と三角形に近い部分がある。一側面に樹皮がつき、加工が施された面の一部には、幅が約1.5cmの細かい工具痕が残る。また、石斧でつけたと思われる抉りが一個所ある。樹種はクスギ節である。

5) 弥生時代中期以降の遺構と遺物 (図6・39、図版12・21)

SD09は拡張区3Nで検出したSD06を切る東西方向の溝である。幅は約1.8mで、残存する深さは約0.2mである。遺物は弥生土器の底部と土師器の可能性のある土器片が出土した。

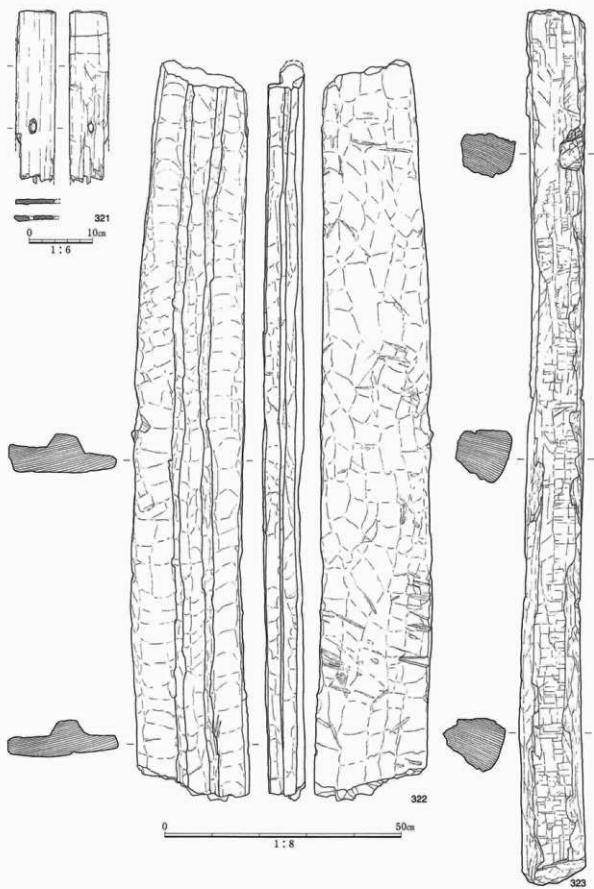


図38 SD08・SK02出土木製品

そのほか、弥生時代中期以降の遺物については、前記した弥生時代の溝の上位や第1層からも少量であるが見つかっている。

324は太型蛤刃石斧で上半分と刃先を欠く。ハンレイ岩製で、表面全体に鉄分が沈着する。325は畿内第Ⅴ様式の甕の体部下半である。外面調整は螺旋状タタキを基調とし、部分的にハケメがみられる。内面全体に炭化物が付着する。326は弥生土器の鉢あるいは直口壺の口縁部である。内外面ともナデ調整で器壁は厚い。胎土にはチャートや長石の亜角礫を多く含む。327は土師器の甕と考えられる。口縁部の先端には内外面とも煤が付着する。胎土は粗く、長石やチャートを非常に多く含む。328は土師器の杯である。口縁端部は厚く、内傾する広い平坦面をもつ。329は鍋か甗に付属する把手である。表面には成形のための指圧痕が顕著に残る。厚みは約2cmで、横断面形がやや扁平な楕円であることから、年代は古墳時代中期後半から後期に位置づけられる。330は表面に、断面が三角形

の突帯を貼付けた土師器片である。移動式竈の一部である可能性が考えられる。331は半球形に近い土師器の皿である。調整はナデを基調とし、外面の一部にはユビオサエの痕が残る。胎土は精良である。332は瓦器碗の底部である。表面は磨滅しており、全体が灰白色を呈する。貼付高台の断面形は正三角形に近く、高台径が6.2cmと大きいことから、年代は鈴木編年のC-I期に比定できる。333は木製容器である。底部が体部より厚く、底部と体部の境界外面には凹みがある。凹みの少し上には、直径約0.8cmの穴が一つ開けられている。内底面に残る圧痕から、穴には棒状のものが通されていたことがわかる。このような形状から、茶杓の含(水をすくう部分)である可能性が高い。

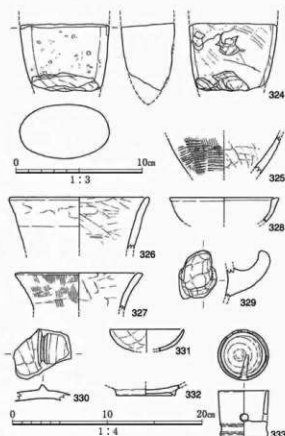


図39 弥生時代中期以降の遺物
第1層(324・331・333)、SD03(325・328)、
SD05上位(329・330)、SD06上位(332)

6) 小結

本調査地が位置する大和川南側河川敷では、川による浸食作用で弥生時代の遺物包含層はすでに削りとられ、遺構のうち掘削深度が浅いものは失われていると考えられる。今回検出した遺構としては、縄文時代の溝・自然流路、弥生時代の溝・土壇、古墳時代まで下る可能性をもつ溝がある。縄文時代の遺構からは早期から晩期にいたる縄文土器が見つかった。弥生時代の遺構から出土した遺物の大半は、畿内第Ⅰ様式新段階から第Ⅱ様式にかけての弥生土器である。SD06やSD03の東部(SD04)のように第Ⅲ～Ⅳ様式の弥生土器が認められた遺構もあったが、その量はごくわずかである。また、サヌカイト製の石器は剥片を含めると200点を超えたが、製品・未製品ともに少ない。

註)

(1)明治大学佐々木憲一氏から御教示を賜った。



川岸調査区と大和川

第Ⅳ章 遺構と遺物の検討

第1節 瓜破遺跡(UR00-11・01-17次調査)の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1) 調査目的

今回の分析調査の目的は、UR00-11次調査(I区)とUR01-17次調査(II区)で採取された堆積物の花粉分析と、水洗選別によって得られた種実・昆虫遺体および木材の種類同定を行うことで、瓜破遺跡における旧石器時代から弥生時代にかけての古環境に係わる情報を得ることにある。各時代別には次のような課題がある。

・旧石器時代から縄文時代

この時期の堆積物は多数の流路によって分断されており、I・II区間で層序の対応関係が判然としない部分があった。そこで、花粉分析など生層序学的手法を用いて周辺遺跡(山之内遺跡・長原遺跡等)で得られた結果と対比を行い、層序の検証を試みるとともに当該期の環境の復元に努める。

・縄文時代末から弥生時代初期

発掘調査において当該期は、堆積作用が緩やかに進む環境から大規模な自然流路が形成される環境へと変化したことが確認されている。この変化を花粉化石や種実の産状で追認できるかどうか確かめるとともに、大型の植物遺体の産状から集水域の局地的な古環境を検討する。

・弥生時代

本調査地の西部は集落域内に位置していると考えられることから、植物化石や昆虫化石の産状をもとに、土地利用や栽培植物に関する情報を得る。

2) 試料

分析試料は、発掘調査時に採取された試料の中から上記の目的を考慮して選択されたものである。

花粉分析用試料は48点(表2、試料番号1~48)で、6地点から採取されている(図40・41)。A~D地点は旧石器時代から縄文時代の堆積物に相当する。SD03とSD08は弥生時代前期に掘削された溝で、試料は溝内堆積物から採取されている。各試料採取地点と本調査の層序との対応関係は模式柱状図(図41)に示す。

種実同定用試料は、弥生時代の溝(SD03・SD06・SD08)・弥生時代の土壌(SK02)・縄文時代後～晩期の流路(NR01)・中期旧石器時代の堆積層(第11層=長原16A?・第12層=長原16Bi?)から得られた8点(A~H)である。これらと花粉分析の結果を合わせて、縄文時代の環境復元や弥生時代以降の植

表2 花粉分析試料一覧

No.	次数	Sample No.	層序	層	No.	次数	Sample No.	層序	層	No.	次数	Sample No.	層序・遺構	層					
今回の調査					既調査基本層序					今回の調査					既調査基本層序				
A	1	I区	161	4層	NG9B	A	17	I区	153	8層	D	33	II区	34	9~10層	NG13~15			
A	2	I区	160	5層	NG9C	A	18	I区	151	8層	D	34	II区	35	9~10層	NG13~15			
A	3	I区	159	6層	NG10~11	A	19	I区	149	9層	D	35	II区	37	9~10層	NG13~15			
A	4	I区	164	6層	NG10~11	A	20	I区	148	9層	D	36	II区	39	9~10層	NG13~15			
A	5	I区	165	6層	NG10~11	A	21	I区	146	9層	D	37	II区	40	9~10層	NG13~15			
A	6	I区	167	6層	NG10~11	A	22	I区	145	10層	D	38	II区	41	9~10層	NG13~15			
A	7	I区	168	6層	NG10~11	B	23	I区	5	5層	C	39	II区	43	12層	NG16Bh?			
A	8	I区	170	6層	NG10~11	B	24	I区	5	5層	NG9C	C	40	II区	45	12層	NG16Bh?		
A	9	I区	156	7層	NG12A・B	D	25	II区	19	6層	C	41	II区	14	13層	NG16Bh?			
A	10	I区	171	7層	NG12A・B	D	26	II区	21	7~8層	D	42	I区	122	SD03				
A	11	I区	172	7層	NG12A・B	D	27	II区	23	7~8層	D	43	I区	124	SD03				
A	12	I区	174	7層	NG12A・B	D	28	II区	24	7~8層	D	44	I区	126	SD03				
A	13	I区	175	7層	NG12A・B	D	29	II区	26	7~8層	D	45	I区	39	SD08				
A	14	I区	177	7層	NG12A・B	D	30	II区	28	7~8層	D	46	I区	43	SD08				
A	15	I区	178	7層	NG12A・B	D	31	II区	30	7~8層	D	47	I区	45	SD08				
A	16	I区	154	8層	NG12B	D	32	II区	32	9~10層	D	48	I区	52	SD08				

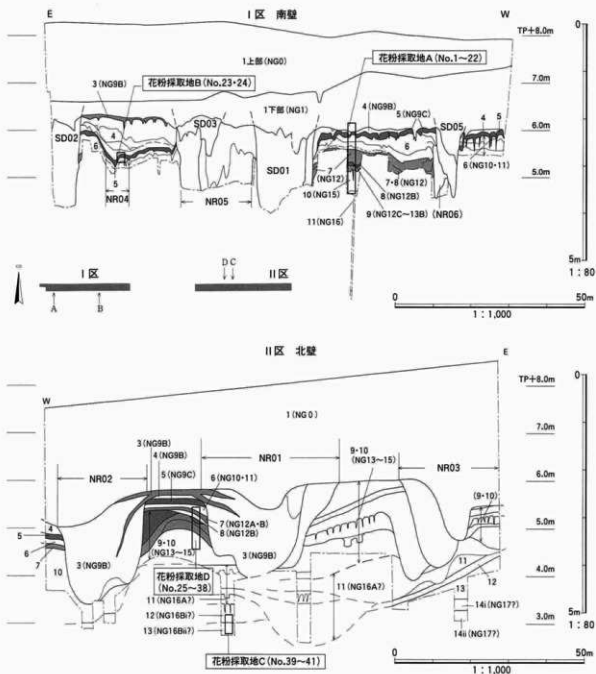


図40 分析資料採取位置図

標高 (m)

8.0

7.0

6.0

5.0

4.0

3.0

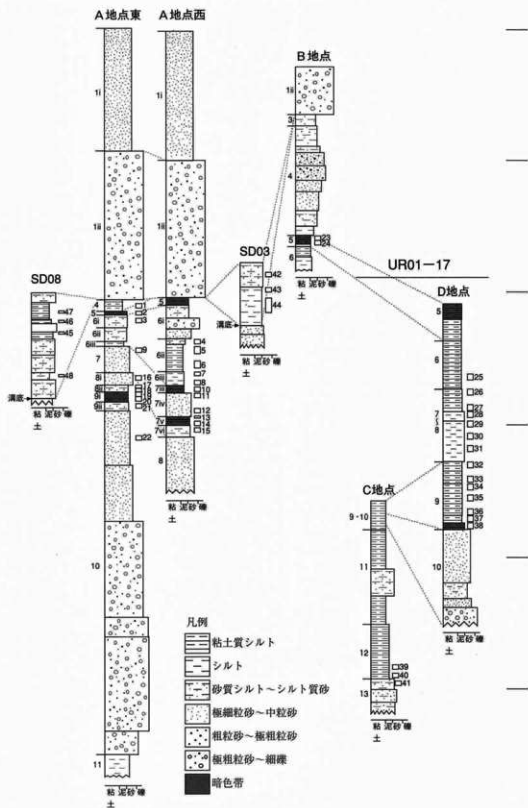


図41 調査地点の層序および試料採取位置

物利用に関する検討を行う。なお、これら8点是小袋によってさらに細かく分けられており、その総数は32点である。表4では大区分(8点)で表記しているが、処理は小袋ごとに行っており、細分が可能である。試料の詳細は表4に記す。

樹種同定用試料は、弥生時代を中心とした木製品など16点である。試料の詳細は表5に記す。

昆虫同定用試料は、弥生時代の溝(SD03・SD06・SD08)・弥生時代の土壌(SK02)・縄文時代後～晩期の流路(NR01)・中期旧石器時代の堆積層(第12層)から得られた7点(a～f・h)である。これらは花粉分析や種実遺体と合わせて、旧石器時代以降の環境復元を行う際の検討材料とする。なお、試料の詳細は表6に記す。

3) 分析方法

i) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化→篩別→重液(臭化亜鉛：比重2.3)による有機物の分離→フッ化水素酸による鉱物質の除去→アセトリシス(無水酢酸9：濃硫酸1の混合液)処理の順に物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類(Taxa)について同定・計数する。

結果は、木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いたものをそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。図表中で複数の種類をハイフン(ー)で結んだものは、種類間の区別が困難なものである。なお、総数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるため、出現した種類を+で表示するにとどめておく。

ii) 種実同定

1 試料中には複数の種類・部位が混在する。そこで、試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、植物遺体の形態的特徴と当社所有の現生標本との比較から種類を同定して計数を行う。針葉は先端部の個数を、ヒノキの枝葉は十字対生の4枚の葉を一对として対の数を数える。なお、細片のため個体数推定が困難である種類は表中に「破」と、数字の個体数以上が推定される種類は「数字+」と表示する。同定・計数後の種実遺体等は、種類毎にビン詰めを行い、50%程度のエタノール溶液による液浸保存処理を施す。

iii) 樹種同定

剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラル(抱水クロラル・アラビアゴム粉末・グリセリン・蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

iv) 昆虫同定

肉眼観察および双眼実体顕微鏡下で観察し、昆虫遺体を分類・同定する。なお、同定に関しては、元国立科学博物館の藤山家徳先生にお願いした。

4) 分析結果

表 3 花粉分析結果一覽

[illegible]

i)花粉分析 (表3、図42、写真9・10)

結果の詳細を表3・図42に示し、以下に各地点の産出状況を述べる。

・A地点

試料番号13でコナラ亜属が多産したほかは、花粉化石の検出数は少なかった。分析処理量は先述したように湿重で約10gであるが、分析後の残量はいずれの試料もきわめて少なかった。表3で比較的多産しているようにみえる試料番号6は、分析残渣すべてを検鏡した結果であり、堆積物1g当りに換算すると数十個程度しか含まれていないことになる。これらの分析残渣中には、植物の組織に由来するとみられる数10 μ 前後の有機物片を含むものもあったが、花粉化石はほとんど認められなかった。また、わずかに産出した花粉化石も保存状態が悪く、大部分の表面に風化の痕跡が認められた(写真9)。風化の痕跡は、風化に対する抵抗性が強いとされる針葉樹花粉やシダ類孢子でも顕著であった。膜全体が溶けて薄くなっているものや、モザイク状に孔があいているものがあり、試料番号13で多産したコナラ亜属の花粉の表面にも風化の痕跡が多数認められた(写真9-3参照)。なお、コナラ亜属については花粉塊として取込まれたものが分析処理の工程で分離し、多数検出されるに至ったと考えられる。したがって、本試料の花粉組成は偏った結果になっている可能性が高い。

・B地点

試料番号24ではシダ類孢子、試料番号23では木本花粉の占める割合が高い。試料番号24は、シダ類孢子と針葉樹花粉が多い傾向にある。針葉樹花粉ではコウヤマキ属が、広葉樹花粉ではコナラ亜属・アカガシ亜属の割合が高い。草本花粉としてはイネ科などを検出したが、出現率は低い。試料番号23は、アカガシ亜属の花粉が木本花粉全体の半分近くを占め、コナラ亜属も比較的多い。一方草本花粉はほとんどみられない。

・C地点

分析を行った3試料(試料番号39-41)はいずれも類似した組成を示した。針葉樹花粉の割合が高いのが特徴で、コウヤマキ属・マツ属・トウヒ属・ツガ属などが含まれる。シダ類孢子が占める割合も比較的高いが、草本花粉の割合は低い。

・D地点

分析を行った試料からは、花粉化石がほとんど検出されなかった。分析処理後の残量は、先に述べたA地点よりも少なく、検鏡は大部分の試料で分析残渣全量について実施した。検出される種類は、シダ類孢子や針葉樹花粉が主体である。本地点の試料の中で、比較的多産した試料番号38から検出されたツガ属の花粉を写真9-2に示す。写真からもわかるように花粉膜は著しく劣化している。このような状況は多産するシダ類孢子でも観察された。以上から、本地点では風化作用の影響で多くの花粉化石が分解消失し、偏った組成となっていると判断される。

・SD03

試料番号43・44は木本花粉・草本花粉がともに多産した。木本花粉ではマキ属・モミ属・ツガ属・コナラ亜属・アカガシ亜属、草本花粉ではイネ科・ヨモギ属などの占める割合が高い。上位の堆積物から採取された試料番号42では、木本花粉の占める割合が高い。特にコナラ亜属が卓越する。一方、

表4 種実同定結果一覧

		A		B		C		D		E		F		G		H		I		J		K		L		M		N		O		P		Q		R		S		T		U		V		W		X		Y		Z		aa		ab		ac		ad		ae		af		ag		ah		ai		aj		ak		al		am		an		ao		ap		aq		ar		as		at		au		av		aw		ax		ay		az		ba		bb		bc		bd		be		bf		bg		bh		bi		bj		bk		bl		bm		bn		bo		bp		bq		br		bs		bt		bu		bv		bw		bx		by		bz		ca		cb		cc		cd		ce		cf		cg		ch		ci		cj		ck		cl		cm		cn		co		cp		cq		cr		cs		ct		cu		cv		cw		cx		cy		cz		da		db		dc		dd		de		df		dg		dh		di		dj		dk		dl		dm		dn		do		dp		dq		dr		ds		dt		du		dv		dw		dx		dy		dz		ea		eb		ec		ed		ee		ef		eg		eh		ei		ej		ek		el		em		en		eo		ep		eq		er		es		et		eu		ev		ew		ex		ey		ez		fa		fb		fc		fd		fe		ff		fg		fh		fi		fj		fk		fl		fm		fn		fo		fp		fq		fr		fs		ft		fu		fv		fw		fx		fy		fz		ga		gb		gc		gd		ge		gf		gg		gh		gi		gj		gk		gl		gm		gn		go		gp		gq		gr		gs		gt		gu		gv		gw		gx		gy		gz		ha		hb		hc		hd		he		hf		hg		hi		hj		hk		hl		hm		hn		ho		hp		hq		hr		hs		ht		hu		hv		hw		hx		hy		hz		ia		ib		ic		id		ie		if		ig		ih		ii		ij		ik		il		im		in		io		ip		iq		ir		is		it		iu		iv		iw		ix		iy		iz		ja		jb		jc		jd		je		jf		jg		jh		ji		jj		jk		jl		jm		jn		jo		jp		jq		jr		js		jt		ju		jv		jw		jx		jy		jz		ka		kb		kc		kd		ke		kf		kg		kh		ki		kj		kk		kl		km		kn		ko		kp		kq		kr		ks		kt		ku		kv		kw		kx		ky		kz		la		lb		lc		ld		le		lf		lg		lh		li		lj		lk		ll		lm		ln		lo		lp		lq		lr		ls		lt		lu		lv		lw		lx		ly		lz		ma		mb		mc		md		me		mf		mg		mh		mi		mj		mk		ml		mm		mn		mo		mp		mq		mr		ms		mt		mu		mv		mw		mx		my		mz		na		nb		nc		nd		ne		nf		ng		nh		ni		nj		nk		nl		nm		nn		no		np		nq		nr		ns		nt		nu		nv		nw		nx		ny		nz		oa		ob		oc		od		oe		of		og		oh		oi		oj		ok		ol		om		on		oo		op		oq		or		os		ot		ou		ov		ow		ox		oy		oz		pa		pb		pc		pd		pe		pf		pg		ph		pi		pj		pk		pl		pm		pn		po		pp		pq		pr		ps		pt		pu		pv		pw		px		py		pz		qa		qb		qc		qd		qe		qf		qg		qh		qi		qj		qk		ql		qm		qn		qo		qp		qq		qr		qs		qt		qu		qv		qw		qx		qy		qz		ra		rb		rc		rd		re		rf		rg		rh		ri		rj		rk		rl		rm		rn		ro		rp		rq		rr		rs		rt		ru		rv		rw		rx		ry		rz		sa		sb		sc		sd		se		sf		sg		sh		si		sj		sk		sl		sm		sn		so		sp		sq		sr		ss		st		su		sv		sw		sx		sy		sz		ta		tb		tc		td		te		tf		tg		th		ti		tj		tk		tl		tm		tn		to		tp		tq		tr		ts		tt		tu		tv		tw		tx		ty		tz		ua		ub		uc		ud		ue		uf		ug		uh		ui		uj		uk		ul		um		un		uo		up		uq		ur		us		ut		uu		uv		uw		ux		uy		uz		va		vb		vc		vd		ve		vf		vg		vh		vi		vj		vk		vl		vm		vn		vo		vp		vq		vr		vs		vt		vu		vv		vw		vx		vy		vz		wa		wb		wc		wd		we		wf		wg		wh		wi		wj		wk		wl		wm		wn		wo		wp		wq		wr		ws		wt		wu		wv		ww		wx		wy		wz		xa		xb		xc		xd		xe		xf		xg		xh		xi		xj		xk		xl		xm		xn		xo		xp		xq		xr		xs		xt		xu		xv		xw		xx		xy		xz		ya		yb		yc		yd		ye		yf		yg		yh		yi		yj		yk		yl		ym		yn		yo		yp		yq		yr		ys		yt		yu		yv		yw		yx		yy		yz		za		zb		zc		zd		ze		zf		zg		zh		zi		zj		zk		zl		zm		zn		zo		zp		zq		zr		zs		zt		zu		zv		zw		zx		zy		zz		aa		ab		ac		ad		ae		af		ag		ah		ai		aj		ak		al		am		an		ao		ap		aq		ar		as		at		au		av		aw		ax		ay		az		ba		bb		bc		bd		be		bf		bg		bh		bi		bj		bk		bl		bm		bn		bo		bp		bq		br		bs		bt		bu		bv		bw		bx		by		bz		ca		cb		cc		cd		ce		cf		cg		ch		ci		cj		ck		cl		cm		cn		co		cp		cq		cr		cs		ct		cu		cv		cw		cx		cy		cz		da		db		dc		dd		de		df		dg		dh		di		dj		dk		dl		dm		dn		do		dp		dq		dr		ds		dt		du		dv		dw		dx		dy		dz		ea		eb		ec		ed		ee		ef		eg		eh		ei		ej		ek		el		em		en		eo		ep		eq		er		es		et		eu		ev		ew		ex		ey		ez		fa		fb		fc		fd		fe		ff		fg		fh		fi		fj		fk		fl		fm		fn		fo		fp		fq		fr		fs		ft		fu		fv		fw		fx		fy		fz		ga		gb		gc		gd		ge		gf		gg		gh		gi		gj		gk		gl		gm		gn		go		gp		gq		gr		gs		gt		gu		gv		gw		gx		gy		gz		ha		hb		hc		hd		he		hf		hg		hi		hj		hk		hl		hm		hn		ho		hp		hq		hr		hs		ht		hu		hv		hw		hx		hy		hz		ia		ib		ic		id		ie		if		ig		ih		ii		ij		ik		il		im		in		io		ip		iq		ir		is		it		iu		iv		iw		ix		iy		iz		ja		jb		jc		jd		je		jf		jg		jh		ji		jj		jk		jl		jm		jn		jo		jp		jq		jr		js		jt		ju		jv		jw		jx		jy		jz		ka		kb		kc		kd		ke		kf		kg		kh		ki		kj		kk		kl		km		kn		ko		kp		kq		kr		ks		kt		ku		kv		kw		kx		ky		kz		la		lb		lc		ld		le		lf		lg		lh		li		lj		lk		lm		ln		lo		lp		lq		lr		ls		lt		lu		lv		lw		lx		ly		lz		ma		mb		mc		md		me		mf		mg		mh		mi		mj		mk		ml		mm		mn		mo		mp		mq		mr		ms		mt		mu		mv		mw		mx		my		mz		na		nb		nc		nd		ne		nf		ng		nh		ni		nj		nk		nl		nm		nn		no		np		nq		nr		ns		nt		nu		nv		nw		nx		ny		nz		oa		ob		oc		od		oe		of		og		oh		oi		oj		ok		ol		om		on		oo		op		oq		or		os		ot		ou		ov		ow		ox		oy		oz		pa		pb		pc		pd		pe		pf		pg		ph		pi		pj		pk		pl		pm		pn		po		pp		pq		pr		ps		pt		pu		pv		pw		px		py		pz		qa		qb		qc		qd		qe		qf		qg		qh		qi		qj		qk		ql		qm		qn		qo		qp		qq		qr		qs		qt		qu		qv		qw		qx		qy		qz		ra		rb		rc		rd		re		rf		rg		rh		ri		rj		rk		rl		rm		rn		ro		rp		rq		rr		rs		rt		ru		rv		rw		rx		ry		rz		sa		sb		sc		sd		se		sf		sg		sh		si		sj		sk		sl		sm		sn		so		sp		sq		sr		ss		st		su		sv		sw		sx		sy		sz		ta		tb		tc		td		te		tf		tg		th		ti		tj		tk		tl		tm		tn		to		tp		tq		tr		ts		tt		tu		tv		tw		tx		ty		tz		ua		ub		uc		ud		ue		uf		ug		uh		ui		uj		uk		ul		um		un		uo		up		uq		ur		us		ut		uu		uv		uw		ux		uy		uz		va		vb		vc		vd		ve		vf		vg		vh		vi		vj		vk		vl		vm		vn		vo		vp		vq		vr		vs		vt		vu		vv		vw		wx		wy		wz		xa		xb		xc		xd		xe		xf		xg		xh		xi		xj		xk		xl		xm		xn		xo		xp		xq		xr		xs		xt		xu		xv		xw		xx		xy		xz		ya		yb		yc		yd		ye		yf		yg		yh		yi		yj		yk		yl		ym		yn		yo		yp		yq		yr		ys		yt		yu		yv		yw		yx		yy		yz		za		zb		zc		zd		ze		zf		zg		zh		zi		zj		zk		zl		zm		zn		zo		zp		zq		zr		zs		zt		zu		zv		zw		zx		zy		zz		aa		ab		ac		ad		ae		af		ag		ah		ai		aj		ak		al		am		an		ao		ap	
--	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--

草本花粉は全て減少し、種類構成も単調となる。

・SD08

試料番号48は花粉化石の保存状態が悪く、ほとんど産出しない。試料番号45～47は類似する組成を示す。木本花粉は、マキ属・モミ属・ツガ属・マツ属・コナラ亜属・アカガシ亜属などが多く、全体的に針葉樹花粉の占める割合が高い。草本花粉は、イネ科・カヤツリグサ科・ヨモギ属などが検出された。

ii) 種実同定 (表4、写真11)

結果を表4に示す。裸子植物5種類・被子植物60種類の種実・葉が同定されたほか、木の芽・植物のトゲ・材・炭化材・蕨類・不明植物(木材組織が認められない、部位・種類ともに不明の植物片を示す)・菌類の菌核(樹皮の表面に付着していた肉座菌などが考えられる)・昆虫遺骸の破片などが検出された。

検出された種実、保存状態が比較的良好である。木本は、針葉樹5種類(カヤ・イヌガヤ・モミ属・マツ属複雑管束亜属・ヒノキ)、広葉樹33種類(オニグルミ・イヌシデ・アサダ・ナラガシワ近似種・コナラ亜属・アカガシ亜属・クリ・ケヤキ・ムクノキ・ヤマグワ・カジノキ属・ホノノキ・マタタビ属・サクラ属・キイチゴ属・サンショウ属・カラスザンショウ・キハダ・アカメガシワ・カエデ属・トチノキ・ムクロジ・ブドウ属・ツバキ・ヒサカキ属・タラノキ・ウコギ属・クマノミズキ・エゴノキ属・クサギ・ムラサキシキブ属・ニワトコ・ガマズミ属)が同定された。また、葉片を確認したが、同定根拠となる先端部や基部を欠損するため、広葉樹にとどめた。草本は、単子葉植物10種類(ミクリ属・ヒルムシロ属・イバラモ属・ヘラオモダカ・オモダカ科・エノコログサ属・ホタルイ属・カヤツリグサ科・イボクサ・ミズアオイ属)、双子葉植物27種類(カナムグラ・カラムシ属・ギシギシ属・サナエタデ近似種・タデ属・アカザ科・ナデシコ科・トウゴクサバノオ・キケマン属・キジムシロ属・ヘビイチゴ属・オランダイチゴ

表5 樹種同定結果一覧

報告番号	番号	RNo.	遺構	器種	時期	学名	和名
300	ア	R304	SD06	柄	弥生前～中期	<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	コナラ属アカガシ亜属
255	イ	R330	SD05	部材	弥生前～中期	<i>Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Cerris</i>	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
321	ウ	R366	SK02	部材	弥生前主体	<i>Chamaecyparis obtusa</i>	ヒノキ
322	エ	R371	SK02	未製品・蟻?	弥生前主体	<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
323	オ	R474	SD08	部材/建築	弥生前主体	<i>Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Cerris</i>	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
256	カ	R330	SD05	部材	弥生前～中期	<i>Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Cerris</i>	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
257	キ	R385	SD05	部材	弥生前～中期	<i>Morus australis</i>	ヤマグワ
	ク	R71	(第1層)	柄?		<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
333	ケ	R52	(第1層)	筒状/茶杓?		<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属
		R70	SD03	(自然木)	弥生前～中期	<i>Aphananthe aspera</i>	ムクノキ
		R379	SD08	(自然木)	弥生前主体	<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
		R468	SD05	(自然木)	弥生前～中期	<i>Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Prinus</i>	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		R469	SD05	(自然木)	弥生前～中期	<i>Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Prinus</i>	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		R470	SD01	(自然木)	縄文	<i>Morus australis</i>	ヤマグワ
		R471	SD05	(自然木)	弥生前～中期	<i>Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Prinus</i>	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		R472	SD05	(自然木)	弥生前～中期	<i>Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Cerris</i>	コナラ属コナラ亜属クヌギ節

属・カタバミ属・エノキグサ・ノブドウ・ブドウ科・オトギリソウ属・スミレ属・セリ科・キランソウ属・メハジキ属・エゴマ・シソ属・イヌコウジュ属・ナス科・オミナエシ属・メロン類・オナモミ属・キク科)が同定された。なお、同定された種実遺体の形態記載については割愛するが、詳細結果は大阪市文化財協会が保管する。

iii) 樹種同定 (表5、写真12)

結果を表5に示す。木材は、針葉樹2種類(マツ属複維管束亜属・ヒノキ)と広葉樹5種類(コナラ属コナラ亜属クスギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・コナラ属アカガシ亜属・ムクノキ・ヤマグワ)に同定された。

iv) 昆虫同定 (表6、写真10)

結果を表6に示す。検出された昆虫化石は、オサムシ類・ゴミムシ類・アオゴミムシ類?・ケシガムシ類・コマルガムシ類・ガムシ類・エンマムシ類・エンマコガネ類・マグソコガネ類・コガムシ・ハエ類・ヤスデ類である。

5) 考察

i) 古植生推定

花粉分析結果をみると、B地点・C地点・SD03・SD08の各地点では花粉化石が良好に産出したが、A・D地点ではほとんど検出されなかった。分析結果の項でも述べたように、わずかに産出する花粉化石はいずれも保存状態が悪いものであり、種類同定ができないものも多かった。花粉化石は、好気的状況下では分解されやすいとされる[中村純1967]が、その分解過程に関しては未だ不明な点が多い。今回の場合、広葉樹花粉と比較して、風化に対する抵抗性が強いとされる針葉樹花粉やシダ類胞子でも風化の痕跡が明瞭に認められたことから、広葉樹花粉など多くの花粉化石が分解消失していると判断される。A・D地点の堆積物は、その層相から本来は後背湿地などに堆積した水成層と考えられるため、堆積後に好気的状況下になり、その際に花粉化石が分解された可能性がある。A地点とD地点の産状は類似するが、検出種類数や保存状態をみれば、D地点の方が風化の痕跡が明瞭であった。このような差異が何を意味するかは現時点では特定できず、今後の課題とされる。一方、種実などの大型植物遺体群は、A～E(弥生時代前期・弥生時代中～前期)・F(縄文時代後～晩期)・G・H(中期旧石器時代)と時代別に特徴が異なる。以下、これらの組成からみた古植生変遷について述べる。

・旧石器時代

C地点の試料は、長原遺跡標準層序の長原第16Bi～ii層に対応すると考えられ、中位段丘構成層の上部に相当することになる[趙哲済2001]。花粉化石では、モミ属・ツガ属・トウヒ属・コウヤマキ属・マツ属など針葉樹を主体とした群集が得られた。当社では、山之内遺跡YM91-12・93-12次調査、長原遺跡NG91-1次調査において、同時期に当る層準で花粉分析調査を実施し、古植生に関する検討を行っている[清水和明1998ほか]。また、小倉博之等も同層準の分析を実施している[小倉博之ほか1992]。これらによれば、長原第16A～16B層に対応する時期には、スギ属やハンノキ属などが減少し、マツ属・モミ属・ツガ属・トウヒ属・コウヤマキ属などの針葉樹を主体とする花粉化石群集へ変

表6 昆虫同定結果一覧

区	遺構	試料	種類	部位など	備考
I	SD03	a	コアオハナムグリ	上翅の小破片	
			エンマコガネ類	脚節、頭部	
			ガムシ類	上翅の一部	
			マダソコガネ	左上翅先端部	
			蟻?		
			甲虫類	上翅はか多数	
			甲虫類 (小型～微小)	上翅、頭部、胸部、脚など破片多数	6種以上
			エンマコガネ (あるいはコエンマコガネ)	頭部、右上翅	
			アオゴミムシ類? (アトキリゴミムシ類?)	右上翅基方1/3	
			ガムシ類?	上翅の一部	
I	SD03	b	甲虫類	上翅など	数種あり
			コアオハナムグリ	前胸背板の端部、小腸板	
			クロマルエンマコガネ?	右上翅	
			マダソコガネ類	前胸背板、上翅	小型種
			エンマムシの1種 (ヒメツアエンマムシ)	上翅	小型種
			エンマムシの1種 (ヒメツアエンマムシ)		小型種 (上とは別種)
			ゴミムシ (ヒタダゴミムシ?) の1種		
			甲虫類	上翅など	186と共通種が多い
			コタリガタ または スジタリガタ ゾウムシ?	前肢脛節+肘節	
			エンマムシの1種	左上翅基方	
I	SD06	c	コマルガムシ?の1種	前胸板2個	
			昆虫なし	左上翅	
			シロテンハナムグリ	小腸板ほか	
			オドマルエンマコガネ?	左後肢	
			甲虫類	上翅など	シロテンハナムグリより細長い
			シロテンハナムグリ	左中膝節	
			マダラテシキスイの1種	右上翅	
			ヒメコガネ類		
			甲虫類	上翅	2種2個
			マダソコガネの1種	左上翅2個	
I	SK02	d	ゲシガムシ?の1種	右上翅	
			ヒメサビキコリ	前胸背板	
			キノコゴミタシダマシの1種	前胸背	
			甲虫	上翅、胸部?	
			昆虫なし		
			甲虫	肢、上翅、頭部等	
			甲虫	胸部、後板他	
			コガネムシ類?	頭部	
			エンマコガネの1種	頭部、前胸背板、上翅、右後膝節+脛節	
			マダソコガネの1種	右上翅	大型種
I	SD08	e	マダソコガネの1種	上翅多数	小型
			ゴミムシの1種	左上翅基方半分	小型種
			甲虫	胸部	微小
			マダソコガネの1種	上翅17個体	2～3種が含まれる?
			マメコガネ	小さい右上翅	
			エンマコガネの1種	右上翅	クロマルエンマムシ
			エンマコガネの1種	右上翅	前種より小さい
			マダソコガネの1種	前胸背板	大型
			甲虫	上翅等数種	
			マダソコガネの1種	上翅7個体	小型、褐色
II	NR01	f	マダソコガネの1種	上翅	小型
			エンマコガネの1種	右上翅、肢、前、前胸背板	同一個体か?
			エンマコガネの1種	前胸背板	
			マダソコガネの1種	左上翅2個体	大型
			ヤスデの1種		
			ハエ類	頭部	
			コアオハナムグリ	左上翅、胸部の一部など	
			コガムシ	上翅の一部	
			アオオサムシ類	上翅の一部	
			アサスジキンカメムシ	頭部背面	
II	h	12番	甲虫	同上翅	
			シロテンハナムグリ?	破片	

化するにつれ、アカガシ亜属やサルスベリ属といった暖温帯性の広葉樹の花粉化石がほとんどみられなくなる傾向が追える。また、埋没林の樹種構成などを加味すると、当時低地ではニレ属・ケヤキ属・ハンノキ属・トネリコ属・スギ属など広葉樹主体の湿地林が覆っていたが、山地では広葉樹主体の植生から針葉樹主体の植生へと変化し、その後、低地においても湿地を好む広葉樹が減少していったと考えられている。今回の結果も針葉樹が主体を占め、これらの結果と類似する。長原遺跡の結果などと比較すると、ハンノキ属など湿地を好む広葉樹花粉化石が少ないが、これは当時の地形など局地的な要因に由来すると思われる。

種実遺体を見ると、H(第12層=長原16Bi?)からはミクリ属・ヘラオモダカ・オモダカ科・ホタルイ属・カヤツリグサ科の一部・ミズアオイ属・イボクサ・タデ属の一部・セリ科の一部などの水生植物が検出され、花粉分析結果と同様、堆積域に水湿地の存在が推定される。

・縄文時代

縄文時代の堆積物であるA・D地点では花粉化石はほとんど検出されなかった。A地点の試料番号13ではコナラ亜属が多産したが、これは先述したように花粉塊が多数存在することで過大評価されていると解釈できる。一方、花粉化石群集において花粉塊が多数確認される場合、その母植物が調査地点近辺に生育していたことを示唆することが多い。試料番号13が採取された第7層は、調査時の所見によれば、後背湿地の氾濫性堆積物を起源とするが、堆積期間中に植生に覆われるような比較的静穏な環境下で形成されたと推定されていることから、調査地近辺にコナラ亜属が分布していた可能性は高いと思われる。また、第7層はテフラ層序に基づいて長原第12A・B層に対比され、年代は縄文時代中期に位置づけられている。縄文時代中期の植生については、長原遺跡東北地区における花粉分析結果がある[渡辺正巳2001・2002a]。それによると、縄文時代中期には、縄文時代前期に分布を上げたアカガシ亜属やシノキ属・マテバシイ属などの照葉樹がさらに分布を拡げる。また、縄文時代中期前半頃にはコナラ亜属・スギ属・ヒノキ属が高率となる層準が存在することが確認されており、一時的に気温が低下した可能性が指摘されている。また、長原遺跡西端の「馬池谷」でも縄文時代の花粉化石群集が捉えられている[古環境研究所2001]。そこでは、縄文時代中期から弥生時代中期とされる層準で、照葉樹林域においてコナラ亜属の卓越する局地的な植生の存在が推定されている。以上の分析報告から、本遺跡周辺には落葉広葉樹のコナラ亜属が森林構成要素として分布していたことが窺える。今回のコナラ亜属花粉塊の多産は、これら既往の分析結果とも矛盾するものではない。

なお、大阪平野における縄文時代の花粉分析結果は[前田保夫1984]などにまとめられている。[前田1984]では、大阪平野地域の完新世の植生変遷を4つの森林期に区分し、古い時期より落葉樹林Ⅰ期・落葉樹林Ⅱ期・照葉樹林Ⅰ期・照葉樹林Ⅱ期を設定している。[Furutani Masakazu1989]・[古谷正和・田井昭子1993]では、花粉化石群集とその分帯が整理されている。

前田の落葉樹林Ⅱ期、古谷・田井のP1帯b亜帯は縄文時代早期以前に当る。本花粉主体の組成を示し、クマシデ属・アサダ属・コナラ属コナラ亜属・コナラ属アカガシ亜属・ニレ属・ケヤキ属・エノキ属・ムクノキ属・カエデ属・トチノキ属など豊富な樹種構成である。これらの樹種は、湾周辺の森林構成要素であったと考えられる。

前田の照葉樹林Ⅰ期、古谷・田井のP1帯のc亜帯は、縄文時代前～中期に相当する。この時期には、落葉樹が急速に減少し、アカガシ亜属を中核に、シノキ属・ヤマモモ属・マキ属などいわゆる「照葉樹林」を形成する樹種群が優勢となる[前田1984]。同様の変化は先述の長原遺跡東北地区でも確認されている[渡辺2001]。そこでは、落葉樹林から照葉樹林が優勢になる移り変わりは、アカガシ亜属とコナラ亜属の出現率が逆転するアカホヤ火山灰の降灰後であることが指摘されている。同様な傾向は六甲山南麓や生駒山麓でも確認されている[松江・七山2001など]。なお、暖温帯林(いわゆる照葉樹林)には上記に挙げた種類のほか、クスノキ科も重要な要素として挙げられる。ただし、クスノキ科は花粉外膜がきわめて薄く[Fægri&Iversen1989]、化石としては検出された事例はない。

縄文時代後～晩期は、前田の照葉樹林Ⅱ期の前半に当り、アカガシ亜属・シイ属中心の照葉樹林を基調にしながら、マツ属・スギ属・モミ属・ツガ属・コウヤマキ属・ブナ属・エノキ属・ムクノキ属が微増あるいは増加したとされる。今回の場合、B地点の第5(=長原9C)層で採取した試料番号23・24がそれに対応する。上位の23はアカガシ亜属が多く、針葉樹花粉を伴う点で前田のⅡ期前半と類似する組成を示す。一方、下位の24は、針葉樹花粉の割合がシダ類胞子の割合とともに高い。針葉樹花粉やシダ類胞子は、広葉樹花粉に比べて風化に強い[徳永重元・山内輝子1971]ことを考慮すると、化石の保存状態が悪い、相対的に針葉樹花粉が高くなったとも考えられる。ただし、長原遺跡NG00-11次調査成果でもコウヤマキ属の多産が確認されており、ツガやコウヤマキが平地でカシ林に混生したり、温帯針葉樹林を構成していた可能性が指摘されている[渡辺正巳2002b]ことから、地域的な拡がりをもった植生変化として捉えられるかもしれない。

第5層堆積後に形成されたNR01の埋土からは、大型植物遺体が種類数・個体数ともに多く検出された(表4、試料番号F)。特に、草本11種類に比べ木本33種類(針葉樹4種類・広葉樹29種類)と木本が多かった。カヤ・モミ属・ヒノキなどの針葉樹の葉は分解されにくく河川によって長距離運搬された可能性があるが、周辺の集水域にはこれらの針葉樹の存在が推定される。花粉分析結果でもこの時期針葉樹花粉が増加する傾向がみられたが、これとも調和的である。広葉樹は硬い核や種皮を持つ鳥獣散布型種実が多く、その大半は森林のエッジ(縁)環境に多くみられる植物である。ヤマグワ・カジノキ属・タラノキ・ニワトコなどの落葉中低木類やマタタビ属・ブドウ属などの落葉籐本類は、伐採地や崩壊地などに先駆的に侵入する植物で、クリ・アカメガシワなどの落葉小高木や常緑低木のヒサカキなどは二次林要素の樹木である。また、アサダ・ケヤキ・ムクノキ・トチノキは谷部などの水湿を好んで生える樹木で、イヌシデ・ナラガシワ近似種・アカガシ亜属・ホオノキ・キハダ・ムクロジ・クマノミズキ・エゴノキ属などの落葉高木は林縁部によくみられる。このように、針葉樹や落葉樹の種実が多く、林縁部や二次林に生育する種類が特徴的にみられる要因としては、土地条件の悪化が考えられる。縄文時代末から弥生時代にかけて、河内平野では降水量の増加に伴い河川の運搬作用が活発になり、谷の形成や河川の流路変更が各地で起ったと考えられている[地学団体研究会大阪支部1999]。このような状況の中で表土の流失などが起り、荒地でも生育可能な植物が増加した可能性がある。また、運搬作用が強まったことで、山地の植生に由来する種実が低地にまで運搬されてきたために木本が多い大型植物化石群集になったとも考えられる。一方で、人為的に森林が切り開かれて植生環境

が悪化した結果も考えられるが、これについては今後の情報の蓄積をまって検討をしたい。

・弥生時代

SD03・SD08の覆土で分析を行った。花粉化石群集をみると、SD03の試料番号42以外は類似した組成を示し、コナラ亜属・アカガシ亜属などの広葉樹やマキ属・モミ属・ツガ属・マツ属などの針葉樹花粉が検出された。大阪平野における弥生時代の花粉分析結果は多く、森林植生として、アカガシ亜属・シイ属中心の照葉樹林を基調にしながら、マツ属・スギ属・モミ属・ツガ属・コウヤマキ属・ブナ属・エノキ属・ムクノキ属が微増あるいは増加したとされる。このうち、マツ属の増加は人為的な植生破壊による影響、その他の温帯針葉樹林の増加は気候の冷涼化が原因と考えられている[前田1984など]。また、大阪湾沿岸部の花粉化石群集としては、アカガシ亜属が卓越し、シイノキ属・マキ属・ヤマモモ属を伴うとされる[古谷・田井1993, Furutani1989]。さらに、遺跡内での花粉分析結果をみても、堺市小坂遺跡[バリノ・サーヴェイ1992, 鈴木茂1992, 安田喜憲1992]や東大阪市宮ノ下遺跡[辻本裕也ほか1996]などで同様な結果が得られている。

なお、SD03ではコナラ亜属が多産する結果が得られており、上述したほかの遺跡と花粉化石群集が異なっている。コナラ亜属の生育環境をみると、クヌギやナラガシワのように河畔や低地に生育し、林を形成する場合がある。一方、同じコナラ亜属でも、コナラやアベマキなどの里山林は人為的な伐採や保護によって成立し維持される林である。これらはクリなどとともに二次林としては一般的であるが、花粉化石群集からは自然植生との区別がつきにくいのが現状である。今回のナラ類の多産が二次林に由来するのか、あるいは河畔林や湿地林としての局地的なナラ林の存在によるのかは現状では不明であり、今後の課題である。ただし、長原遺跡の特徴として、落葉広葉樹のコナラ亜属花粉の多産やナラガシワの堅果や核斗の多産が指摘されており[那須孝悌ほか1982]、今回の結果は瓜破遺跡周辺植生を考える上でも興味深い結果といえる。

大型植物遺体は木本に比べ、草本類が比較的多く検出された(表4、試料番号A～E)。木本のうち、マツ属複雑管束亜属は人里付近の山野に二次林を形成する常緑高木で、花粉分析結果でもこの時期微増することが確認された。オニグルミは水湿のある場所に好んで生える落葉高木である。また、キイチゴ属・ヤマグワなどの低木類も多い。草本類のほとんどが人里など明るい開けた場所に草地を形成する、いわゆる「人里植物」である。ほぼ類似した変化は花粉化石群でも認められることから、これらは遺跡周辺の植生を反映していると考えられ、より人為的に切り開かれた草地が拡大したことが推定される。

ii) 有用植物

大型植物遺体群には有用植物が認められる。エゴマ・メロン類は大陸から渡来した栽培種とされ、果実を食用できるが、弥生時代前期に瓜破遺跡周辺に持ち込まれた、あるいは栽培されていたと推測される。自生する有用植物では、木本類は堅果類のオニグルミ・ナラガシワ近似種・コナラ亜属・アカガシ亜属・クリ・トチノキが挙げられる。これらは、オニグルミ・クリ・アカガシ亜属の一部を除きアク抜きが必要であるが、食用・長期保存が可能で収量も多いため、古くから里山で保護・採取されてきた。カヤ・イヌガヤは種子が食用・油採に利用可能である。カジノキ属は果実が食用に、樹皮

が紙や布に利用できる。ツバキは種子が油採可能で、頭髮用・燈用・食用などに利用可能である。ムクノキ・ヤマグワ・マタタビ属・サクラ属の一部・キイチゴ属の一部・ブドウ属・ニワトコ・ガマズミ属などは、果実が多汁で生食が可能である。草本類では、アカザ科・セリ科・シソ属・ナス科の一部は野生品の採取・在来種の栽培・渡来種の栽培などの利用形態が考えられるが[青葉高1991]、今後種類の細分化ができれば詳細な検討が可能となる。これら自生する有用植物の多くは縄文時代後～晩期の堆積物から検出されており、当時利用された可能性がある。

iii) 昆虫化石

・旧石器時代

旧石器時代層準の資料はわずか2点である(表6、試料番号h)。甲虫上翅の小さな破片で分類は不可能であった。今回の資料では、上翅破片が現在も生育するシロテンハナムグリに類似するが、別種である可能性も否定できない。シロテンハナムグリであるとするれば、山地や人里近いところで生育する種類である。ただし、これらが最終氷期以前も同様な生態性を持っていたかどうかは不明で、現在の日本と異なった昆虫相も期待できる。

・縄文時代後～晩期

ガムシ類が産出していることで、環境としては止水域の存在が考えられる(表6、試料番号f)。ただし、遺体数が少ないことや堆積物の層相から考えると、堆積環境が池沼ではなく、周囲に存在した止水域から遺体が流れ込んで堆積した可能性が高い。遺跡から検出されるガムシ類は、大型のガムシがよくみられるが、今回はまったくみられず、かわりにコガムシなどの小～中型種が検出された。この傾向は、縄文時代後～晩期の堆積物だけでなく、弥生時代の堆積物にも共通した傾向である。

ハエ類は、羽化する前に囲蛹という蛹とよく似た形態を通過する。自然環境下では囲蛹が化石として残ることはほとんどないが、遺跡では囲蛹がしばしば検出され、しかも大量に見つかることもある。このような産状は人家の存在を示唆すると思われる。今回は1個のみの産出であったが、人間の痕跡に由来する可能性がある。

・弥生時代

弥生時代に入ると、出土する昆虫遺体が種類数・個数ともに増加する(表6、試料番号a～e)。試料によっては100個体以上の破片があり、体の各部分が含まれている。特に残りにくい頭部・胸板などもしばしばみられることから、現地性が高いと考えられる。また完形に近いものが、水洗選別によってバラバラになった可能性も考えられる。

遺体群集をみると、マグソコガネとエンマコガネが多いことが特徴である。いずれも動物や人の糞に集まる、いわゆる「糞虫」の代表的なグループで種類数も多い。遺跡からの検出例は多いが、今回の場合は小型種が大半を占める(ただしマグソコガネには大型種が1個体含まれる)のが特徴で、センチコガネやゴホンダイコクのような大型種はみられない。遺跡で多くみられる飛翔力の強いセンチコガネが見当たらないのは、多数の家畜を放牧するような状況がなかったためかもしれない。

個数は少ないが、複数のエンマムシがみられるのは興味深い。エンマムシは小型の昆虫で、一般に動物質の腐敗物に集まる。もし、大型動物の死骸が存在したのであれば、シデムシのようなさらに大

型の甲虫の出土も予想されるが、今回は検出されていない。おそらく、今回の出土昆虫は、集落に付随した小規模なゴミ捨て場や厩のような場所に生育していたのではないかと考えられる。

複数個体検出されているコアオハナムグリとシロテンハナムグリは、平地・低山地で最も普通な種類で、瓜破遺跡周辺に普遍的に生育していたのであろう。ヒメサビキコリは小型のコメツキムシで、これも人里に生育する種類である。

iv) 樹種構成と用材

木材は7種類が認められた。弥生時代前期および前～中期とされる試料では、常緑広葉樹のアカガシ亜属・落葉広葉樹のクスギ節・コナラ節が比較的多く、ほかにヒノキ・ムクノキ・ヤマグワが各1点認められる。このうち、器種が明らかな試料をみると、柄300がアカガシ亜属、部材255・257・321・323はヒノキ・クスギ節・ヤマグワである。アカガシ亜属とクスギ節は重硬で強度が高い材質である。特にアカガシ亜属は、大阪府内で行われた調査でも柱材・鋳・鋳・柄など強度を必要とする器種に多く認められ[嶋倉巳三郎1980・1984、伊東隆夫ほか1984、島地謙ほか1987a、バリノ・サーヴェイ1996]、今回の結果とも一致する。一方、ヒノキは木理が通直で割裂性が高く、加工が容易で耐水性・防虫性などに優れた材質を有する。大阪府内では、木棺・板材・建築部材等に確認例がある[島地謙ほか1987b、林昭三ほか1988、嶋倉巳三郎1990、バリノ・サーヴェイ1996]。本遺跡でも強度・耐水性・加工性などを考慮した木材利用が推定される。用途不明の試料ではコナラ節が多い。

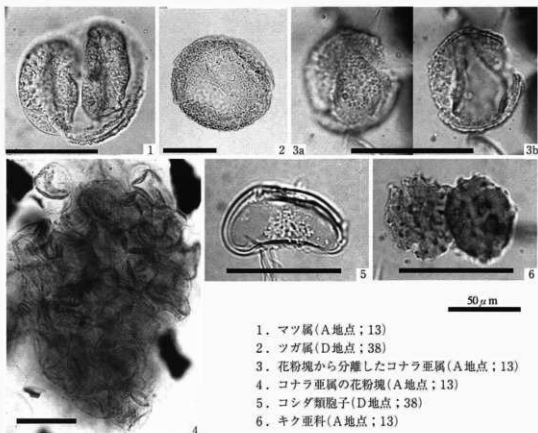
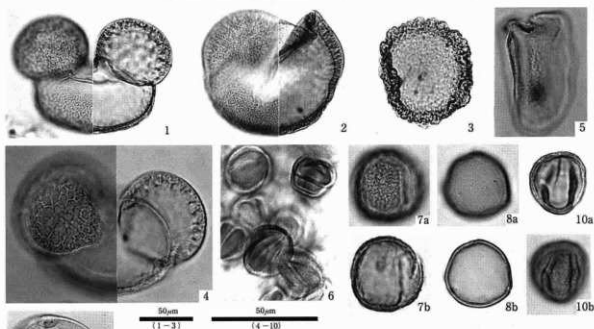
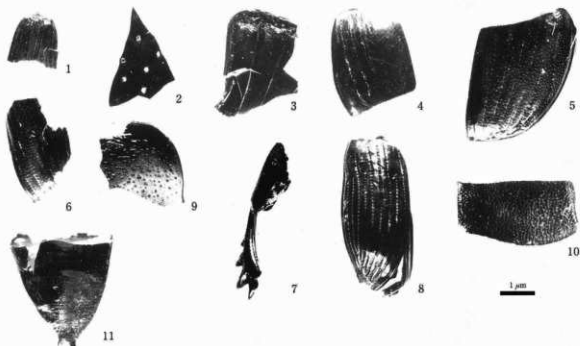


写真9 A・D地点花粉化石の保存状態



1. モミ属 (B地点; 23)
2. ツガ属 (D地点; 38)
3. カヤツリグサ科 (SK02; 47)
4. コナラ属コナラ亜属 (B地点; 23)
5. イネ科 (SK02; 47)
6. トウヒ属 (D地点; 38)
7. マツ属複雑維管束亜属 (B地点; 23)
8. ヨモギ属 (花粉塊) (SD03; 43)
9. エノキ属—ムクノキ属 (B地点; 23)
10. コナラ属アカガシ亜属 (B地点; 23)



1. アオゴミムシ類? 上翅 (SD03)
2. ガムシ類? 上翅 (SD03)
3. コガムシ 上翅 (NR01)
4. エンマムシの一種 上翅 (SD03)
5. エンマコガネの一種 上翅 (SD08)
6. クロエンマコガネ? 上翅 (SD03)
7. カドマルエンマコガネ? 前肢 (SD06)
8. マグソコガネ類 上翅 (SD03)
9. コアオハナムグリ 小楯板 (SD03)
10. ヒメサビキコリ 前胸背 (SK02)
11. ハエ類 開蛹 (NR01)

写真10 花粉化石と昆虫化石



1. マツ属植物葉片断面 疎葉 (SD06)
4. トナリノキ 種子 (NR01)
7. カラギシロ豆科植物 幼果・果実 (NR01)
10. ムタロシ 種子 (NR01)
12. オヤ 葉 (NR01)
16. オナモミ 種子 (NR01)
19. オナモミ 幼果 (SK02)
22. アサギ 果実 (NR01)
25. オヤ 果実 (NR01)
28. オハダ 種子 (NR01)
31. コナノキ 種子 (SD03)
34. マツノキ 種子 (SD03)
37. ノボリノキ 種子 (NR01)
40. カジノキ 種子 (NR01)
43. オナモミ 種子 (NR01)
46. ニワトコ 種子 (NR01)
49. ハナオモミ 果実 (第13期=NG16B)
52. カサノキ 果実 (第13期=NG16B)
55. ミズナギ 果実 (第13期=NG16B)
58. オナモミ 果実 (SD08)
61. マツノキ 種子 (SK02)
64. マツノキ 種子 (SK02)
67. マツノキ 種子 (SK02)
70. マツノキ 種子 (SK02)
73. マツノキ 種子 (SK02)
76. マツノキ 種子 (SK02)

2. オナモミ 種子 (SD06)
5. オヤ 種子 (NR01)
8. カラギシロ豆科植物 幼果・果実 (NR01)
11. ムタロシ 種子 (NR01)
14. オナモミ 果実 (NR01)
17. カサノキ 種子 (NR01)
20. ヒナギ 種子 (NR01)
23. コナノキ 幼果 (NR01)
26. マツノキ 果実 (SD03)
29. アサギ 種子 (NR01)
32. マツノキ 種子 (NR01)
35. マツノキ 果実 (SD03)
38. マツノキ 種子 (SK02)
41. マツノキ 種子 (NR01)
44. マツノキ 果実 (SD03)
47. ヒメムシロ 果実 (SD03)
50. オモミ 果実 (第13期=NG16B)
53. カサノキ 果実 (第13期=NG16B)
56. マツノキ 果実 (SD03)
59. マツノキ 果実 (SD03)
62. マツノキ 果実 (SD03)
65. マツノキ 果実 (SD03)
68. マツノキ 果実 (SD03)
71. マツノキ 果実 (SD03)
74. マツノキ 果実 (SD03)

3. トナリノキ 幼果 (NR01)
6. イモギ 種子 (NR01)
9. カサノキ 種子 (NR01)
12. モミ 葉 (NR01)
15. マツノキ 種子 (NR01)
18. マツノキ 種子 (NR01)
21. イモギ 果実 (NR01)
24. アサギ 果実 (NR01)
27. カサノキ 果実 (NR01)
30. マツノキ 種子 (NR01)
33. カサノキ 種子 (NR01)
36. カサノキ 種子 (SD08)
39. マツノキ 種子 (SK02)
42. カサノキ 種子 (SK02)
45. カサノキ 種子 (NR01)
48. イモギ 果実 (SD02)
51. マツノキ 果実 (第13期=NG16B)
54. マツノキ 果実 (SD08)
57. マツノキ 果実 (SD08)
60. マツノキ 種子 (SD03)
63. マツノキ 種子 (NR01)
66. マツノキ 種子 (SD08)
69. マツノキ 種子 (SD03)
72. マツノキ 果実 (SK02)
75. マツノキ 果実 (SK02)

写真11 大型植物遺体

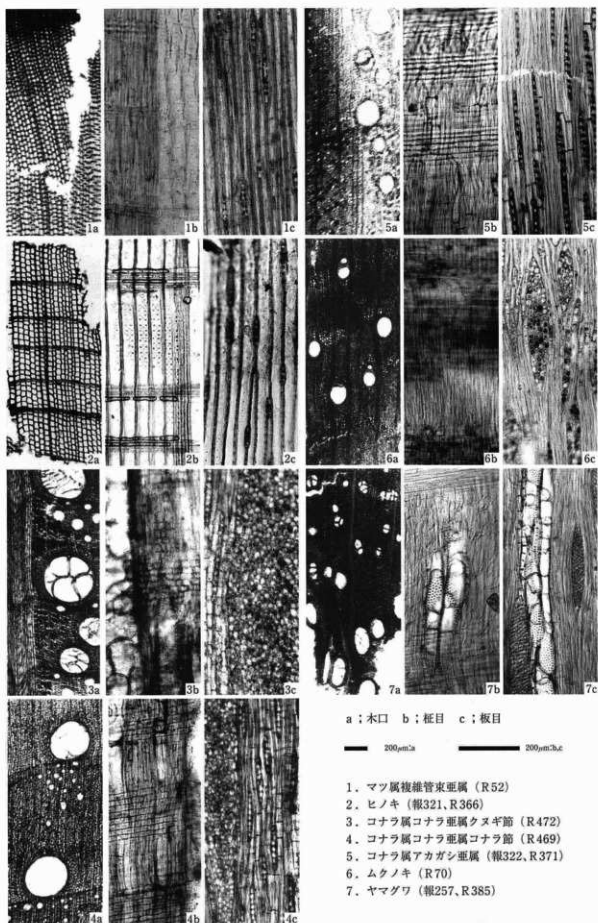


写真12 木材の細部

第2節 調査成果のまとめ

本調査地では当初、弥生時代の集落に係わる遺構が多数検出されることが期待された。しかし、大和川の開削とその後の浸食によって弥生時代の遺物包含層はすでに失われており、遺構についても深い土壌や大溝を確認できただけである。しかし、大溝は周辺調査で検出された溝と一連で環濠を形成する可能性が考えられ、瓜破遺跡における弥生時代の集落範囲を想定する材料を提供することになった。また、遺物もコンテナバットで25箱に及び、かつて「瓜破式」と呼称された畿内第Ⅰ様式後葉の弥生土器を中心に、石器や木製品など多様な遺物群の様相を把握することができた。また今回は、自然科学分野からの分析も行い、考古学的手法で得られた結果を裏付けるとともに、瓜破遺跡周辺の古環境復元に役立つデータを提供することができた。以下、時代ごとに成果を概観することにする。

旧石器時代 今回の調査では、中位段丘構成層上部から沖積層にいたるまでの地層の重なりを確認することができた。火山灰分析を踏まえた長原遺跡標準層序との詳細な対比作業など、検討課題は残されているが、瓜破台地西斜面部における地層の堆積過程と地形の変遷を知る上で、基礎的なデータとなろう。また、Ⅱ区では第10(=長原15)層および第12(=長原16Bi?)層でゾウの足跡化石を確認した。花粉分析では針葉樹林が増加する傾向がみられ、これまでに周辺の長原遺跡や山之内遺跡で得られた結果と同様の環境変化を追うことができた。種実には水生植物に伴うものも含まれ、堆積域に湿地が存在したことがわかった。一方、この時期に位置づけられる遺物は、Ⅱ区で検出した縄文時代の流路NR01から出土した国府型ナイフ形石器1とサヌカイトの剥片だけで、顕著な人間活動の痕跡は見当たらなかった。

縄文時代 これまでに周辺では、UR97-17次調査地点において第5(=長原9C)層に相当する地層から縄文土器が出土している[大阪市文化財協会1999a]が、今回の調査でも周辺に縄文時代の集落が存在する手掛りを得ることができた。Ⅰ区では、第5層中で縄文土器10とサヌカイトのフレイクが見つかった。Ⅱ区でも第7(=長原12A・B)層においてサヌカイトのフレイクがまとまって出土し、小規模な石器製作址があったと推測された。そのほか、早期にさかのぼると考えられる縄文土器8・9も出土した。ただし、縄文時代後期までは資料の出土のしかたが散発的である。一方、SD05・06など弥生時代の溝の埋土には、磨滅が少ない船橋式・長原式といった縄文時代晩期の突帯土器が一定量含まれていた。船橋式については、同じ西地区で行われたUR92-28次調査でも複数の資料が得られ、後出する長原式とは異なる胎土をもつことが指摘されている[大阪市文化財協会2000a]。長原式についてはこれまで瓜破台地東側での出土が多いことが指摘されてきたが、今回の調査で西側にも分布することがわかった。また、花粉分析においても、縄文時代後期から晩期にかけての堆積層で自生する有用植物が多く検出され、今後、瓜破台地の西側に縄文時代後期の集落が発見される可能性は高い。しかし、調査地周辺は縄文時代晩期までは流路が数多く存在し、頻繁に流れを変えているので、大規模な集落を営むために十分な土地が確保されたのは、SD01や02が埋没した縄文時代晩期から弥生時代初めごろ以降と考えられる。

弥生時代 I 区で見つかったSD05は、周辺調査(日本考古学協会・UR94-19次・UR96-12次調査地)において検出された大溝と一連で環濠を形成する可能性が考えられた。仮にこれらの溝をつなぐと、南北方向で300m以上に及ぶ集落が復元される。ただし、それぞれの調査で出土した弥生土器をみると、本調査と大和川北岸で行われた日本考古学協会の調査では大半が前期後半～中期初めに位置づけられるのに対し、南側のUR96-12次調査では中期前半でも新しい時期に主体があることから、時期ごとに集落内で中心地が移動した可能性がある。一方、II区では、第1層基底面で弥生時代に相当する可能性のある倒木痕が2個所で確認されただけで遺構は見つからなかった。縄文時代晩期に形成された第3～4(=長原9B)層が調査区西半で連続的に分布していたことを考慮すると、弥生時代の生活面から深く掘られた遺構があったならば検出できたと思われる。このことから、弥生時代の集落域は、台地の高い側に当るII区には及んでいなかった可能性も考えられる。

溝からは弥生土器が数多く出土したが、大半は破片でしかも底部がその大部分を占めていた。属性分析等の結果は、別稿で検討したいと思う。また、SD08や隣接するSK02からは、土器や木器といった考古資料のほか、糞虫をはじめとした昆虫化石、ウリなどの有用植物が多数出土した。当時の集落における生活環境を復元するうえで、これらは有効な材料となるであろう。

引用・参考文献

- Knut Fegri・Johs. Iversen 1989, "Textbook of Pollen Analysis", The Blackburn Press.
- 青葉高 1991, 『野菜の日本史』、八坂書房
- 足利健亮 1985, 「地形発達と地質」；松原市史編さん委員会編『松原市史』第一巻、pp.17-36
- 泉拓良・家根祥多 1985, 「北白川追分町遺跡出土の縄文土器」；京都大学埋蔵文化財研究センター編『京都大学埋蔵文化財調査報告』Ⅲ、pp.163-187
- 伊東隆夫・林昭三・島地謙 1984, 「鬼虎川遺跡から出土した建築用材の樹種」；東大阪市文化財振興会編『鬼虎川遺跡第7次発掘調査報告3』遺構編、pp.55-72
- 今里幾次 1942, 「畿内遠賀川式土器の細別について—河内西瓜破遺跡水門西地点調査概報—」；『古代文化』第13巻第8号
- 大阪市文化財協会 1980, 『瓜破北遺跡』
- 1981, 『瓜破北遺跡』Ⅱ
- 1983, 『瓜破遺跡』
- 1992, 『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲ
- 1995, 『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅳ
- 1999a, 「大阪市文化財協会発掘調査報告」—1996年度—、pp.19-44
- 1999b, 「大阪市文化財協会発掘調査報告」—1997年度—、pp.15-26
- 1999c, 「長原遺跡発掘調査報告」Ⅶ
- 2000a, 「瓜破・瓜破北遺跡発掘調査報告」
- 2000b, 「大和川瓜破遺跡埋蔵文化財発掘調査(UR00-11)完了報告」
- 2001, 「大和川瓜破遺跡埋蔵文化財発掘(その2)調査(UR01-17)完了報告」
- 2002a, 「瓜破遺跡発掘調査報告」Ⅱ
- 2002b, 「長原遺跡発掘調査報告」Ⅹ
- 大阪府立花園高校地歴部 1970, 「河内古代遺跡の研究」
- 大阪文化財センター 1976, 「大阪府高速大阪松原線建設に伴う瓜破遺跡試掘調査報告書」
- 大阪文化財センター 1991, 「河内平野遺跡群の動態」Ⅱ 北遺跡群旧石器・縄文・弥生時代前期編
- 小倉博之・吉川周作・此松昌彦・木谷幹一・三田村宗樹・石井久夫 1992, 「大阪府、上町台地南部の台地構成層と地形面の形成時期」；『第四紀研究』31、pp.179-185
- 加藤修・丹羽佑一 1973, 「遺物の検討 A土器」；滋賀県教育委員会編『湖西線関係遺跡調査報告書』、pp.18-30
- かながわ考古財団 1999, 「池子遺跡群」Ⅹ
- 鎌田博子 1987, 「瓜破遺跡」；韓式系土器研究会編『韓式系土器研究』Ⅰ、pp.46-47
- 関西大学考古学等資料室 1985, 「馬野繁蔵氏寄贈 瓜破遺跡採集資料報告[Ⅰ]」；『関西大学考古学等資料室紀要』第2号、pp.33-78
- 1986, 「馬野繁蔵氏寄贈 瓜破遺跡採集資料報告[Ⅱ]」；『関西大学考古学等資料室紀要』第3号、pp.17-84
- 1987, 「馬野繁蔵氏寄贈 瓜破遺跡採集資料報告[Ⅲ]」；『関西大学考古学等資料室紀要』第4号、pp.23-80

- 久保和士・宮本康治1997、「瓜破遺跡の弥生時代集落跡」：大阪市文化財協会編『華火』67号、pp.2-4
- 神戸市教育委員会ほか1993、『大開遺跡発掘調査報告書』
- 古環境研究所2001、「96-31・71次調査における自然科学分析」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XVI、pp.167-193
- 古代の土器研究会1992、『都城の土器集成』
- 小山正忠・竹原秀雄1967、『新版 標準土色帖』日本色研事業株式会社
- 嶋倉巳三郎1980、「思智遺跡から出土した木製品の樹種」：瓜生堂遺跡調査会編『思智遺跡Ⅰ』本文編、pp.204-206
- 嶋倉巳三郎1984、「山賀遺跡(その3)の出土木製品の樹種について」：大阪府教育委員会・大阪文化財センター編『山賀(その3)』本文編、pp.413-428
- 嶋倉巳三郎1990、「東大阪市鬼虎川遺跡から出土した加工木の樹種」：東大阪市文化財協会編『鬼虎川遺跡第1～3次発掘調査報告』、pp.54-56
- 島地謙・林昭三・植田弥生1987a、「鬼虎川遺跡出土木製品の樹種」：東大阪市文化財協会編『鬼虎川の木質遺物 第7次発掘調査報告書』第4冊、pp.39-67
- 島地謙・林昭三・伊東隆夫1987b、「鬼虎川遺跡より出土した棺材の樹種」：東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会編『鬼虎川遺跡第12次発掘調査』、pp.45-48
- 清水和明1998、「山之内遺跡における旧石器時代の古環境」：大阪市文化財協会編『山之内遺跡発掘調査報告』、pp.469-474
- 新修大阪市史編纂委員会1988、『新修大阪市史』第一巻
- 菅榮太郎1995、「石鏃資料の型式および製作技法の年代的検討」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲ、pp.367-388
- 杉原莊介・神沢勇一1961、「大阪府瓜破遺跡」：『日本農耕文化の生成』
- 鈴木茂1992、「小坂遺跡15Fトレンチの花粉化石」：大阪府教育委員会・大阪文化財センター編『小坂遺跡』自然科学・考察編、pp.525-533
- 鈴木秀典1982、「瓦器柄の編年」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.278-282
- 田中清美2000、「河内湾周辺における弥生時代文化の着床過程」：土器持寄会論文集刊行会編『矢野文と遠賀川』、pp.869-900
- 地学団体研究会大阪支部1999、『大地のおいたち 神戸・大阪・奈良・和歌山の自然と人類』
- 趙哲済1983、「瓜破・瓜破北遺跡の層序」：大阪市文化財協会編『瓜破遺跡』、pp.17-20
- 1995、「本書で用いる層位学的・堆積学的視点からの用語」：同上、pp.41-44
- 2001、「長原遺跡の地層」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XVI、pp.7-28
- 趙哲済・京嶋覚・高井健司1992、「長原遺跡の地形と地質の概要」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲ、pp.15-18
- 辻本裕也・伊藤良永・馬場健司1996、「古環境」：東大阪市教育委員会・東大阪市文化財協会編『宮ノ下遺跡第1次発掘調査報告書』第2分冊、pp.27-55
- 寺沢薫・森井貞雄1989、「河内地域」：寺沢薫・森岡秀人編『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ、pp.41-146
- 徳永重元・山内輝子1971、「花粉・胞子」：『化石の研究法』、pp.50-73 共立出版
- 中村純1967、『花粉分析』古今書院
- 那須孝徳・岡本素治・布谷知夫1982、「長原遺跡周辺の古植生」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』、pp.207

奈良国立文化財研究所1976、「平城宮発掘調査報告」Ⅷ 奈良国立文化財研究所第26冊

1993、「木器集成図録」近畿原始篇

日本考古学会1949、「考古学雑誌」第35—終巻号 口絵

林昭三・島地謙・植田弥生1988、「出土木製品の樹種(第4・5次)」:東大阪市文化財協会編「鬼虎川遺跡調査概要」Ⅰ
遺物編 木製品, pp.69-194

バリノ・サーヴェイ1992、「小坂遺跡における珪藻・花粉・植物珪酸体からみた古環境」:大阪府教育委員会・大阪文化財センター編「小坂遺跡」自然科学・考察編, pp.561-582

バリノ・サーヴェイ1996、「出土木製品の樹種」:東大阪市教育委員会・東大阪市文化財協会編「宮ノ下遺跡第1次発掘調査報告書」第Ⅰ分冊, pp.113-138

東住吉区役所1961,『東住吉区史』

平井勝1991,『弥生時代の石器』考古学ライブラリー64 ニューサイエンス社

藤下典之1984,「出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法」:古文化財編集委員会編「古文化財の自然科学的研究」, pp.638-654 同朋社

古谷正和・田井昭子1993,「大阪層群と段丘堆積層・沖積層の花粉化石」:『大阪層群』, pp.247-255 創元社

Furutani Masakazu1989, 'Stratigraphical Subdivision and Pollen Zonation of the Middle and Upper Pleistocene in the Coastal Area of Osaka Bay, Japan': Osaka City University "Journal of Geosciences" 32(4), pp.91-121

古谷正和1978,「大阪平野西部の上部更新統」:『地質学雑誌』84, pp.341-358

前田保夫1984,「花粉分析学的研究よりみた近畿地方の洪積(更新)世後期以降の植生変遷」:宮脇 昭編「日本植生誌 近畿」, pp.87-99 至文堂

松江実千代・七山太2001,「神戸市和田岬沖コアの花粉分析よりみた完新世中～後期における植生変遷」:『日本花粉学会第42回大会講演要旨集』, p.17

南秀雄1987,「瓜破遺跡で発見された7世紀の建物群」:大阪市文化財協会編「葦火」8号, pp.2-4

宮本康治1998,「瓜破遺跡の弥生時代方形周溝墓」:大阪市文化財協会編「葦火」74号, pp.4-5

文珠省三1986,「大和川河床出土の貨泉・鉢・台付無頸壺・蓋について—瓜破遺跡出土資料の紹介(一)」:『大阪市立博物館研究紀要』第18冊 大阪市立博物館

安田喜憲1992,「小坂遺跡の泥土の花粉分析」:大阪府教育委員会・大阪文化財センター編「小坂遺跡」自然科学・考察編, pp.519-522

家根祥多1981,「晩期の土器 近畿地方の縄文土器」:『縄文文化の研究』4 縄文土器Ⅱ, pp.238-248 雄山閣

山本博1940,「河内国大和川川床出土の弥生式遺物に就いて(一)」:『考古学雑誌』第30巻第11号

1941a,「河内国大和川川床出土の弥生式遺物に就いて(二)」:『考古学雑誌』第31巻第2号

1941b,「統河内国大和川川床出土の弥生式遺物に就いて」:『考古学雑誌』第31巻第7号

渡辺正巳2001,「長原遺跡東北地区における花粉・珪藻分析」:大阪市文化財協会編「長原遺跡東北地区発掘調査報告」Ⅳ, pp.79-88

渡辺正巳2002a,「長原遺跡東北地区における花粉・珪藻分析」:大阪市文化財協会編「長原遺跡東北地区発掘調査報告」Ⅴ, pp.87-96

渡辺正巳2002b,「NG00-11次調査に係わる花粉分析」:大阪市文化財協会編「長原遺跡発掘調査報告」Ⅸ, pp.56-65

あ　と　が　き

瓜破遺跡で発掘調査が始まってから、約半世紀の月日がたちました。開発の波とともに増加した発掘調査により、当遺跡のさまざまな側面が解明されてきましたが、意外なことに、もっとも知られた弥生時代の集落域の調査はこれまで数えるほどしか行われてきませんでした。今回の調査では、瓜破台地西側斜面において集落が形成されていく過程を考古学だけでなく、地質学・古生物学などの自然科学分野の研究手法も用いながら追求することで、より具体的な集落像を浮かび上がらせることができました。今回の報告書は、戦前・戦後におさめられた成果とともに、将来行われる調査の指針となることでしょう。しかし、報告書はひとつの区切りにすぎません。これらの資料を広く一般に活用されるように努めて参りますので、今後とも、皆さまのご協力・ご支援を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

(高橋 工)

索引

〈遺構・遺物に関する用語〉

- あ 足跡化石 6, 7, 66
- い 石匙 15
 - 石庵丁 21, 27, 31, 42
 - イネ科 53, 55
- う ウリ 67
 - 「瓜破式」 1, 66
- え 柄 41, 62
- お 近江型 25, 36
 - 大溝 66, 67
- か 瓦器 45
 - 花粉化石 47, 53, 55, 56, 58, 60
- き 鬼界アカホヤ 7
 - キザミメ 15, 16, 25, 26, 31, 32, 36, 37, 41, 42
 - 北白川上層Ⅱ式 16
 - 北白川上層Ⅲ式 16
- く 偶蹄目 10
 - 櫛描 26, 32, 41, 42
- こ 広葉樹 53, 55, 56, 58, 59, 60, 62
 - コガネ(ムシ) 56, 61
 - コナラ亜属 53, 55, 56, 58, 59, 60
 - 昆虫化石 18, 47, 56, 61, 67
- さ 細部調整 18, 21, 29, 41, 42
- し 滋賀里Ⅲ式 16
 - 種実 47, 50, 55, 56, 58, 59, 66
 - 条痕 15, 16
 - 縄文土器 10, 15, 16, 27, 45, 66
 - 照葉樹 58, 59, 60
 - 針葉樹 53, 55, 56, 58, 59, 60, 66
- せ 石鍾 25, 31
 - 石廬 10, 18, 27, 29, 41
 - 石斧 18, 25, 31, 43, 45
 - 石核 15, 29, 42
 - 石剣 21
 - 尖底 15
 - 尖頭器 18, 21, 41
- そ 搔器 6, 15, 21, 29
 - 燧 42
- た (畿内) 第Ⅰ様式 18, 26, 32, 41, 42, 45, 66
 - (畿内) 第Ⅱ様式 18, 26, 32, 41, 42, 45
 - (畿内) 第Ⅲ様式 26, 27, 29, 32, 41, 45
 - (畿内) 第Ⅳ様式 18, 26, 45
 - (畿内) 第Ⅴ様式 45
 - 敲石 25, 42
- ち 茶杓 45
- つ ツガ属 53, 55, 56, 59, 60
- と 土器棺 39
 - 土壙 4, 18, 29, 45, 47, 50, 66
 - 土製円板 18, 26, 29, 39, 41
 - 土製品 29, 37
 - 突帯文土器 3, 16, 66
- な ナイフ形石器 3, 10, 66
 - 長原式 16, 66
- に 二次林 59, 60
- は 土師器 43, 45
- ひ 平底 15, 16
- ふ 部材 29, 39, 43, 62
 - 船橋式 16, 66
 - 糞虫 61, 67
- へ 竪溝沈線 32, 37, 41
 - 片岩 21, 31, 42
- ま 磨製石器 31
- み ミニチュア土器 26, 32
- れ 簾状文 26

〈地名・遺跡名など〉

い	池子	42	こ	小坂	60
	生駒西麓	15, 16, 25, 37, 39, 42	た	大開	25
う	「馬池谷」	1, 2, 58	な	長原	1, 7, 47, 56, 58, 59,
	瓜破道跡	1, 2, 3, 5, 18, 47,			60, 66
		60, 62, 66	ひ	百間川今谷・兼基	31
	瓜破北	1, 2, 3, 4	や	山賀	37
	瓜破台地	1, 2, 3, 4, 66		大和川	1, 2, 3, 4, 5, 6,
お	鬼塚	25			7, 27, 45, 66
か	唐古・鍵	29		山之内	56, 66
き	喜連東	1			

**Archaeological Reports
of
Uriwari Site in Osaka, Japan**

Volume III

A Report of Excavations
Prior to repair works of the Yamato River
in fiscal 2000 and 2001

March 2003

Osaka City Cultural Properties Association

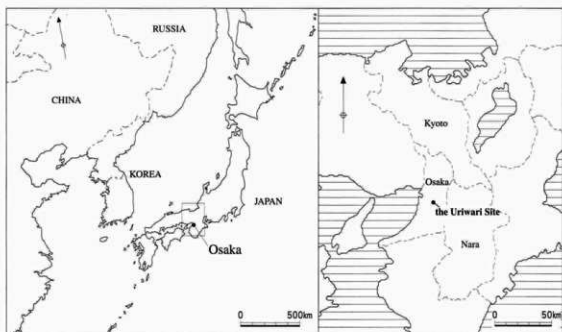
Notes

The following symbols are used to represent archaeological features, and others, in this text

SD : Ditch

SK: Pit

NR: Natural Stream



CONTENTS

Foreword

Explanatory notes

Acknowledgement

Chapter I The environment of the Uriwari site and the Investigation to date	1
S.1 Site Location and Historical Setting	1
S.2 Former investigation results in the Western Sector of the Uriwari Site	3
Chapter II Background and progress of research	5
Chapter III Investigation results	7
S.1 Stratigraphy of the investigation area	7
S.2 Features and remains of the Late Paleolithic to Jomon periods	10
1) Features of the Jomon period	10
2) Remains of the Late Paleolithic to Jomon periods	10
S.3 Features and remains of the Yayoi period	18
1) Features from the eastern part of I area	18
2) Remains from SD03(SD04) and SK01	18
i) SD03(SD04)	
ii) SK01	
3) Features from the western part of I area and river side area	27
4) Remains from SD05, SD06, SD08 and SK02	29
i) SD05	
ii) SD06	
iii) SD08 and SK02	
5) Features and remains after the Middle Yayoi period	43
6) Conclusion	45
Chapter IV Discussion of features and remains	47
S.1 Natural scientific analysis of the Uriwari site"UR00-11 · UR01-17"	47
1) Introduction	47
2) Samples	47
3) Method	50
i) Pollen analysis	
ii) Seed analysis	
iii) Tree identification	
iv) Insect identification	
4) Results	50
i) Pollen analysis	
ii) Seed analysis	
iii) Tree identification	
iv) Insect identification	
5) Consideration	56
i) Predication of old vegetation	
ii) Useful plant	
iii) Insect fossil	
iv) Tree composition and timber	
S.2 Report conclusion	66
References	68

Postscript / Index

English Contents and Summary

Extract

SUMMARY

In this volume, we report the results of excavations (UR00-11 and UR01-17) carried out at the Uriwari site in fiscal 2000 and 2001, prior to repair works of the Yamato River. The site is located in Hirano Ward in the southeastern sector of Osaka city, Japan.

Excavation areas (UR00-11= I area, UR01-17= II area) are part of the western sector at the Uriwari site, which geographically is situated on the Uriwari Terrace and the Kawachi alluvial plain. Materials dating between the Late Paleolithic and the Edo (18th century) periods were investigated during excavations. Especially Yayoi potteries are main finds. As a result, we can represent one phase of the paleo-environmental and historical changes which occurred in this area.

In the Paleolithic period, we confirm a series of strata formed upper Middle terrace and alluvial plain. According to pollen analysis, these strata contain a lot of conifer pollen. This is a phenomenon shared with the neighboring Yamanouchi and Nagahara site, and show that the climate grew colder at that time. On the other hand, there were little vestige of human activity in strata except for a blade and some flakes.

In the later and final Jomon period, a lot of natural rivers (and some ditches) flew through these excavation areas and an action of accumulation was very active. A little lithic concentration including stone sickle and some Jomon potteries excavated from the rivers. Among the Jomon potteries, Nagahara-style pottery vessels had majority, it was likely that a village existed around here in the final Jomon period.

In the Yayoi period, we excavated ditches and a burial pit at I area. Some ditches reached 10m wide and were possible to be those surrounding the settlement. From the ditches, a lot of Yayoi potteries, stone implements, wooden artifacts, insect fossil and plant remains were found, we got the data to restore the life and environment at that time. But the layers containing cultural remains after the Yayoi period had been lost by rebuilding the Yamato River (1704) and its erosion.

報 告 書 抄 録

ふりがな	うりわりいせきはつくつちようさほうこく3							
書名	瓜破遺跡発掘調査報告Ⅲ							
副書名	大和川改修事業に伴う発掘調査報告書							
編著者名	辻美紀・高橋工							
編集機関	財団法人 大阪市文化財協会							
所在地	〒540-0006 大阪市中央区法円坂1－1－35 TEL 06-6943-6833							
発行年月日	西暦 2003年3月10日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	道路番号					
うりわり いせき 瓜破遺跡	大阪府平野区 瓜破南1丁目	27126	－	34°35'56"	135°33'31"	20001018～010228 20011029～020308	1,032㎡ 850㎡	大和川南側河川敷 の改修工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		
瓜破遺跡	集落	旧石器時代				ナイフ形石器・剥片		
		縄文時代		溝・(自然流路)		石鏃・石匙・縄文土器(早期～晩期)		
		弥生時代		溝・土壇		打製石器(石鏃・掻器・尖頭器ほか)・磨製石器 (石庖丁・石剣)・弥生土器・土製門板		
		古墳時代		溝		土師器・弥生土器		

原 色 図 版



上段 弥生土器-「瓜破式」、下段 弥生時代の石器

图 版

調査区全景
(南西から)



NR01断面
(北壁西部、南西から)



NR01縄文土器
出土状況
(中央部、西から)





NR01西肩付近
第3層内石器出土状況
(中央部、西から)



第7層内
搔器5出土状況
(西部、南から)



第10層内
ゾウ足跡化石検出状況
(東部、南から)

南壁東部
(北西から)



南壁中央部
(北から)



南壁中央部
深掘りトレンチ内
(北から)





NR04
(東部、北西から)



NR05
(中央部東、北西から)



第5層上面検出状況
(西部、西から)

調査区全景
(手前SD02、東から)



SD01
(中央部、北東から)

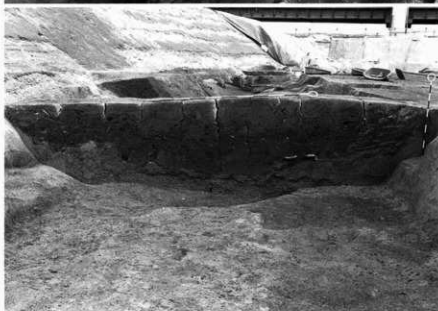


SD01東肩
流木出土状況
(中央部、西から)





SD03
(東部、南西から)



SD03断面
(東部、西から)



SK01
(東部、北から)

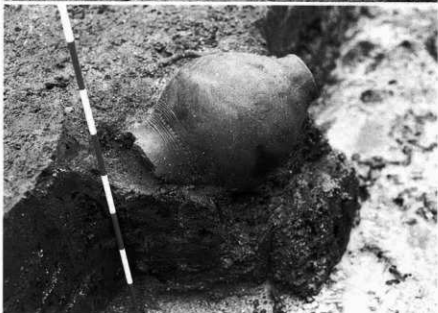
SD05
（西部、北から）



SD06（手前）とSD05
（西部、西から）



SD06弥生土器壺288
出土状況
（拡張区4 W、東から）





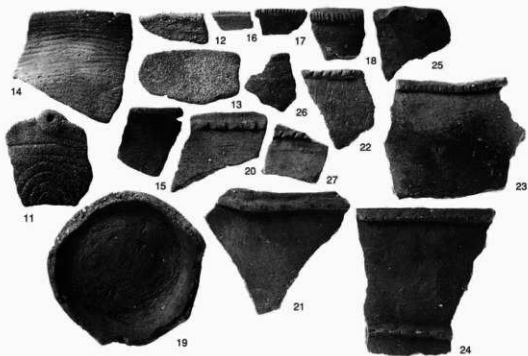
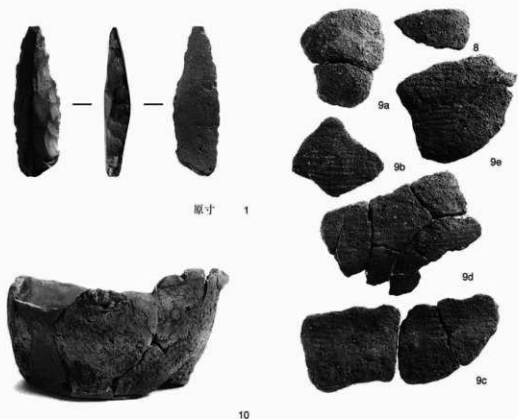
SD07
(西部、西から)



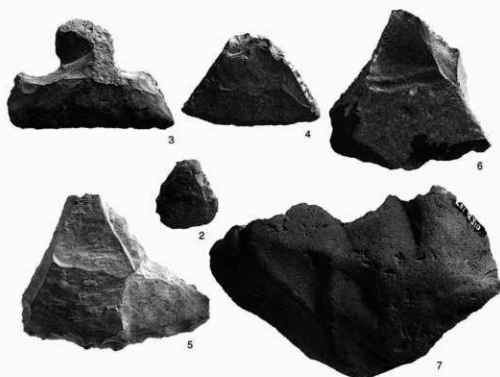
SD08・SK02
(手前はSD05、
川岸調査区、西から)



SD08・05合流地点
弥生土器出土状況
(川岸調査区、北から)

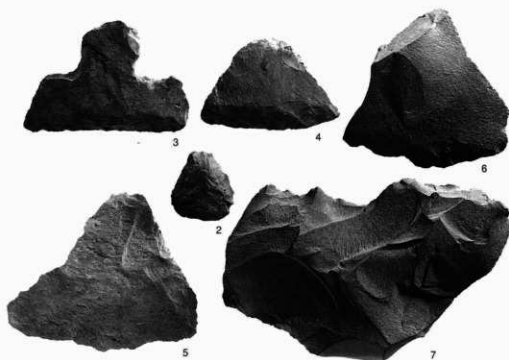


ナイフ形石器：Ⅱ区NR01(1)、
縄文土器：NR01(8・9)、Ⅰ区(以下省略)第5層(10)、SD05(11・16・20・23～26)、SD03(12・21)、SD06(13・15・17・18・22)、SD01(14)、SD02(19)、SK02・SD08(27)



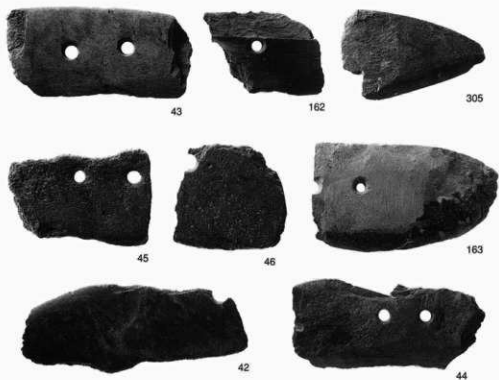
縮尺×3/4

(表面)

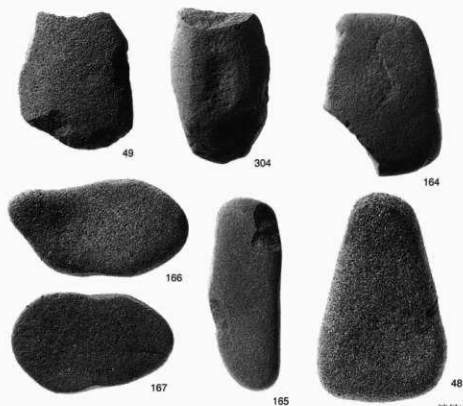


(裏面)

石鏃未製品：Ⅱ区第3層(2)、石匙：SD05(3)、搔器：Ⅱ区第7層(4・5)、Ⅱ区第3層(6)、
石核：Ⅱ区第3層(7)

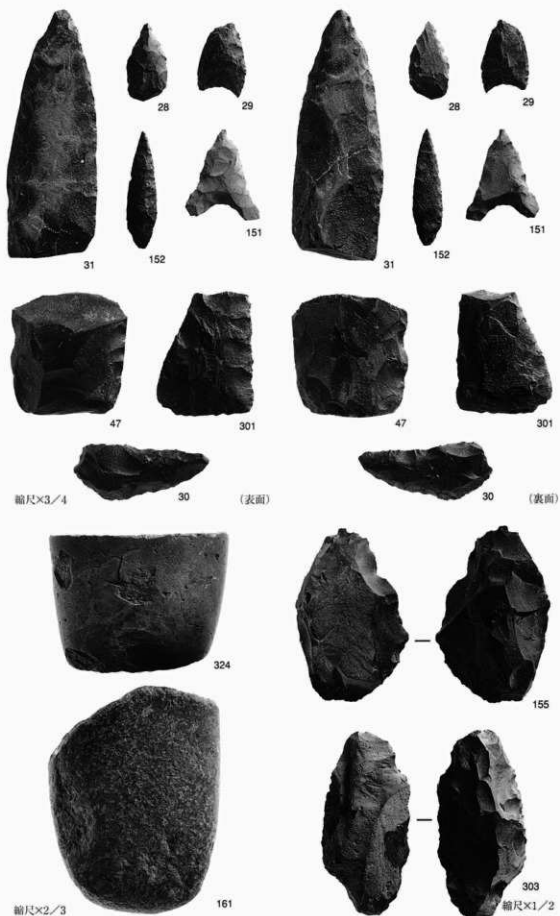


縮尺×1/2



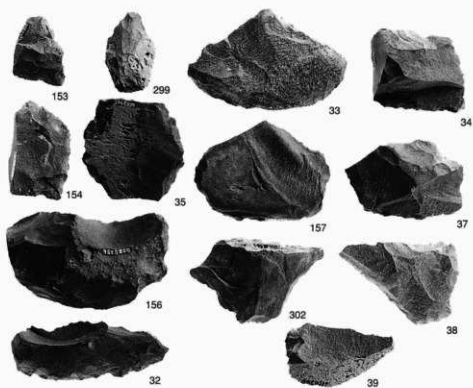
縮尺×1/2

上段 石廬丁: SD03(42~46)、SD05(162・163)、SK02・SD08(305)
下段 石斧: SD03(48)、SD05(164・165)、石錘または敲石: SD03(49)、SD05(166・167)、
SK02・SD08(304)

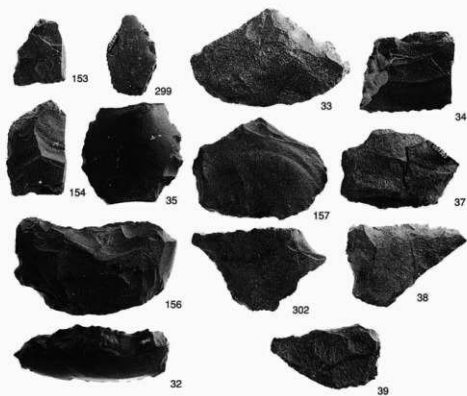


上段 尖頭器：SD03(31)、SK02・SD08(301)、石鏃：SD03(28・29)、SD05(151・152)、
 石剣：SD03(47)、削器：SD03(30)

下段 石斧：SD05(161)、第1層内(324)、石核石器：SD05(155)、SK02・SD08(303)

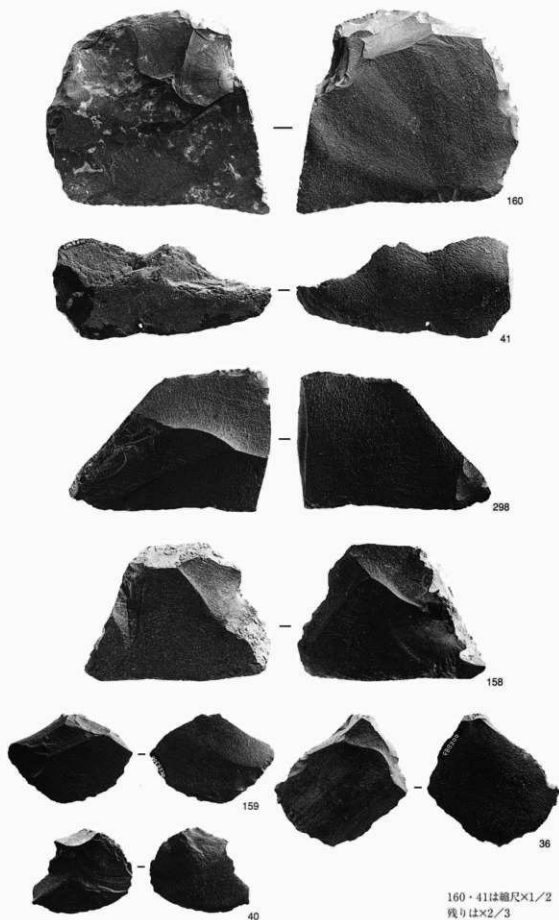


縮尺×2/3
(表面)



(裏面)

未製品と細部調整剥片：SD03(32～35・37～39)、SD05(153・154)、SD06(299)、
SK02・SD08(302)、石核あるいは石核石器：SD05(156・157)



160・41は縮尺 $\times 1/2$
残りは $\times 2/3$

細部調整剥片：SD03(36・40・41)、SD05(158~160)、SD06(298)



180



273



181



275



190



183



182



184



173



185



288



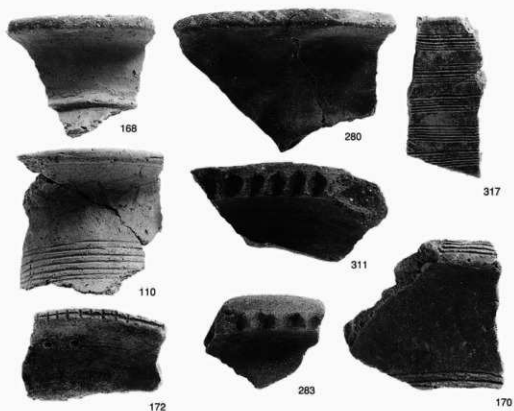
196



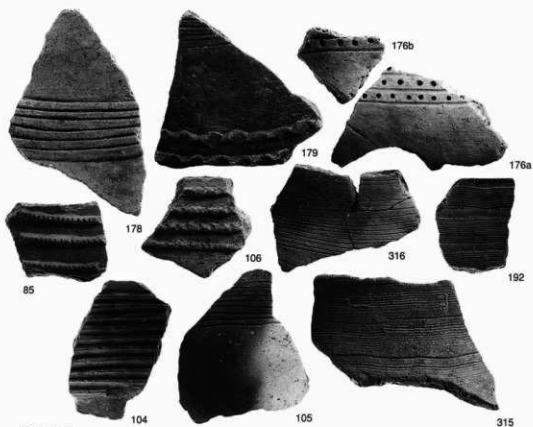
199



251



縮尺 $\times 1/2$



縮尺 $\times 1/2$

上段 壺口縁部：SD03(110)、SD05(168・170・172)、SD06(280・283)、SK02・SD08(311・317)

下段 体部文様：SD03(85・104~106)、SD05(176・178・179・192)、SK02・SD08(315・316)



307



74



308



310



242



53



258



1



306



259



244

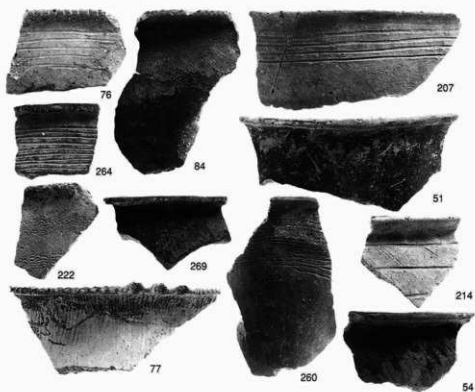


318

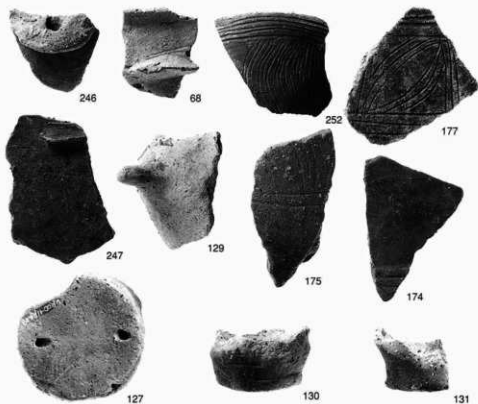


287

寛：SD06(258・259)、鉢：SK02・SD08(318)、蓋：SD05(244)、SK02・SD08(306)、
壺：SD06(287)

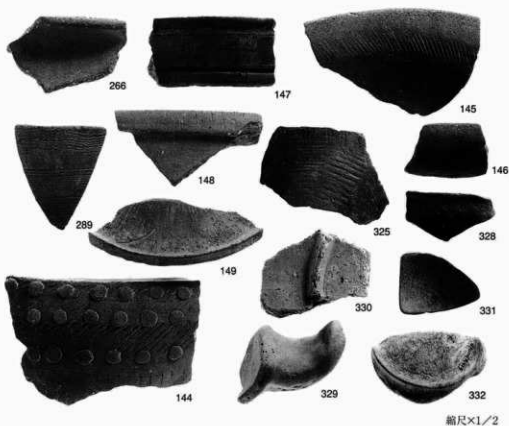
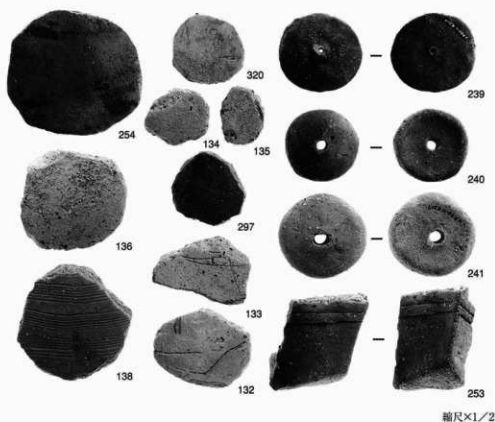


縮尺×1/2



縮尺×1/2

上段 甕：SD03(51・54・76・77・84)、SD05(207・214・222)、SD06(260・264・269)
 下段 把手(甕あるいは壺に付随)：SD03(68・129)、SD05(246・247)、鉢：SD05(252)、
 壺：SD05(174・175・177)、底部：SD03(127)、ミニチュア土器：SD03(130・131)



上段 土製円板：SD03(134～136・138)、SD05(254)、SD06(297)、SK02・SD08(320)、
線刻土器：SD03(132・133)、紡錘車：SD05(239～241)、不明土製品：SD05(253)
下段 弥生土器：SD03(144～149・325)、SD06(266・289)、土師器：SD03(328)、SD05(329
・330)、第1層(331)、瓦器：SD06(332)



槿：SK02(322)、部材：SD05(255～257)、SD06(300)、SK02(321)、SD08(323)

大阪市平野区 瓜破遺跡発掘調査報告Ⅲ

ISBN4-900687-66-9

2003年3月10日 発行 ©

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540-0006 大阪市中央区法門坂 1-1-35

(TEL.06-6943-6833 FAX.06-6920-2272)

<http://www.occpa.or.jp/>

印刷・製本 岡村印刷工業株式会社

〒558-0004 大阪市住吉区長居東 3-4-17

**Archaeological Reports
of
Uriwari Site in Osaka, Japan**

Volume III

A Report of Excavations
Prior to repair works of the Yamato River
in fiscal 2000 and 2001

March 2003

Osaka City Cultural Properties Association

**Archaeological Reports
of
Uriwari Site in Osaka, Japan**

Volume III

A Report of Excavations
Prior to repair works of the Yamato River
in fiscal 2000 and 2001

March 2003

Osaka City Cultural Properties Association